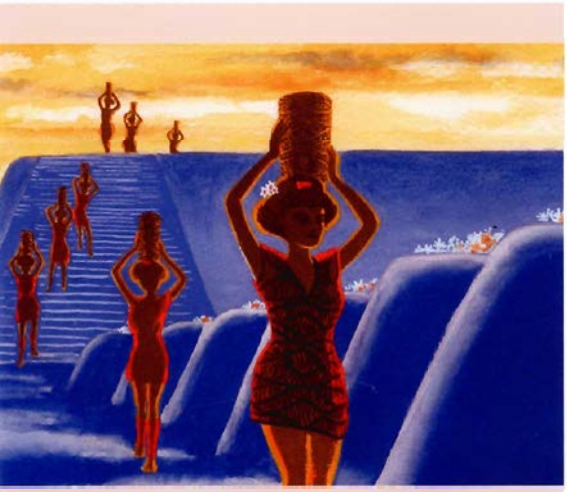


葬式革命

坊さんのいない葬式

佐藤眞生

葬式や法事をめぐるトラブルが後を絶たない。
仏教がすでに歴史的役割を終えてしまい、
葬式産業に成り下がってしまったからだ。
葬式仏教といわれて百年が経つ。
寺は人間が生きる力を育む場所だったのに、
今では人々の無知を前提にした
たかり産業になってしまった。

第1章　喪主体験記

著者・佐藤眞生の場合

九十五歳の父を新潟から大阪の茨木へ引き取って八ヶ月目に、父は逝ってしまった。

父は歩けたし、用便も自分で出来た。ただ、左眼が殆ど見えず、昼夜が逆転していた。それに食事の好き嫌いがあって食べないものが多かった。そんな状態で、在宅介護とデイ・サービスを一ヶ月続けたが、われわれ夫婦がもたなかった。そこで老健施設へ入ってもらった。そこが大変なところで、父に言わせると〝無政府主義の施設〟であった。メガネはなくなる、入歯はなくなる、ベルを押してもスタッフが来ない、父のことを聞いても解るスタッフがいない、というわけである。とうとう父はハンガー・ストライキをしてしまった。この老健は病院への入院を勧めたが、その病院が系列の悪名高いところだったので拒否した。すると退所せよということになった。二ヶ月ここにいて病院へ入院した。病院で二ヶ月リハビリをして元気になったので、今度は九人しか収容しないというグループ・ホームへお世話になった。男が一人だけで、食事が合わなかった。一週間で体調を崩し、再び入院。三週間のリハビリでグループ・ホームへ復帰したが、また一週間して食事を摂らず発熱、施設の契約医師が診察もせずに入院

を指示してきた。立会いで診察を求めると、点滴をしてくれた。ところが、看護師のいない施設、一般職員に点滴の後処理を任せてその医師は帰ってしまった。翌日再々入院をさせたが、これが命取りになったように思う。四ヶ月以上入院したまま病院で息を引き取った。死因は敗血症だった。末期の大腸癌を患っていたが、これが死因ではなかった。多分、グループ・ホームで素人が点滴の後処理をしたことが敗血症の原因だったのだろう。老人施設の杜撰（ずさん）さに怒りを覚える。

二〇〇五年一月十五日、午後十一時過ぎに病院から連絡を受け急行した。言葉はなかったが私が手を握ってしばらくすると静かに息を止めた。

当直医の死亡診断があって、すぐに市役所へ電話をした。翌日の斎場の予約ができた。病院に死亡診断書をお願いし、父の遺体を霊安室で預かっていただくことにして一旦帰宅した。

明けて十六日早朝に市役所へ飛んだ。お通夜と告別式の予約をし、火葬の手続きをし、直後に知り合いの寺と葬儀社を決めた。

以下は私の無知の即断即決がいかに愚かであったかという反省である。

（1）日常的に死を避けない

いつも家族で死を話題にしておいた方がいい。「縁起が悪い」といって避けずに、普段の会話でとりあげていると、死を受け容れやすくなる。人が生きるということは死に向かうということだから、死を直視すれば今を大事に生きることにつながる。

（2）死の手続き

○ 医師の検死がすんだら、すぐに市役所の「市民生活課」へ電話する。休日や時間外の時は「守衛室」へ電話する。茨木市には市営葬儀があるので、これを使うことにすれば式場と斎場の予約をしてくれる。

○ 医師の「死亡診断書」をもらい、すぐに市役所へいく。休日・時間外を問わず対応してくれる。通夜と告別式の日時を決め、市民生活課で「市営葬儀使用許可書」と「斎場使用許可書」、市民課へ死亡届を出して「埋火葬許可書」をもらう。

○ ついでに市の関連部課を一巡する。国民健康保険脱退（三万円の給付がある）、国民年金

脱退（住民票・戸籍謄本の無料提供がある）、介護保険証返還、老人医療保険証返還（高額医療還付の相続人手続）、印鑑登録カード返還。社会保険庁で厚生年金の脱退手続。

○ 固定資産税・市府民税・下水道受益者負担金などの税金の基準日は一月一日になっている。一月一日に所有者であり住民であれば、その期の税金は払わなければならない。つまり、一月二日に不動産を売り、他の市町村へ転出しても、税金はかかるのである。

○ 遠方の役所へ戸籍謄本や除籍謄本を請求する場合、「郵便による請求書」を使うことができる。これは最寄の役所でもらえる。費用は定額小為替を郵便局で買い（手数料が小為替一枚につき十円必要だが）、切手を貼った返信用封筒とともに同封して、役所の市民課へ送ればいい。

○ 市民生活課では、葬儀会社（市が業者を指定している）と坊さんを聞かれる。これらを使うかどうかを予め決めておくべきだった。葬儀会社や坊さんを使わなくても葬式はできる。使うなら予めどこへ頼むか決めておくといい。ただし、坊さんは寺の住職でなくとも坊さんの資格を持つ民間人でもいい。坊さんの読経は単なる形式にしか過ぎないので……。

○ 市に支払う費用は、「飾り付けと火葬・遺影写真・ドライアイス・祭壇」（父の場合九万八千円）、「式場・控室」（父の場合最大の式場で十三万四千円）。霊柩車は市にもある

が搬送範囲が限定されるので葬儀会社の方が便利である。
○告別式当日に「初七日」をする場合には、その室料が別にいる（父の場合八百円）。

（3）葬儀会社との折衝

葬儀会社のいいなりにならないように、普段からどんな費用が発生するか調べ、インターネットなどで相場をみておくといい。
父の場合の費用と後悔をまとめておく。
○〝スロープ〟という祭壇の菊の花代・・・三十五万円。最短期日を優先したので、密葬なのに空いていた最大の式場を予約した。祭壇が大きすぎた。この菊の花は突飛なくらい高い。質素に徹するのがいい。
○献茶婦（二名×二日）・・・六万円。密葬なら一日一人で充分である。
○生花（親族一同）・・・五万二千五百円。質素に徹するのがいい。
○盛かご（孫と曾孫一同の二組）・・・三万千五百円。質素がいい。
○粗供養（商品券千円×五十枚）・・・五万円。葬儀会社はモノを勧めるが商品券の方がいい。
○回転灯・蓮華（各一対）・・・二万一千円。買わされたが普段家では不要のもの。

○フトンセット・・・一万五千円。
○後飾りセット・・・一万五千円。
○葬儀小物・・・一万円。
○外回り一式・・・七千円。
○粗供養封筒代・会葬礼状（各五十組）・・・七千円。
○移送料（病院から斎場まで）・・・一万三千円。
○骨箱・・・六千円。
○カラー写真差額・・・八千円。既に市へ支払っているのに訳が解らない金である。高い。

葬儀会社への支払いは消費税を含めて七十五万三千七百五十五円。兎に角高い。ぶったくりである。無知のコストだという人もいるが、日頃からの準備が必要である。

以上のほかに、通夜の宿泊や飲食の費用がある。
○貸布団・貸毛布（七セット）・・・一万四千七百円。
○飲食代（都合十一名分）・・・七万一千五百五円。

これは市の別会社への支払いで、合計八万六千二百五円。

（4）坊さんとの折衝

葬式で稼ごうという坊さんが殆どである。いいなりになってはいけない。

父の場合、通夜と告別式と初七日で合計四十二万円取られた。その内訳はこうである。

○導師お布施・・・二十五万円。
○役僧お布施・・・十万円。
○お膳料・お車代・・・四万円。
○初七日お布施・・・三万円。

坊さんのこんなセリフには要注意である。

「一人で葬式をしたことがない。お布施が欲しいわけではないが役僧と脇僧がいる。キチンとするなら導師・一、役僧三、脇僧四になる。」・・・密葬なら導師一人でお願いすればいい。

「お布施は寺の収入にはならない。檀家の会計（ハコという）に入る。」・・・施主には無関係なこと。

「ウチは戒名料はとらない。」・・・どこかに必ず乗せている。

「卒塔婆は一枚三万円かかる。」・・・卒塔婆は不要と断ればいい。

「過去帳はただで書き直してあげる。」・・・どこかに乗せる筈。僧侶でない書家に頼む方

がいい。

「お骨はいつでもただで預かる。」・・・やばい、やばい、ただほど高くつくものはない。

私は、当初依頼した坊さんに、通夜・告別式と初七日、それに四九日だけをお願いし、後は別の坊さんにお願いした。最初の坊さんを一問一答のあと解約し、二人目の坊さんと再契約した。この最初の坊さんは、私が解約を申し出ると、「そんなややこしいことをしたら、誰もこない」と棄て台詞を残したが、訳を話してお願いすると、「そんな坊さんがいるから仏教は誤解される」と憤慨されて、快く引き受けていただいた。

予めインターネットなどで調べれば相場がわかる。それに、お布施は「与える者の応分」と「感じるありがたみ」で与えるもの、坊さんに請求されるものではない。「納棺夫日記」（青木新門著・文芸春秋）には次のようにある。「布施とは菩薩道を歩む僧侶の生の維持を願う無償の行為である。釈迦が菩提樹の下で生の維持が極限にあるとき、見知らぬ少女から施された一杯の牛乳こそが、布施というものであろう。」

坊さんにお布施がいくらかと聞くのはやめた方がいい。葬儀会社に寺のお布施を聞くのもよ

くない。彼らは談合している。

大阪の最近の相場は次のようである。

○通夜・告別式・初七日・・・お布施・お車料・お膳料込み　八万～十万円

○満中陰（四九日までの法事）・・・お布施　三千～五千円（お車料・お膳料なし、家・寺不問）

○三十五日で切り上げる場合と満中陰・・・お布施　三万円に、お膳料　五千円

○百ヶ日・・・お布施　一万円に、お膳料五千円

○初盆・・・お布施　一万円

茨木市では毎年、二五〇〇～二八〇〇人が生まれ、一一〇〇～一四〇〇人が死んでいる。寺の数は九八、神社の数は六八、ほかにキリスト教の教会もある。葬式はどこでもできる。寺が葬式で経営できる筈がない。馬鹿なぶったくりはやめていただきたい。

（5）斎場との折衝

市営葬儀なので市の職員が勤務時間内は担当する。時間外になると葬儀会社に委託する。も

たれあいになっている。全てを市の運営にすればもっと費用が節約できて使いやすくなる。

○斎場へ「市営葬儀使用許可書」「斎場使用許可書」「埋火葬許可書」を提出する。

○許可書の前二種は写しをくれる。埋火葬許可書は原本を返してくれる。埋葬の際に寺へ提出する。

○通夜の時間の確認、初七日の手続、食事・寝具・貸衣装の申込は式の四時間前に行う。

○告別式の打ち合わせは、式の一時間前に行う。告別式・出棺・火葬・精進あげ・骨上げ・初七日の時間、焼香の順番、弔電披露の方法、喪主挨拶などの打ち合わせである。

（6）密　葬

故人を直接よく知る人々だけで葬式を行う、そして香典は辞退する、いわゆる密葬である。父の場合にも密葬を行った。これを完璧に行うのは至難である。

招かれざる会葬者が来る、香典や供花やお供え物が後日延々と届く、告別式後に家へお参りに来る、なかなか仕切りができないのである。

教訓一　家族と内輪の会葬者に百ヶ日が過ぎるまで緘口令を徹底する。

教訓2　遠方の親族にも百ヶ日が過ぎるまで緘口令を徹底する。

教訓3　葬儀会社と坊さんにも他人に口外しないことを誓ってもらう。

教訓4　親族以外の香典・供花・供物は固く辞退する。

教訓5　香典返しはしない。

教訓6　満中陰（四九日）の挨拶はせず、百ヶ日に挨拶状を送る。時間が遺族の意図を認めてくれる。挨拶状には故人の生涯を簡潔に跡づけ、故人が伝承したかったことをしるすのがいい。

教訓7　家族の服喪期間は満中陰（四九日）までとする。密葬だからこれで普段に戻ればいい。

（7）法　事

○仏教では、人が死んで、霊が仏になるまでに死の前日から数えて四九日かかるとされている。この四九日を中陰といい、四九日が過ぎることを満中陰という。四九日の間、七日ごとに裁判官が替わって六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天）といわれる仏の道のどこへやるか審査するとされている。

○さらに、百ヶ日から後に続く年回忌は仏の修行の段階を示すといわれる。

○その真偽はどうでもいい。霊が仏になる審査、仏になってからの修行、これは生きている人間の己を磨く鑑にすればいい。身内が死んだときに、己を見直す機会が与えられていると思えばいい。そう思えば死んだ人間は生きている人間に素晴らしい言い伝えを残していることになる。私は父が逝ってから、四九日の法事と、その後の百ヶ日・年回忌を、生きている人間の生き方の見直しと、三十代遡れば一億人になるというつながりの確認の機会にしたいと思っている。法事は、私のように宗教人でなくとも、大きな意味があるのではないかと思う。

○そんなわけで、霊が仏になるとされる審査期間の四九日は全部した。初七日・二七日・三七日・四七日・五七日・六七日・七七日の七回の法事である。自宅でするのが妥当である。
○仏の修行は百ヶ日・初盆・一周忌（満一年目）・三回忌（満二年目）・七回忌（以後数え年で数える）・十三回忌・十七回忌・二十五回忌・三十三回忌と続き、宗派や教派によっては二十三・二十七・四十三・四十七・五十まで勧めるが、これは日本だけの展開で、お布施稼ぎである。私は遺族の悲しみや喪失感からの立ち直り期間として一周忌か三回忌までいいと思う。その後は、春と秋のお彼岸、それにお盆の墓参りをいい風習として残したいと思っている。

○「祥月命日」という法事もあるが、これは毎年1回めぐってくる亡くなった日のこと。法事をするというよりは、家族だけで故人の命日に仏壇に花を供えてお参りするという心づくしの方がいいと思う。

○「月忌」という亡くなった日に毎月行う法事を勧める宗派や教派もあるが、これはあまり意味がない。お布施稼ぎの臭いがするのでのらない方がいい。

（8）父の伝承

私は父のことを殆ど知らない。一緒に生活していた18年間で覚えているのは母との諍いぐらいだし、大学へ入ってからは全くといっていいほど交流がなかった。新潟にいる父と京都の私との間に、年数回の交流が復活したのは1990年の暮以降である。父が80代になってからである。

父を我が家へ引き取ってからは、精々父の生涯の足跡を辿ってみた。おぼろげに何をしていたかは知っていても、その中味までは知らなかったから・・・。

父が亡くなってからの葬礼は、父が後世に何を伝えたかったのかを知る機会にしようと思い立ち、残されていた書籍や資料を丹念に調べた。

○小学校の教師として

一九一〇（明治四十三）年一月一日生まれの父は新潟師範学校を卒業するとすぐ小学校の教師になった。一九三七（昭和十二）年、私の母と結婚するが、結婚の翌日単身渡鮮している。父はこのことを人生の無駄だったと言っているが、仁川や京城付近で国民学校に勤務し、朝鮮人児童の教育に携わった。子どもたちに生命のありようや自分自身の生き方を考えさせようとしたのか、小学四年生を屠殺場見学に引率している。牛が殺され、解体されるさまをまざまざと見せつけられた子どもたちの中から、これが契機となって医学の道に進んだ森下敬一博士や、アメリカの実業界で名を馳せている丁圭百氏などが輩出している。余程ショッキングな教育手法だったようである。

○あららぎ派の歌人として

父は二十代から短歌を詠んでいた。短歌に集中していた時期は二十代と六十代のそれぞれ五

年間だったと本人は述懐しているが、確かに作品にはこの頃のものが多い。後年には口語短歌、父の言う〝話しことば歌〟へ傾いている。私を題材にした作品がひとつだけある。

「長男眞生（マオ）のために」

やわらかく　ふとく
あたたかく　つよく
真理を愛して　真理に執われず
真理を貫いて　しかも生活の真を喪わない
眞生という名は　そういう名です

どういう方向でもいい
ただ　この世の中の
ほんとうのことを探り究めるための生涯であれ、
これが　お前の名にこめた
親達の唯一の願いである

眞生、
この文字と言葉の持つ
すべての意味、すべての韻（ひびき）において
お前は　人となれ、
眞生、
そういうつもりで、
この名は選ばれたのだ

ペンネーム・砂虔之介の名で「わが若き日の」という歌集が編まれている。また、その出版記念誌として「８３記録」が多くの人々の稿をいただいて発刊されている。

○登山家として

朝鮮で三歳の頃から泣きじゃくりながら山歩きに連れていかれたとか、漢江という向こう岸の見えないような大河に投げ込まれて泳ぎを教わったとか、私には記憶がないが母に聞かされたことを覚えている。山登りは好きだったようだ。多分、私は山で野生のままで生きる術を教

わったのだろう。高校生の時には山岳部だったから……。

○共産党の市会議員として

一九四五（昭和二十）年、朝鮮から引き揚げ帰国した。国民学校教師に復職し、小学校、中学校と転じるが、敗戦による民主化と生活苦の中で次第に政治活動に関心を深め、一九四六（昭和二十一）年共産党へ入党。政治活動が原因で県教育委員会から辞職勧告を受けるに到り、休職処分、そして法廷闘争へ、最高裁までいって、結局は示談となり復職が認められるが一九五三（昭和二十八）年父は依願退職した。

困っている人々のお世話をしながら、新潟県新発田市の市会議員に初挑戦したのが一九五五（昭和三十）年、二回目も落選、三回目の一九六三（昭和三十八）年八六五票・一五位（定数三六名）で初当選した。保守的な田舎町で初めて共産党の市会議員が生まれた。父は筋金入りの共産党員というよりは正義派だった。困っている人を助けることに徹していた。自宅はいつも相談所になっていた。自分のことはいつも最後にして、人のために無心で動いた。選挙で勝ったのは思想や政策ではなく、人助けの結果だった。そのために、共産党から一時除名処分さえ受けている。私の母ともこの人助けが原因で離婚した。母は「酒や女ばかりが道楽ではな

い。家計や家族のことを放ったらかして、人の世話ばかりしているのも道楽だ。」と言っていた。

父は一九八三（昭和五十八）年まで五期・二十年間市会議員をしていた。この間の活動は「わが闘いの日の」（上下巻）という本になっている。

○義民顕彰活動家として

新発田領中之島組六二ヶ村の名主・大竹与茂七は、元禄宝永年間に相次いだ洪水飢饉の折に、過酷な年貢米の取立てに苦しむ農民のために悪庄屋を訴え出て二三審の尋問・六回の対決を含む八年間の訴訟を行った。また、洪水の解決のために治水工事にも取り組んだ。しかし、悪庄屋と結ぶ新発田藩の家老の弾圧で、生歯をすべて抜かれる拷問にあい、打ち首・さらし首の極刑に処せられた。与茂七極刑の後、大火事や天災が相次ぎ、人々はこれを与茂七の祟りとして伝承してきた。

この与茂七の顕彰活動は一九七三年頃から始まっているが、父は当初からこれにかかわり、途中人材難もあって一時頓挫するが、一九八七年に再興を進めた。畠山弄月子著「義民与茂七実伝」、田中惣五郎著「小説義民与茂七」の復刊をなし、自らも筆をとり「口語訳・義民与茂

七実伝」を完成させた。次いで水上勉脚本の演劇公演も実現させた。父はこれをふるさと伝承と言い、〝生涯最後の仕事〟として取り組んだ。一九八五年には、横山十四男氏などと相協力して全国に呼びかけ、全国義民顕彰連絡協議会を結成している。協議会はこの十年間に九回の全国義民サミットを行っている。

○実業家として

教員を辞めてからは、製本業を興し、ポリエチレン袋加工業にも手を出すが、なにせ素人商法、真面目と正義だけでは商売はうまくいかない。借金が嵩み、これも家庭崩壊のおおきな要因となった。

○家庭人として

父は二度結婚して二度離婚している。二人の妻との間にはそれぞれ二男一女・六人の子どもがいる。孫が八人、曾孫が四人いる。本来なら大爺さんである。妻たちとの別れ方が憎しみに満ちていたこともあり、妻たちは子どもに父を悪し様に伝えていたため、私と二人目の妻との間の長女以外は未だに父に悪意を抱いている。

社会的には素晴らしい業績を残しながら、家庭破壊の罪を犯した父である。しかし、父はその実母に対しては深い愛をもっており、いつも敬い慈しんでいた。父はペンネームを砂虔之介というが、その名で「亡き母に」という歌集を残している。また、戦死した実弟に対しても「弟を弔う」という短編を残している。この愛が妻や子どもに向けられていたらと少し残念な気がする。

子どもたちは父を敬愛しているとは言えないが、反発しながらも父の後ろ姿の影響を受けている。二人の娘は同じように介護・福祉の仕事についている。四人の男の子は、教師、新聞記者、サラリーマン、企画・調査業にわかれているが、心情的に弱い者の味方、正義を貫く生き方をしている点で共通している。不思議であり、恐ろしくもある。

坊さんとの一問一答

父の葬式を私は知人の坊さんにお願いした。何でも相談できると思ったからだ。しかし、それは決定的な誤りだった。

その寺の通夜と告別式の費用については、本人の坊さんではなく、これも知人の葬儀会社に尋ねた。〝この寺は少し高くて四十二万円です〟という答えだった。そのまま払った。

後の法事については坊さん本人に何に、どれくらいの費用がかかるかを質問した。すると手書きの料金メモが届いた。次のようなものであった。

	お布施	御車料	御膳料	備考
二七日	一万円		五千円	寺にて
三七日	一万円		五千円	寺にて
四七日	一万円		五千円	寺にて
初月忌	一万円		五千円	寺にて
五七日	三万円	一万円	一万円	自宅にて

六七日　　一万円　　五千円　　寺にて
満中陰　　三万円　　一万円　　寺にて
百ヶ日　　三万円　　一万円　　自宅にて

口頭で次のことも聞いていた。

○「初盆には十三万円持ってきてもらわないといけない」

○「位牌を奉納してもらわないといけない。これはお父さんの来歴を漢文でしるすもので、四十万円かかる」

○「新潟のお墓に入っていた四七霊位は、茨木の墓へ卒塔婆を書いてお迎えする。卒塔婆は一枚三万円だけれども、それでは檀家から文句が出るだろうから、一万円くらいでいい」

私は、これはエライことになったと思い、坊さんに質問状を送った。坊さんは「大事なことなのでお伺いする」といって来宅した。以下はその折の一問一答である。

私／七七日までの法事の内、「五七日以外は寺で朝七時からする」いうご指示ですが、故人

の骨は我が家にあるのに何故ですか？

僧／昔は皆家でしたが、七日ごとに家でするのは大変なので、檀家から寺でしておいてくれといわれてそうなっている。朝七時というのは自分がいつもそうしているからである。

私は自宅で自分の都合に合わせてしたいのに、相談もなく寺へ来いというのは勝手が過ぎる。

私／料金メモによると、お布施が五七日と七七日が他の三倍になっているのは何故ですか？

僧／五七日は大阪の商人が早く商売をするために三五日で忌明けにしたので高い。七七日は最後の審判なので高い。

私は四九日まで七回全部するというのに五七日も高くするのは筋違いではないか。

私／寺でする場合お布施が一万円・お膳料が五千円、自宅でする場合（五七日）はお布施が三万円・お膳料が一万円・お車料が一万円と、仏教界一般より高いのは何故ですか？

僧／うちが高いのは寺を建て直した借財があるからで、ご縁のある方に協力をしていただいている。茨木市は初七日のお布施を三万円と決めているので、それ以後の法事も本来同じでいい。

借金があるから高くしているというのはとても納得できる説明ではない。

私／私の代には無理をしてつきあえても、息子や孫の代にはこれではつきあえない。
僧／寺を継ぐ息子に借財は残せない。自分の代に清算しておきたい。しかし、このやり方がいいとは思わないので遺言書に「このやり方はやめるよう書いておく」。
坊さんが生きている間は借財をお布施に乗せるというわけである。

私／初盆には十三万円必要だとお聞きしましたが、これはどういう費用ですか？
僧／十万円は檀家の会計（ハコ）に入り、三万円が寺のお布施になる。

私／寺の本堂へ位牌を奉納せよ、費用は四十万円と聞きましたが、これは何ですか？
僧／この位牌は故人の一生を二〇文字でしるすもので、三十万円は檀家の会計（ハコ）へ、五万円は材料と制作費、五万円が寺のお布施である。昔からの村のしきたりである。
私は檀家の権利義務の説明を聞いたこともなく、檀家になるつもりもないし、村の人間でもない。

私／寺は営利活動をしないから無税であり、寺が経営者の会であるロータリークラブや商工会議所の会員になるのは間違っていませんか？

僧／入ったのは最近だが、以前からかかわっていた。自分がそういう会で話をすることで会は変わってきている。

坊さんが経営者の会に入るのは葬式や墓の営業のためであり、営利目的の行為である。

私／寺は本来宮大工のように百姓などをして自給自足し、人々が必要としたときに役に立つべき存在ではありませんか？　葬式や法事で儲けるというのは本来の姿ではないと思いますが……。

僧／……

父・佐藤正の葬儀費用の明細　　2005. 1.15 死去

支払先	科目	金額	備考
茨木市	飾付及び火葬場	61,000	
	遺影写真	12,000	
	ドライアイス	5,000	1回
	告別式場専用祭壇	20,000	
	告別式場	104,100	16 日 16 時～17日16時
	親族控室	12,400	同上
	第6控室	6,600	16 日 18時～17日17時
	第7控室	5,500	同上
	第8控室	5,500	同上
	第2控室	800	17日16時30分～17時30分
	合計	232,900	

A葬儀社	外回り一式	7,000	
	フトンセット	15,000	
	後飾りセット	15,000	
	御胴骨箱	6,000	
	御会葬用礼状印刷	2,000	50組×40円
	当日粗供養	5,000	50ヶ×100円　封筒代
	スロープ	350,000	祭壇菊代
	移送料金	13,000	
	葬儀小物一式	10,000	
	カラー写真差額	8,000	
	消費税	21,550	小計　452，550
	献茶婦	60,000	4名×15，000円
	回転灯・蓮華	21,000	各一対
	生花	52,500	1×52，500円
	盛かご	31,500	2×15，750円
	商品巻	50,000	50×1，000円
			小計　215，000
	合計	667,550	

(株)イバラキ	貸布団	11,025	7組
・・・葬儀場飲食店	貸毛布	3,675	7組
	16日飲食費	21,630	10人分
	17日飲食費	49,875	14人分
	合計	86,205	

G寺	御布施	420,000	通夜・告別式・初七日
	御布施	70,000	開眼式・満中陰・お膳料
S寺	御布施	25,000	二七・三七・四七・五七・六七日
	御布施	15,000	百ヶ日（4月23日）
	御布施	10,000	初盆（8月7日）
	合計	540,000	

石彫工芸会社	墓石	1,916,250	
	墓地永代使用料	390,000	
	開眼式　供花	3,000	
	供物	6,000	
	祭壇サービス料	10,000	
	合計	2,325,250	

西武百貨店	香典返し　37件	204,188	
若菜屋、三楽ほか	法事茶菓、飲食費	106,700	
義弟・義妹	交通費	80,000	
	合計	390,888	
初盆までの総合計		4,242,793	

香典	31件	402,000	密葬・香典辞退なれど・・・
供物	7件		
供花	8件		
葬儀参列者	20名		
弔電	14件		

大橋豪之さんの場合

父・大橋義三の死去、喪主体験記について、茨木未来倶楽部会長の佐藤眞生さんより勧められてペンをとりました。葬儀について勉強不足を痛感したこと、このようなものを残すことで何時か子や孫が読んでくれたらいいなあと思ったこと、「これはみんなのための宗教改革です」という佐藤眞生さんの言葉も動機となりました。

ただ、私の場合は、コープ神戸クレリ職員の弟がいて母もいてくれたので、二人におんぶにだっこの状態で喪主体験をさせてもらった、勉強させてもらったというのが実感です。

父・大橋義三は旧制中学校卒業後、京都丸紅に入社、戦争で昭和十四年から二十一年（二九～三六歳）まで中国に渡っていました。引き揚げ後、復職し課長職を経て、丸紅飼料に出向、神戸支店、福岡支店勤務の後、宮崎で南九州食品（株）社長に就任しました。社長として工場の建設から手がけ、六八歳で退職するまで勤め上げました。

昭和三十三年に能登川町から京都に転居し、平成元年には京都から現在の神戸市須磨区に転居しています。平成十五年十月十四日、肺炎が原因で死去しました。九二歳でした。この年の五月に、胃カメラによる胃の検査と、大腸ファイバーによる腸の検査をしました。検査後に体調を崩したのが直接の死因でした。近所の内科医の勧めで、九二歳の高齢で胃腸をカラにして、二リットルもの水をお腹に入れるという無茶な検査をさせなかったらよかったと、今となっては悔やむばかりです。

弟が現在の職場（コープ神戸クレリ案内センター）になってからは、父は「自分の葬儀は功に任せる。頼むで。普通にやればいい。仕事の関係先には一切知らせる必要はない。」と言っておりました。

死について思う

今まで自分自身も、親やまわりの人々も、死について触れることを避けてきたと思います。自宅マンションは一〇番館までありますが、四番館と九番館は抜けています。番号札のある下駄箱を利用する際もなぜか四番は避けます。小中学校で大きな事故が発生した時にも、子ども

たちに「命を大切に」とは教えますが、死についてはショックが大きいと敢えて触れないといいます。

この八月で第一七回目となる佐藤眞生さん主宰の「ふるさと縄文直観塾」において、いろんなテーマがありますが、度々「生と死」の問題が出てきました。「死」について考えること、「生命」が有限であることについて考えること、生きることが、そして、今日一日が大切な一日であることに改めて気づかされました。幼児も入れた家族間で、日常的に「死」について明るく話題にすることが大事だと思うようになりました。

告別式、法要について

告別式、その後の法要も含めて、故人のためというよりは、むしろあとに残された者達のためにあるのではないかと思います。

近年は核家族化が進行し、冠婚葬祭以外の場で家族親族が一堂に会することが殆どないといっても過言でないと思います。義母の告別式の際に、「私と貴方はどういう関係でしたですか」「あんたとは従兄弟同士やがな」といった会話を耳にしたことを思い出しました。そんな

場を提供するのが法要だと思います。「故人とのお別れ、故人を偲ぶ」という意味合いは大きいが、家族親族が「生」を、「現在」を、確認しあう場となっていると思います。

コープ神戸クレリ案内センターについて

喪主といっても私の場合は、諸手続きは職員である弟がほぼすべてをやってくれたし、母もいてくれたので、思い悩むことも、バタバタすることも殆どなかったと思います。

クレリの他の職員や式場となった芦屋ホールの職員、また提携葬儀社・（株）ディスの対応、すべてよくやっていただいたと満足しています。

弟は二年ほど前に配置換えでコープ神戸クレリ案内センターに勤務するようになっておりました。クレリはコープ組合員から「葬儀について不明瞭なことが多い。どこに相談すればいいのかわからない。コープで葬儀を扱ってもらえないか。」という要望があがってきて、平成元年にコープ神戸と兵庫葬連の共同事業としてスタートしたものです。だから、弟はクレリ職員としての立場と、喪主の弟としての立場が重なり、喪主である私がやらなければならない内容を、私に代わって進めてくれたことが多々あったと思います。その区別がつきにくく、特殊なケースになったと思います。

お布施について

身近に相談できる人がいない場合、お布施だけでなく、仏事全般についても、どのようにすればいいのか、間違っていないのか、思い悩むところです。

お布施については、直接お寺さんにお聞きするケースもあるようですが、そこで「金額」が出てきたら、それはもう「お布施」ではないと思います。ただ志でいい、出来る範囲のことをすればいいというのも難しい話です。弟のような立場の人から世間相場やいろいろな事例を知ることができれば大いに助かると思います。

私の叔父が脇僧をたてたいとクレリ職員である弟に依頼したところ、「導師並（二十～二十五万円）のお布施になります」と返事が返ってきました。叔父は「脇僧でそんなべらぼうな話はない」と、導師の従兄弟であるM寺に依頼することになりました。お布施、お膳料は別表の通りでした。親族がたててくれたお寺さんのお布施その他の費用について、「施主が半額負担する場合と、依頼主が全額負担する場合がある」と、母が言っておりました。

お寺さんと大橋家

昔のことはわかりませんが、昭和三十三年に京都へ転居するまでは、今回お願いした導師の

お母さんが毎月二回ほど逮夜参りのお勤めに来て下さっていました。「祖父のお父さんと、死別した最初の妻の命日の前日に来て下さっていたのでは……」と、母の話です。

私の生まれた時から、家には大きな仏壇があり、祖父が月に十日ほどはお経をあげているのを聞いておりました。また、当時、報恩講の行事もありましたので、お経を聞いたり、お寺さんが時々自宅に来て下さることが普通のことと思っておりました。お寺さんのイメージも親戚のような感じがしておりました。また、導師も父のことを「おじさん」と呼んでいました。

しかし、子や孫は自宅に仏壇もなく、正月やお盆に神戸の実家を訪ねた時や法事の時以外には仏壇やお寺さんに接する機会がない状況では、お寺さんへのイメージも変わってくるだろうと思います。

大橋さんと著者との問答

著者／大橋さんはご尊父とは別居していたとお聞きしていますが、ご尊父の訃報を聞いて最初に何をしましたか？

大橋／弟がコープのクレリーに勤めていたので、葬儀はそこに頼もうと思っていました。すぐに弟に頼みました。

著者／ということは、最初に弟さんにご相談なさったのですね？

大橋／そうですね。相談というよりは父の言葉もあり、事前に決定していたというのが正しいですね。弟はすぐにコープ神戸の別会社である（株）ディスに父の葬儀をお願いしました。（株）ディスは弟が今の仕事につく時に研修を受けた場所であり、気心も知れていて良かったと思います。弟は今回のことで、今後より一層喪家の良きアドバイザーになってくれるものと信じております。

著者／弟さんを含めてですが、クレリーの対応には満足なさっていますか？

大橋／どんな葬儀にするか、会場や料金、それに役所への手続きの代行など大変行き届いていました。また、湯灌はしてもらって有り難かったですよ。ただ、供花と通夜の料理、宿泊者の布団の締切時間が限られていて少し困りました。そんなわけで、朝食は三人分が余分になりました。

著者／料金ですが、基本料金が明細なしで六十万円とあります。この説明はあったのですか？

大橋／はい、ありました。これには、寝台車、搬送費、枕飾り、仏衣一式、中陰飾り、寝棺、骨壺、世話係、布団代、供花一対、祭壇、白木金牌、司会進行係などが含まれていました。こ

れ以外が追加費用ということでした。

著者／坊さんはどうやって選んだのでしょうか？

大橋／私の家は檀家でしたから、初めから坊さんは決まっていました。

著者／坊さんとの折衝はなかったのですか？

大橋／直接はなかったのですが、役僧の値段についてはありました。導師と同じ２５万円かかるといわれましたので、こちらで手配しました。結果的にお膳料を入れて５０，０００円で済みました。

著者／ところで、四九日までの法事の意義についてはどうお考えですか？

大橋／四九日や満中陰というコトバは知っていましたが、その意味するところは知りませんでした。ただ、自分としては人が死んだひとつのケジメだと思いました。聞くところによると、浄土真宗や真宗では二七日から六七日まではしなくてもいいらしいです。ただ、他の宗派がするのでそれに合わせているお寺さんもあるようです。

著者／百ヶ日もしていませんね？

大橋／二七日も、三七日も都合によりしておりません。百ヶ日までのご案内はお寺さんからはあったのですが、四九日の法要が終わると、もう一周忌の日時が気がかりでした。百ヶ日と

いう言葉も今回初めて知りました。ただ母は葬儀の翌日より今日まで毎朝〝正信偈〟のお経をあげております。

著者／葬儀社は何をしたのですか？

大橋／契約葬儀社は複数あったようですが、担当したのはコープの一〇〇％出資会社でしたので、問題は全くありませんでした。遺体の搬送、見積、打ち合わせ、通夜、告別式、初七日、中陰飾りなどを丁寧にしてくれました。

著者／葬式仏教といわれる坊さんをどうみていますか？

大橋／喪主の立場で考えてくれる坊さんもいるでしょうが、お布施を紙に書いて〝これだけ用意してください〟という坊さんもいます。〝香典返しを任せてくれ〟というビジネスをする坊さんもいますね。お寺が葬式にかかわってわずか一〇〇年くらいで〝伝統〟を押しつけるのは問題だと思います。それに、お布施が料金になっているのもおかしいですね。

著者／大橋さんは、ご尊父の葬儀を誰のためにしたのですか？

大橋／父に感謝をこめてしました。また、子どもたちに今日の自分がここにいる訳をわかってもらうためでもありました。残念だったのは、阪神ファンだった父を、六甲おろしで送ってやりたかったということです。

著者／これから喪主をなさるお方に何か助言はありますか？

大橋／そうですね。喪主のことを一番に考える葬儀社を日頃から調べておくといいと思います。それから、夫婦や親子で死のことを日常的によく話し合うことが大事だと思います。

父・大橋義三の葬儀費用　　2003 年 10 月 14 日没　92 歳

見積書＆請求書　　D社

科目	品名・数量・単価	金額	備　　考
基本料金		600000	
追加料金	ドライアイス　2×4000	8000	
	遺影写真	22000	
	湯灌サービス	60000	
	寝台車	34550	税込み金額
	搬送奉仕料　2×3000	6000	
	お世話係り（通夜）　2×14000	28000	
	お世話係り（仕上）　2×7000	14000	
	小計	172550	
別途料金	静岡煎茶　39×500	19500	
	ダックスミニタオル　92×5おお	46000	
	会葬礼状　200×40	8000	
	供養袋　53×50	2650	
	寿司盛り合わせ	13000	
	おにぎりセット	8000	
	朝食・幕の内会食	129000	
	小計	226150	
おたてかえ金	霊柩車	35700	
	会館使用料	189000	税込み金額
	ビール、ジュース、酒、ウーロン茶	25830	税込み金額
	貸し布団	39000	
	小計	289530	
消費税		48207	
供花代		52500	
現金払い分	火葬料金、タクシー、マイクロバス	58000	火葬料金1万円、送迎車4．8万円
合計		1446937	

お寺関係の費用　　M寺

葬儀お布施	枕経、通夜、骨あげ	250000	
	初七日	30000	同日に実施
	お車代	10000	
	お膳料	10000	
	四七日	10000	お布施、お車代
	五七日	10000	同上
	六七日	10000	同上
	七七日	40000	同上
	院号代	80000	
	脇導師お布施・お膳料	50000	百ヶ日法要は実施していない
合計		525000	

小林陽子さんの場合

私の夫・小林喜芳が逝ったのは今年二〇〇五年の十月十二日です。七十一歳でした。四年前に癌を宣告され気丈な闘病の末でした。夫は納得のできないことは絶対にしない人でした。だから、「患者のエゴです」と看護士に言われても、最後までトイレには自力でいきました。しかし、抗癌剤の服用については納得して受け容れ、一夜にしてフサフサの頭髪が抜け落ちても平然としていました。抜け毛を取っておいて私に見せてくれました。私も笑って「喝采ものね」と言ったくらいです。どんなに痛く、辛くても、一言も苦言はいいませんでした。亡くなった日は朝七時から、夫のそばにいて、手を握っていました。言葉を発することはできませんでしたが、私の問いかけに最後まで手を握りかえしてくれました。子供達に見守られ、ある意味で大往生だったと思っています。

葬儀は、生前に夫がワープロに入力していた文章通りにしました。夫は、「葬儀社は呼ぶな」、「葬式はいらない」、「終の棲家は信州」と書いていました。私はそれに従い、亡くなったその

日に遺体を病院から自宅に移して身内だけのお通夜をし、翌日荼毘にふし、次の日には私の故郷の信州・上高地の梓川に散骨しました。そして、縁あって夫婦で通っていた奈良の薬師寺の百万塔に納骨しました。一男三女の子ども達もみんな一致団結して協力してくれました。

梓川に散骨しましたのは、勿論夫の希望です。夫は新潟の出身ですが、信州大学学士山岳会の会員です。本当は梓川ではなく奥又白池で永眠したかったのではないかと思います。でも私はそこまでは行けないので穂高岳の見える梓川で許してもらいました。

薬師寺は夫が元気な頃から二人でよく通いました。写経を一〇八回、二一六回と重ねたくらいです。八日の縁日にも殆ど伺ってきました。管長さんの法話も随分とお聴きしました。私たち夫婦にはとても縁の深いお寺です。そんなご縁で薬師寺の百万塔に納骨しました。百万塔といいますのは奈良時代の恵美押勝の乱（七六四年）で多くの死者が出たのを悔い、孝謙上皇が造らせた百万基の小塔です。この小塔は薬師寺をはじめとする十大寺に十万基ずつ祀られていました。今ではこの百万塔は法隆寺の４万基を除いては悉く散逸していますが、薬師寺では一九七七年より復興をはかり、ここで先祖の永代供養の納塔を受けているのです。

具体的な葬儀は、四人の子ども達が役割を分担して手配してくれました。喪主は長男がしてくれましたし、葬儀の進行全般は長女がインターネットで適切な葬儀社を検索してくれました。大阪あんしん葬儀費用ネットワーク〝いずみ〟という会社です。この会社のひかりプラン一〇では、お棺・ドライアイス（一〇キロ）・骨箱と骨壷・納棺用品・線香とロウソク・お花一対・寝台車・霊柩車・スタッフ三名・各種手続代行・火葬料金を含めて十万円でした。これに祭壇や写真を含めた当初の見積は十五万九千円でした。実費の差額が一万円あったので最終的に支払ったのは十六万九千円でした。実に良心的で、特に手続代行には感謝しています。

薬師寺の百万塔永代供養料は十万円でした。

葬儀費用はこれがすべてです。

全くの家族葬でしたが、弔電は長女の会社関係から四十通以上、そして毎月奉納歌唱している喜光寺からお香典や弔文、薬師寺からも管長・副管長の連名で弔電を頂き、友人達もお花代を下さった方や、私の生徒さん達の心遣いなど、永いおつきあいの仲間達の友情に感謝しています。

信州大学学士山岳会が中心になって、信州・松本で、この十一月二十六日に、夫を偲ぶ会が企画されています。ノスタルジック・ボーカルを標榜し、日本笑い学会員の私は、夫との約束もあり、「にもかかわらず笑う」「とりあえず笑う」ことを心がけています。涙は十二日に全部流しきりました。

藤孝子さんの場合

私の母、犬飼よ志へは、一九九九年四月十九日、九十七歳でなくなりました。生まれたのが明治三十四年（一九〇一年）ですから、約一世紀生きたことになります。

明治生まれの気骨をもって生きておりましたが、七十五歳ごろよりちょっと、痴呆症状が現れ、今なら私も解るのですが、当時の私は、何とか頑張ってほしいと、「おばあちゃん！しっかりしてよ」と、叱咤・叱咤をしてしまっておりました。

今では折りに触れ、申し訳ないことをしたなぁ、と、後悔することしきりです。

母は、ずーっと兄（長男）のところに居りましたが、わたしの夫が交通事故でなくなった昭和四十六年、七十歳から私（四女）と生活をし、四歳と三歳の孫を見てくれておりました。しかし、その後痴呆が進み、85歳から特別養護老人ホームのお世話になっておりました。

その間ホームの近くの病院へ何度も入退院をし、最後は肺炎ですが病院で亡くなり、遺体は我が家に戻ってまいりました。

母の顔は高貴で、穏やかな中にも毅然とし、痴呆の面影などまったくなく、愛おしく、誇ら

しいような想いでいっぱいになりました。
まだ触るとぬくもりを感じるようで、一晩、孫や家族と手をつないだり、話しかけたり、さすってみたり一緒に過ごし、あくる日、近くのお葬儀会場（和光寺）に安置していただきそこでお通夜・お葬式をいたしました。

私は「人間は大いなる存在に生かされ、永遠をかけて深化・成長する魂存在である」という人間観・世界観を学び、実践するGLAという団体に所属しておりますので、今生に生まれるときは、誕生の門をくぐり、そして生き、死の門をくぐりあの世に帰る。「永遠を今に生きる魂存在である」を基本とした、GLA式葬儀をさせてもらいました。

有難い事に会員でもない、兄や姉たちが承諾してくれましたので、母が亡くなりました夜には、自宅に地域のGLA会員の方が来てくださり、お通夜やお葬儀の打ち合わせを致しました。
まず、していただいたことは、母の人生をしっかり訊いてくださることでした。
いつどこで生まれ、どのような家族の中で育ち、どのようなことに興味を持ったり、どのような人生であったのかを詳しく記録をし、お通夜・お葬儀の、霊前で読んでくださいました。

通夜も多くの方々が来てくださいましたが、ＧＬＡの方々とともに「臨終のときの祈り」を司祭（会員）の祈ってくださるそばで心を合わせておりました。そして母の人生をずーっと振り返っていく中で、母との様々な出来事が走馬燈のように走り、何か温かく、来てくださった方がたも家族も母の人生をなぞることが出来、私の友人は「お母さんの今生の卒業式のような感じがした。落ち着いて、いいお葬儀でよかった」と感想を言ってくれました。　何か誇らしいような、温かくうれしい感覚を頂きました。

葬儀は司祭・副司祭・司会の方ですすめられましたがあとのことはお葬儀やさんと、ＧＬＡのボランティアの方々で進められ、お焼香ではなく、献花でいっぱいになりました。

祭壇は菊の花などいっぱいで飾られ、清楚な感じでした。どれぐらいのお金をお支払いしたのか良く覚えておりません。が、戒名やお坊さんのお礼などありませんから、そんなに大きな金額ではなかったように思います。

司祭さんは読経ではなく、高橋佳子著「祈りのみち」より、祈りの言葉や別のご本もずーっと読んでくださいました。宗派は関係なく、わかりやすく、心の奥まで染み入り、今生きてい

ることのありがたさ、故人との思い出などを次々思い出させていただきました。

葬儀の後は、三五日、四九日は、どなたに気遣うこともなく、身内だけのなごやかな集いになりました。

お寺様の処世術

八年前に父を亡くし、昨年に母が急逝しました。お寺のことは多少は知っていたのですが、金銭に関することは総て母が握っておりましたので、母を亡くして初めて金額を知ることになりました。私の寺は、日蓮宗で葬式にかかる寺の費用は、導師十万円、伴僧は五万円と二万円、車料一万円、後日、祠堂料十万円、法号（戒名）料五万円を持っていきました。葬儀にかかるお寺の費用が高いことは重々知っていたのですが、この話を聞いて一番ビックリしたのは葬儀場の所長さんでした。

開口一番「安いですね、同じ町の同宗派のお寺さんなんか、無条件に百万ですよ」と言われ唖然としました。理由は、檀家が少なく運営費に苦慮しているからという辺りが想像に難くないのですが、内心複雑な思いでした。

通夜と葬儀を合わせて導師（住職）さんと伴僧（養子先の住職）の息子さんが勤められましたが、その両日とも住職は、体調と足が悪く、読経中に椅子から降りたり、地べたに座ったり、伴僧の息子さんがかなりサポートしていましたが、焼香途中での退座になりました。

当日も同様で、声のトーンも一段と低く途中でタオルを投げたくなる心境でした。

後日葬儀屋さんから聞いたのですが、当日の弔電をパスして欲しいと住職さんは葬儀社の方へお願いしていたようですが、これだけはあっさり断られていたようです。

余談になりますが、その葬儀屋さんが言うには、その後の葬儀でも結構同じパターンがあったようです。葬儀とは、セレモニーなのですから息子さんが近くにおられるのですから、お任かせになっても喪主は、それに対して何も言わないと思うのですが……。

八年前の父の時には、法号料を十万円を収めていますが、私の代で、すこしずつ減額しなければ後代が続かない意図もあり四九日迄を含め十万円程減らしました。

二七日の時でしたが、時間になってもお寺さんが来られないので、電話してみたところ忘れていたような返事でした。また、百ヶ日の時には、日時は平日の夕方に設定されましたので、親族を呼ぶタイミングが取れませんでした。

初盆の時ですが、「白木の位牌はいつまでお墓に置いておくのですか」と訊いたところ、もっと早い時期に処理するもののように聞き取れました。当日に渡せなかったので、後日、お寺に伺いましたところ、期限的なものは四九日頃で終わりのようなニュアンスでした。確か葬儀後の時点では初盆くらいまでのように思えた記憶がありましたので、何となくしっくりしま

せんがお渡ししようとしたところ、「墓地の古塔婆置き場に置いといてもらったら、そのうち処理致します」とのことでした。

長男と顔を見合わせてデリカシーのない言葉に何とも言えない不満感を覚えました。

当寺は、他に聞くような「初盆は、法要のあるなしに関わらず一律五万円の布施」等というお寺サイドからの設定金額の依頼がありませんので、その点はありがたいのですが、お寺の本堂に、その年の祠堂料と茶湯料が貼り出されますので、何とも極端な減額がやりにくい状況にあります。

これもお寺様の処世術かと思いました。

低価格の葬送

「シンプルな葬儀・埋葬」と題して、二〇〇五年十月十三日の朝日新聞朝刊に次のような記事が掲載された。いわく「質素に最後を迎えたい、と故人が思っていたとしても、遺族にその意思が伝わっていなければ、葬儀やお墓にお金をかけてしまうものです。そんな中、残される家族の出費を抑えようと、自分が死んだ時の葬儀や埋葬方法を、あらかじめ選ぶ人が出てきました」と。

またホームページを検索してみても、「お墓は心の中に」と唱い、新しい葬儀の形を提唱する葬儀社も増えてきている。以前はこういった傾向は関東に多く見られたように思うのだが、最近は関西でも家族だけの低価格の葬儀を提唱する葬儀社が目立ち始めた。こんな中、「ぬくもり葬儀」のタイトルで、「家族葬ぬくもり10」というホームページが目にとまった。とりあえず開いてみると、「火葬のみ　ぬくもり10プラン　十万円」とある。この十万円には、「寝台車（一五ｋｍまで無料）」「枕元セット（経机・お線香・ローソク・おりん・仏花）」「ドライアイス二日分（二〇キロ）」「納棺一式」「お棺（桐）」「仏着（スエード）」「本骨袋（骨箱小）」

「寝台形霊柩車」「役所代行手続き」「火葬場手続き」が含まれているという。このほかに、「霊安室使用料　五千二百五十円」「火葬料金（火葬場により異なる）六千円」がかかり、総額費用でも十一万一千二百五十円でおさまるという。

無料のお問い合せ電話が掲載されていたので、早速、電話してみた。

大阪府松原市の「聖心社・もり葬祭」という葬儀社だった。代表の森さんは約二十年間葬儀社に勤めた後、『葬儀は変わりました！　安く・内容充実』をキャッチコピーに、これからの時代のこれからの葬儀社として平成八年に開業したという。

聞けば、このような家族だけの低価格の葬儀が増えており、同社の全取り扱いの約三割が低価格の家族葬プランだという。

森社長のお話を聞いていても、新しい兆しが確かに感じられる。

そこで自分の周りに、こういった葬儀にお金をかけなかった人がどれだけいるか調査し、その方々にお話しをうかがってみることにした。

大阪府・千里のSさんの場合

喪主のSさんは、重度重複障害児を持つ六十代前半の女性。亡くなったのは、障害児である

娘の綾女ちゃん、二十歳を迎えたばかりだという。

実は綾女ちゃん一家とは、僕自身、ごく親しく近所付き合いをした仲だ。今も手許に綾女ちゃんのお母さんの手記が残っている。

「娘の名前は綾女です。昭和五十二年十一月十八日、千五百グラムで生まれました。七ヶ月の初めに早産しました。生後二、三日で呼吸困難を起こしました。同時に黄疸を伴い、保育器の中で光線療法も受けました。その後、順調に発育していると思っていましたが、未熟児網膜症になっておりました。それは比較的軽く終わりました。現在は左が弱視です。生後九ヶ月目に脳性マヒと診断されました。昭和五十四年一月末日に重度の脳性マヒによる四肢体幹マヒ、わかりやすく言うと、寝たきり、一生涯寝たきりの子です。たとえ訓練をしても、寝たきりから脱することはできませんと診断されたのです。」

それから二十年が過ぎた平成九年十二月、綾女ちゃんのお兄ちゃんが結婚することになった。このとき、綾女ちゃんは吐血が始まり病院に入院したまま。主治医のお医者さんも「もう長くはもたないだろう」と言っていた。それでも結婚式には病院の外出許可をもらって参加、式が終わるなり、また病院へとんぼ帰りしたという。

式場から病院へ帰り着き、看護婦さんに迎えてもらってうれしそうな綾女ちゃんの写真が

残っている。

それから一月あまりが過ぎた平成十年一月十四日、綾女ちゃんは病院で亡くなった。明け方の午前三時だったという。病院のストレッチャーで車まで運び、大好きだったお兄ちゃんのライトバンで団地の一階にある家へと連れ帰ってもらった。

綾女ちゃんはよく「キャッキャッ」と声を立てて笑った。外にいても、その笑い声が窓を通して聞こえてくるほどだ。亡くなったその日も、お母さんとお兄ちゃん夫婦がライトバンで連れて帰ってきたのだが、部屋へ入るなり「キャッキャッ」という笑い声が聞こえるというのだ。

「いやぁ、アーチャン、生きてるわ！」と、一瞬思った。

だが、それは飼い犬エルの鳴き声であった。

夜が明けるなり、市役所に電話し、葬儀社を紹介してもらった。

「何も要りません、葬儀も不要です。棺桶と焼き場の手配だけをお願いします。」

この日は、綾女ちゃんを知る人たちだけの送別会となった。急遽、綾女ちゃんの寝ていた部屋が立食パーティの会場となる。焼香も線香もなし、来る人も香典はなし、数珠も持たない。というのも、綾女ちゃんのお母さんが、仏教の葬儀に疑問を持っていたからだ。いや仏教でば

かりでなく宗教で人は救われることはないと強く思っておられる方だった。

だから来る人も、「綾女ちゃんが花が好きだったので……」と、花だけを持って参加した。来る人、来る人が花を持ってきた。

常々、お母さんは、綾女ちゃんに「死んだら、アーチャンの好きな花でいっぱいにしたげるワ」と言っていたが、期せずして、部屋はその言葉通り花でいっぱいになった。棺も花でいっぱいにした。ただ花だけを折って入れるのは「何となく残酷そうでイヤだ」というので、花だけをちぎるのでなく茎のままを入れたという。

誰も泣く人はなく、綾女ちゃんの想い出話をし、ジメジメした雰囲気はなかったという。綾女ちゃんの担任だった先生も、集まった人たちも「こんな雰囲気っていいですネ、私もこんな風にしたい」と感想を漏らしていた。

明けて一月十五日、普通なら成人式となるのだが、この日、綾女ちゃんは黒いバンで斎場へと移された。

「焼いている間、みんなで食事をしました。お骨は迷った末に持って帰り、撒こうかとも思ったのですが、トラブルの元になってはと、実家のお墓へ入れました」とお母さんは淡々と語る。更に訊くと、それはお墓が大事だという意味ではなく、処分に困ったあげく、ここへ入

れておけば誰にも迷惑がかからず土に帰るだろうと思ったからだそうだ。

「葬儀の費用は」と問うと、「棺桶代が四万円だった。そう、全部含めて十三万円だったのを覚えているけど、明細は覚えてないわ」と明るく答えてくれた。

ちなみに大阪の市役所に電話で確認してみたが、大阪市では、お骨は持って帰らなくてもいいそうだ。最初に渡される書類に「お骨を持って帰る」「お骨を持って帰らない」の希望欄があるそうで、電話に出ていただいた係りの方に「お骨を持って帰らない場合、そのお骨はどうなるんですか」と訊いてみると、「一年間保管し、その後、共同霊園にお入れします」という答えが返ってきた。

このことは、全国どこの市町村でも同じらしいが、確認したわけではない。

大阪府・羽曳野のTさんの場合

Tさんは、二度の喪主体験をされた。最初はお母さんの時、二度目はお父さんの時だという。もともと実家が神道であり、祝い事はおろか葬儀に至るまですべて神道で行ってきたという。

大阪へ引っ越しされてからも、お母さんの葬儀の時は神道で行ったという。

私自身モノ知らずで、今まで神道の葬儀があるということを知らなかったものだから、好奇心も手伝って、神道での葬式がどういうものか訊いてみた。

仏式では霊前での焼香が必ずあるが、神道のお葬式では焼香は行わないという。神式のお通夜・葬儀・法事では玉串奉奠（たまぐしほうてん）といって、玉串と呼ばれる葉のついた枝を神前に供えるという。まず両手で玉串を受け取り、根元が向こうを向くよう時計回りに持ち替えてまわし、お供えをする。次に二度、頭を下げ、音を立てないようにやはり二度柏手を打ち、最後にもう一度、頭を下げるという。

ただ大阪では、神主さんに頼むとき、結婚式や誕生などの祝い事は歓迎されるが、葬儀の依頼は結構いやがられたという。

二度目のお父さんのときは、最初と事情が違っていた。この間、Tさんはある人との出会いから真剣に人生を考える機会を持ったという。「苦しいときの神頼み」という言葉があるが、真剣に自分自身を見ようとしたとき、苦しみの原因がどこにあるかも見ようとせず、ただ何かに頼ろう、すがろう、うまくいかないときは世間が悪い、周りが悪いと犯人探しをしてきた、そんな自分に嫌気がさしたという。そうなると儀式という形だけが残った宗教にも嫌気がさし

てきた。と同時に、そんな宗教に向けてきた自分の心にも嫌気がさしたという。自分を変えようとすることなく、何とか自分に都合の悪いことだけを、祈って、すがって、なくしてもらおうとする。そんな自分の心を変えたいと思ったという。

そう思ったTさん、早速、町内会にも断りを入れ、一切の宗教的行事に関わり合いたくないと宣言された。大阪でも都市部はいいが、田舎へ行くとまだまだ閉鎖的で、こんなことを言い出した日には、周りがどんな目で見るか分かったものではない。どんなにか勇気がいっただろうと思うが、意外と周りはすんなりと受け入れてくれたようだ。

Tさんを取材するとき、お住まいが分からず、付近の方に「Tさんのおうちを教えてください」と道を訊いたのだが、「ああTさんの家なら……」と、親切に親しみを込めて教えていただいた。とても周りから白い目で見られている、そんな雰囲気ではなかった。

そんなわけで、お父さんの時は、神主さんも、お坊さんも呼ばず、互助会に頼んで家族だけで送ることになった。

お父さんの場合、急であった。長い闘病生活の末に病院で亡くなったというのでなく、自宅で、ある朝、起きてみたら亡くなっていたという。全くの急死であった。

早朝のため、主治医とも連絡が取れず、とりあえず一一九番に連絡し救急車が駆けつけるこ

ととなった。

救急車からは、人工呼吸するよう指示が出る。Tさん、「死んでいるのになぁ」と思いながらも電話からの指示通り、お父さんの口に息を吹き込み人工呼吸を行った。

やがて救急車が到着し、しばらくして警察も到着した。一一九番に連絡したとき、消防から警察へも連絡が行くのだという。Tさんの場合は、この後、かかりつけの医師とも連絡が取れ、医師が警察に事情を説明したうえで死亡診断書を発行してもらい一件落着となったが、普段から健康でかかりつけの医師もなく、急死ということになると、たとえ老衰死であっても、警察医による検屍・解剖と言うことにもなってしまいかねない。

Tさんは、お父さんが普段から「葬儀に要らぬ金は使わず、身内だけで送ってほしい」と言っていたこともあり、ご本人の宗教的な葬儀はしたくないという思いもあって、互助会に連絡を取り、僧侶も葬儀も必要がないことを意思表示された。

お母さんの葬儀の時、納棺に際してちょっとしたハプニングが起こった。納棺に当たって、普段、お母さんの訪問看護をしてくれていた方が「死に化粧」を施してくれ、やさしいいい顔になったとみんなで喜んでいたが、業者の方が、料金の内だと思ったのかどうか、その上からまた「死に化粧」を施してしまったというのだ。

結果、やさしい顔が怒ったような顔になってしまったという。

これに懲り、お父さんのときは、特に「死に化粧」もすることはなく、納棺した後は、互助会のホールに移送し身内だけで通夜をすることになった。

翌朝、斎場に移して火葬に付したが、このときは朝一番だったせいか静かで落ち着いて送ることができたという。というのも、最初のお母さんのときは、午後からの火葬となり、数が多く火葬も競争状態となった。各宗派の僧侶や宗教者が、それぞれのお経や祈りを、他に負けまいと大声を上げて競い合うものだから、静かで落ち着いた雰囲気などほど遠く、ただうるさくて慌ただしいだけのものとなってしまったという。

こうなると、お経はありがたいというより、うるさいだけの騒音でしかないだろう。

それはさておき、家族だけの葬送、全部で十八万円だったという。

滋賀県長浜のUさんの場合

喪主のUさんは、四年前にお父さんを亡くされた。Uさんは知り合いの葬儀店に連絡を取り、会場だけを貸してほしい旨を連絡し、家族だけで送ろうとしたが、お父さんがこの地域で指導

的な立場にあったため、役場から情報が流れ、県会議員をはじめ市長や多くの名士が参列する大がかりな葬儀となってしまった。

ただ参列者が驚いたのは、そこには読経をあげる僧侶も存在せず、焼香もなく、線香の一本さえもあがっていなかったことである。

ところで、この地区は因習や地縁関係が根深く残っているところであり、しかもUさんもお父さんも、この地区の指導的な立場にあり、旦那寺とも親しく、代々、檀家としても代表的な立場にあったという。お寺との関係ばかりでなく、この地区では行事といえば神事を指すほど、神社や氏神との関わりも強い。氏子としての役割も強かったという。

話は前後するが、こんな環境の中、Uさんのお父さんが直腸ガンの手術で入院することとなった。ところが開腹してみると思ったより状態がひどく、このまま手術を続ければ、老齢ということもあり生命の保証もできない。手術を中止するか、このまま続けるか、五分以内に回答をほしいということになった。立ち会っていたUさん、相談する相手もなくすべての判断が自分にかかっているという状況に追いつめられてしまった。しかもゆっくり考える時間などない、五分以内に答えを出さなければならない。

この頃、Uさんは「人間の意識」ということについて学んでおり、本当に伝わるのは、「言

葉」や「態度」でなくその人の「思い」だということを教えられていた。口で「あなたはいい人だ」と言っても、心で「この野郎！」と思っていれば、「この野郎！」という思いがエネルギーとして働く。その場はだませても、このエネルギーが働くため、結局はうまくいかないし、相手も表面上はだませても、実は本人が気づかないだけで本音が伝わっているのだと……。要は、自分が変わらないかぎり、いくら宗教に頼っても自分も人も決して救われることがないということを分かり始めた頃であった。

思いあまったUさん、このことを思いだし、「意識は伝わるんだ」と自分に言い聞かせ、必死の思いでお父さんの心の中に話しかけた。

「親父、どうしたらいい。手術を続けるほうがいいのか？　中止したほうがいいのか？」

そのとき、Uさんの心の中に「手術を続けてくれ」というお父さんの思いがハッキリと響いてきたという。Uさん、半信半疑ながらも、その思いを信じ、医師に「手術を続けてほしい」旨を意思表示した。

やがて手術も無事終わって、お父さんの意識が回復したとき、

「不思議な体験をしたよ。おまえが俺に手術をするべきかどうか話しかけてくるんだ。」

Uさんは声に出して話しかけたわけでもないし、しかもお父さんは麻酔をかけられて手術室に入っていた。このことを話すと、「おまえが常々言っていたのはこういうことだったのか、おまえのやってる学びはほんものだ」と、あっさり脱帽したというのだ。

これからが、このお父さんの偉いところだ。

病状がある程度快復すると、Uさんと二人して旦那寺へと挨拶に出かけた。

「息子が常々、人は意識だと言っている。俺も病院で不思議な体験をし納得した。人は己の心を見つめ己自身が変わっていかないかぎり、寺に頼っても、経文に頼っても人は成仏することはできないことを知った。分かった以上、寺の檀家であることはやめたいと思う。理解してほしい。こんな訳だから、葬儀のときも、あんたが僧侶として出席することは控えてもらいたい。俺との長年の付き合いで顔を出してくれるというのであれば、背広にネクタイで出席してほしい。袈裟や数珠などは不要である。」

二人は、この後「長年、お世話になった」と礼を述べると、寺を後にした。

この後一年して、お父さんは亡くなった。肺気腫やその他の病気を併発しボロボロの状態であったという。死を悟られたのか、死ぬ一週間前、咳き込みながらも十分近く、自分の最後の思いをテープレコーダーに録音された。

「自分はこれまで自分の信じたことをやってきたが、その結果が果たして良かったのか、今、疑問に思っている。本当のことに早く気づけたのに、それをないがしろにし、今まできてしまい、人生を無駄にしてしまったことを後悔している……」

Uさんの奥さんが、たまたま録音されているその姿を目撃されたが、録音し終えると、しばらくはその場で泣いておられたという。

やがてUさんのお父さんは亡くなり、今回の葬儀となった。

集まった人たちは、僧侶もおらず、焼香もなく、線香の一本もあがっていない葬儀会場に面食らったが、静かに童謡の流れる会場に、やがて録音された最後のメッセージが流れはじめた。咳き込み、時に涙ぐみながら語る故人の声に感動しない人はなかった。

集まった人たちは、葬儀が終わると、

「葬儀もこれからは変わっていきますなぁ」「重苦しい読経よりさわやかでよかったですよ」「本当に気持ちのいい葬式でしたなぁ」と口々に語られていた。

その弔問客の中に、檀那寺の住職も背広姿で参列していたという。

この話にはまだ続きがある。この地域ではありえない、この一風変わった葬儀の後、非難の声が起こると思いきや、追随する人が出てきたのだ。この地縁関係の結びつきの深い地域でも、

確実に因習に縛られたくないという思いが広がっており、Uさんの行動に触発される人が今も続いているという。

ところで、この葬儀にかかった費用、お父さんの立場上、密葬にできなかったこともあってかなりな出費になってしまった。それでも八十万円程度であったという。

以下に掲載するのは、Uさんのお父さんがテープレコーダーに残されたという最後のメッセージである。息子さんの許可を得てここに掲載させていただくことにした。

本日は私のお別れの会に当たり、皆様方にはご多忙中わざわざお出でいただき本当にありがたく、はなはだ高席からではありますが、あつくあつく御礼を申し上げます。

私の生前中は、皆様方には一方ならぬお世話になり、これに対するご恩返しもできずに人生を終わっていくことを、ひたすら残念に存じております。何とぞお許しをいただきたいと存じます。

私の人生八十年を振り返りますと、いったい私は八十年間なにをしてきたんだろうと自問自答するとき、やってきたことすべてが幻であったとしか言いようがございません。八十年と申しますと、日数にして二万九千二百日、時間にして七十万八百時間、億という数字から見ます

れば、本当に瞬きしている間、ほんの瞬間に過ぎ去ったと思います。時計の針の一秒一秒の積み重ねが八十年間で二十五億二千二百八十八万秒となりますが、その一秒一秒の大切さを、今更（声が詰まる）、「死」を直前にして知らされました。

一年は八万七千六百時間です。どうか、皆様、おのおのの年齢から割り出し、残りの時間を大切に悔いの残らぬよう、ご活躍あらんことを願うものでございます。

私は六十歳を過ぎてから、人生が本当に幸せな一日一日が送れたのではないかと思います。家庭においては、子供らに親らしいことは何もしてやれなかったのに、本当にみんなが「爺ちゃん、体の調子はどうや」と言って体をさすったり、また「栄養をとらなあかん」と言って嫁が料理をつくってくれたり、兄弟みんな日曜日に寄って、部屋の掃除をしたり、本当に至れり尽くせりに面倒を見てくれ、私ほど幸せ者はなかったと、一人、部屋から子供らのほうを向いて手を合わせておりました。

なお老人会の皆様には、ゲートボールをはじめ、旅行、ぼちぼち広場、忘年会、新年会と、老人同士で語らい、忘れることのできない老後生活をさせていただいたことに対し、お礼と感謝を申し上げます。今後はお体をお厭いになり、楽しい老後の人生をお過ごしになることをお祈り申し上げます。

いろいろと申し上げたいことは多々ございますが、言い尽くすことはできません。

最後に、本当にお集まりいただきました皆様方の、本日お集まりいただきました皆様方のご健康とご多幸をお祈り申し上げつつ、お礼の言葉と最後のお別れの言葉に換えさせていただきます。どうも、ありがとうございました。それでは皆さん、さようなら、さようなら、皆さんの健康を祈ってます。さようなら、（泣きながら）どうかお幸せに、さようなら。（泣きつつ）さようなら……。

第2章　葬送アンケート

人は死ぬとどうなるか？

このテーマは人間にとって永遠に不可知なのかもしれない。

科学的にみれば人が死ぬということは絶対喪失だから無である。跡形もなくなってしまう。肉体は紛れもなく骨となり、最終的には水になる。精神（心）は肉体の機能であり、精神機能を司るのは腹であるといわれ、その意味で肉体に付随しているから精神（心）も消滅する。しかし、死者の遺伝子は間違いなく子々孫々に受け継がれていく。死者に対する評価や思いも残る。

他方、肉体と精神（心）のほかに〝意識体としての魂〟があるという考え方は根強い。宗教家や宗教の信者でなくともこの考えを受け容れている人は多い。実際には羽仁進著「大いなる死（光文社）」にあるように、魂は宗教の作り物であり、人間の可愛らしい想像であるとしても、人が死ぬと魂は肉体から離れるがやがて再生すると信じることができれば安心できる。死の恐怖や死後の不安から解放される。

アンケートでは、「肉体も精神も消滅するけれども、意識体としての魂は永遠に残り再生する」という回答が四三％を占め一位にきている。「特定の人間関係を条件に魂は残る」という回答を加えると四四％になる。信じることは力になるという証左であろうか？

真実は「精神は消滅するけれども、肉体は遺伝子を通じて引き継がれる」ということだと思われるが、この支持率は二九％である。死んでも肉体は残るという事実を理解できれば、これも安心につながると思うが、日本では通念になっていない。

ところで、「肉体も精神も魂もすべて無に帰する」、「宇宙から生命をもらったのだから死ねば宇宙に戻る」という一徹な回答がある一方、「わからない」という回答が一九％ある。これは死について考えたことがないという人々であろう。

どんな葬式を希望するか？

死直後の葬式のありように関する質問である。日本にはつい最近まで沖縄に風葬があったし、現在は九九％が火葬であるが土葬も行われており、厳密には死んでから埋葬までを問題にしなければならない。

先ずは、死の直後の葬式について。

○既存の宗教の葬式を希望する人々は、仏教・キリスト教・その他を含めて一六％。
○香典を辞退し家族と縁者だけで簡略化した密葬を希望する人々は四一％。
○読経なし、焼香なしのお別れ会を希望する人々は三五％。
○火葬だけの直葬を希望する人々は八％。

生前にパーティをしてお別れする「生前葬」は支持がなかったが、これは死期が迫っていて本人の出席が可能な場合や有名人などに限られるのであろう。一般的ではない。

宗教と密接な関係にある人々はその宗派や教派のしきたりに従った葬式を行うであろうが、そうでない普通人はできるだけ簡素な葬式を望んでいる。それは費用が嵩むという問題のほかに、葬式が形骸化して心が通わないこと、あとさきの手間が煩わし過ぎることに起因している。

特に注目すべきこととして、「読経なし、焼香なしのお別れ会」と「直葬」は寺を排除しているということである。坊さんは不要なのである。

かつて日本にまだ地域共同体が機能していた頃は、人が亡くなると近隣の〝葬式組〟（地域によっては無常講とか常楽講ともいう）が当番制ですべてを取り仕切ってくれた。寺もその一員として葬式に取り組んだ。〝お布施〟も喪主の分に応じた無理のない金品で充分であった。それでも何かと出費が嵩む故、近隣の人々が分に応じて〝香典〟という寄付を行った。すべてが近隣の相互扶助で行われた。今でも地方にはこの風習が残っている。

次に埋葬について。

○土葬は支持がなかった。

○しかし、遺体を自然界にそのまま戻したいという人々が二二％に達した。つまり、風葬や鳥葬や水葬である。その結果、遺体が骨になったら住まいの近くに「詣り墓」を設け納骨するという人々が大半であるが、「植樹葬」、つまり、一本の樹を植えて根元に骨を埋めたいという人もいた。

○火葬は七八％の支持を得ている。火葬後の埋葬については、「墓」が六四％、「墓は不要で自然や宇宙に散骨」が三六％。

自然の循環原理からいえば、死体をそのまま自然界に任せる（風葬や鳥葬や水葬など）のが最適だし、土葬がこれに次ぐが、これらは都市化の最中にあって場の設定が難しい。そのせいか、火葬して骨や灰を自然に戻すという代替案が浮上してくるものと思われる。

墓は必要か？

墓の要否については、必要二九％／不要五七％／不明一四％にわかれた。

埋葬の質問では、「墓」または「詣り墓」に埋葬するという人々が七一％もあったが、要否を改めて問うと必要は二九％と急降下している。これは既に墓を持っている人々がいるからであろう。墓があるのだからとりあえず埋葬は墓にと考えても無理はない。

突っ込んで墓必要派に墓の種類を聞くと、「家単位の墓」六対「共同の墓」四にわかれる。共同の墓という志向に注目すべきだと思う。個人の墓という希望はなかった。家単位の墓にも疑問が持たれている。家単位の墓は後継ぎがいることが前提になっているからである。寺は永代使用権を販売しながら、後継ぎがいなくなると無縁墓にしてしまう。遺骨も合葬する。

さらに、墓不要派に、墓は何故不要かを問うと、次のようになった。

○永遠に生き続ける意識こそが自分だから墓はいらない（一・七％）。

○後継ぎがいないと無縁墓になってしまう（四〇・三％）。

○仏壇や写真や懐かしんでもらえるシンボル（詣り墓のようなもの）があればいい（四七・五％）。

○遺体は自然界に帰し最後は水になるのだから共同の墓所があればいい（五〇・八％）。

墓は人間の自然界に対する訣別宣言であるという人がいる。ある意味でそうである。自然界と隔絶して石の城をつくり、そこへ骨を封鎖するわけだから、自然の循環原理に反する。そこまで言わなくとも、骨は自然に帰った証拠なのだから骨になってまで固有の識別が何故必要かと問えばいいように思う。もうその必要はないのではないか？　一体としての自然そのものでいいのではないかと思う。

多くの人々は墓地を買ったと思っているが、墓地には単なる使用権しかない。所有権はない。しかも、家単位の後継ぎがいることが条件になっている。だから、永代使用権と謳っているが

嘘である。後継ぎがいなくなると取上げられる。おかしな話である。そして、利用者には後継ぎを条件にしながら寺の後継ぎについては不問である。寺だって後継ぎがいなくなれば廃寺になる。寺が潰れた場合の永代使用権はどこにも保証がないのである。出鱈目な話である。

戒名は必要か？

戒名とは元々僧職にある者が守るべき規則である戒律を受けて僧や尼になる時に師から与えられる名である。僧職者の名前であって普通人の名前ではない。しかも、生前にもらう名である。それを死者にもつけようというやり方である。誰が、いつ頃から始めたのか定かではない。日本の仏教は死者に戒名をつけている。この要否を問うてみた。

結果は、必要七％／不要六四％／不明二九％となった。

不明の二九％は、元々不可解な戒名であってみれば当然といっていい数値であろう。

必要派は少数であるが、その理由は〝戒名制度には残った人々とのつながりのシステム〟が

あるという点にある。しかし、戒名でなく、本名の方がつながりが理解しやすいように思われる。

不要派の不要とする理由は実に明解である。

○残された者の立場では共に生きた時の名前で呼び続けたい。
○戒名は使うことがない。
○戒名はわかりにくい。
○金額によって名が変わるようなものはいらない。
○成仏した者に位はいらないし、戒名で位を表す必要はない。
○魂は滅し無に帰するので戒名などいらない。
○永遠に生き続ける意識こそが自分故戒名など不要。
○仏教徒ではないので戒名はいらない。

こうしてみると戒名などというシステムは、営業用の商品として発想された匂いが強い。ちなみに戒名は中国やインドにはなく日本固有のもののようである。

葬送機関のありよう

社会のどのような機関が葬送を担当すべきかを問うてみた。

○葬儀会場・火葬場・葬式・墓所のすべてを自治体の運営にした方がいい（三五・七％）。
○自治体と葬儀会社と神社仏閣がそれぞれ専門的に担当していい（三五・七％）。
○自治体に任せると差が出るので全国一律にすべきだ（一・〇％）。
○個人の判断で自由に選択すればいい（二・九％）。
○無回答（二四・七％）。

葬送機関は官民入り乱れている。官は費用は割安だが融通が利かない。民は融通は利くが費用は割高になる。しかも、民には無知につけこまれるという不安がある。

この問題には葬送費用の社会的基準づくりと透明度、それに死生観に基づく選択肢という両面がある。葬送費用の基準が公認されれば担当機関はどこでもいいように思えるが、官の方が基準を徹底できるかもしれない。民には競争原理が働くので格差が必ず出る。

死生観に基づく選択肢の面からみると、土葬とか火葬という遺体の処理については選択の余地はあまりない。埋葬と法事については選択肢は広い。埋葬の場所は特定する必要があると思われるので官がいいだろうが、法事については場よりも担当者が軸になるので官では対応が難しいかもしれない。

もうひとつ墓地提供主体の問題がある。墓地行政の中心にあるのは福祉サービスとしての墓地の提供である。地方公共団体は自らが墓地の供給を行わなくてはならない。これは明治維新から現代に到るまでの国策であった筈である（森謙二著「墓と葬送の現在」・東京堂出版）。墓地の供給は宗教団体ではなく地方公共団体の義務である。宗教法人法によると、寺院墓地は宗教活動に必要な施設であるが、事業型墓地は公益事業であって宗教施設ではない。ところが、この公益であるべき事業型墓地について、宗教法人は名義貸しを行い、墓石の抱き合わせ販売を行うなど独占禁止法違反の営利事業を行っている。これにより墓地の使用者は多くの不利益を蒙っている。

どんな法事を希望するか？

仏教では死後すぐの葬式のあと、四十九日・百ヶ日・初盆・年回忌などという法事を行う。これらをどう考えるかという問題である。

○葬式をすませた後は何もしない（三三・九％）。
○盆の墓参りだけする（二六・四％）。
○服喪期間を決め（例えば三十日）、その最後に親類・縁者が集まって会食する（一四・三％）。
○喪に服するという考え方は採らず、派手な服装でパーティをする（一・〇％）。
○形にとらわれず、故人との関係の強さに応じて弔う（一・〇％）。
○尊敬・感謝・愛をもって魂と対話する（一・〇％）。
○年に二回ほどキリスト教式の墓前追悼礼拝を行う（一・〇％）。
○伝統的な仏教の法事をする（二一・四％）。

大別すると、「葬式後は何もしない」三四％／「形にとらわれず墓参りや会食をする」四三％／「宗派・教派の法事をする」（二三％）となる。

熱心な信者は別であろうが、普通人は宗派・教派の法事の意味や目的を知らない。服喪期間というのも、例えば、四十九日なのか、三十五日なのか、年賀状は亡くなった年は出さないなど、よくわからない。その上、気持ちよりも手間隙が大変である。それなら残った者の気持ち本位でいいのではないかということになる。

型通りという回答者もすべてが信者ではなく、周りから〝した方がいい〟といわれてしている場合が多い。

法事については特に死生観をはっきり持って対処した方がいいように思われる。

寺の社会的役割

寺が葬礼に関与するのは、寺と檀家の関係が確立する江戸中期以降である。しかし、明治の末期までは葬礼は地域共同体の葬式組が差配し、寺もその関与者としてかかわっていた。

地域共同体が崩壊し、葬式組が機能しなくなって、葬礼は職業集団に委ねるしかなくなり、今、寺は〝葬式仏教〟といわれ、葬式しかしないように思われている。実際に殆どの寺がそうでもある。しかし、寺の数と死者の数から考えると、寺は葬式では成り立たない。日本には六四、九五四の寺がある（二〇〇四年）。日本における年間死亡数は平均九六〇、〇〇〇人であ

る。一ヶ寺平均、年に一五件の葬式しかないということになる。ほかに神社が八〇、〇〇〇社もあり、教会もある。葬式事業で寺の経営を考えることは誠に困難である。廃寺も増え続けている。

寺の歴史的役割は終わっているという評価を筆頭に、この調査の全体からみると葬式から寺を排除する傾向が強く、積極的な期待というよりは寺に何かを期待するとしたらという問題意識の回答が大半のように思われる。

○仏や過去と精神的に交われる異空間。
○歴史的観光名所。
○博物館か資料館。
○緑地帯。

それぞれ一％しかないが、これ以外に寺に求めることはないという意見である。

○悩みの相談や助言（五七・一％）。

○苦しんでいる人の救護（四二・九％）。
○離婚や遺産相続などの調停（二八・六％）。
○地域住民の相互扶助（二一・四％）。

生活支援というくくり方のできる期待である。かつては駆け込み寺や縁切り寺といわれ、庶民の宿泊所という役割もあった。頼母子講も行われていた。自然災害や人災に対する対応は今や単なるボランティア参加で、宗教家としての役割自覚に基づく活動は皆無である。かつて良寛が文政二年の新潟三条大地震の後で、友人の杜皐（とこう）に送った手紙を思い出す。「地震は信に大変に候。野僧、草庵は何事もなく、親類中死人もなくめでたく存じ候。しかし、災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候。死ぬる時節には死ぬるがよく候。是はこれ災難をのがるる妙法にて候。」今、これらの機能は寺には全くない。

○葬式や法事（五〇・〇％）。
○生き方や死に方の伝授（一・〇％）。

現代の寺に死生観の伝授を求めるのは無理であろうが、葬式や法事をするのなら当然の役割であるかもしれない。

○地域における教育（五七・一％）。
かつて寺子屋といわれる地域教育が行われ、優れた人材がここから育っていた。

○祭りなどによる地域住民の精神的靭帯の強化（五七・一％）。
○地域における交流や娯楽（二九・六％）。
○地域における芸術の振興（三五・七％）。
祭りは今でも行われているが大半が観光化していて地域住民の結束という観点を失っている。芸術家の育成や芸術家の舞台空間という役割も昔話になっている。最近になって演劇をしたり、コンサートを開く寺が話題になってはいる。

○地域住民の管理（二一・四％）。
寺はかつては宗門人別帳によって戸籍の管理をしていた。今、その機能は不要であるが、土地の変遷や過去帳などによる個人の履歴などを記録する機能は必要かもしれない。

さて、しかしである。寺も考えて生き残りを模索している。それをいくつかご紹介してみよう。

○地域拠点のための寺（浄土宗大蓮寺）

元来、寺には学び（教育）、癒し（福祉）、楽しみ（芸術・文化）という三つの要素があった。寺子屋があり、僧医がおり、奉納芸や勧進興行があった。明治以降、教育は学校へ、体が病めば病院へ、芸術・文化は劇場へと機能分与された。寺本来の姿に立ち返るためにはもう一度学び・癒し・楽しみを提供できる場を作らねばいけない。

劇場仕様の本堂で、若手劇団の稽古や公演を行い、「アーツなお仕事・発見セミナー」などの学習会を実施している。アーツとＮＰＯの活動拠点にもなっている。

○瞑想会（准正寺）

せせらぎの音と鳥のさえずりが流れ、やわらかい香りが漂う中で、光のトンネルをイメージする瞑想会を実施。３ＤＫの賃貸マンションの寺。仏壇と神棚、壁にマリア像がある。

○修験道体験（七宝瀧寺・真言宗犬鳴派大本山）

一日修験道体験を実施。初心者向けの入門講座だが、山の修行場を巡り、瀧行も行う。

○獅子くりんサンガ（曹洞宗・青松寺）

若手僧侶の指導。座禅会、講演会を通じて、人々の悩みに応える能力の育成に努める。

葬送調査

二〇〇五年五月、大阪府下にお住まいする一〇四名の方を対象に「死」と「葬送」に関する八項目についてアンケートを実施しました。以下、その結果をご紹介致します。

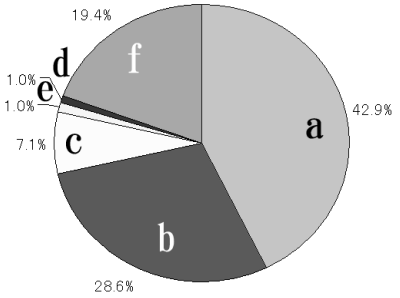
1．人は死ぬとどうなるか？

a　肉体も精神も消滅するけれども、意識体としての魂は永遠に残り再生する（四二・九％）

b　精神は消滅するけれども、肉体は遺伝子を通じて引き継がれる（二八・六％）

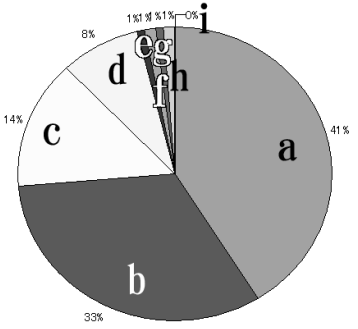
c　魂は人間の創造物であって、死ねば全ては無に帰する（七・一％）

d　人は宇宙から生まれたのであり、死ねば宇宙に戻る（一・〇％）



e 特定の人と人とのつながりの中に精神や魂は残る（一・〇%）
f わからない（一九・四%）

2. あなたがお望みの葬式は何か？
a 香典を辞退し家族と縁者だけで行う簡略化した密葬（四一・〇%）
b 読経なし、焼香なしのお別れ会（三三・六%）
c 伝統的な仏教や神道の葬式（一四・三%）
d 火葬だけを行う直葬（八・一%）
e キリスト教の葬式（一・〇%）
f GLAの葬式（一・〇%）
g 残った人の負担にならない無難な葬式（一・〇%）
h 親しかった者が集まり会費制の飲み会でいい（一・〇%）
i 会費制で生前にお別れパーティを行う生前葬（〇%）



3．あなたがしたいと思う死者の法事

a 葬式をすませたらあとは何もしない（三三・九％）
b 盆の墓参りだけをする（二六・四％）
c 伝統的な仏教の法事〔四九日・百ヶ日・初盆・年忌法要など〕をする（二一・四％）
d 服喪期間を決め（例えば三〇日）、その最後に親類・縁者が集まって会食する（一四・三％）
e 尊敬・感謝・愛をもって魂と対話する（一・〇％）
f 年に二回ほどのキリスト教式の墓前追憶礼拝（一・〇％）
g 形にとらわれず故人との関係の強さに応じて弔う（一・〇％）
h 喪に服さず、派手な服装でパーティをする（一・〇％）

4．あなたがしたいと思う埋葬

a 火葬して墓に埋葬する（五〇・〇％）
b 火葬して自然や宇宙に散骨する（二七・六％）
c 遺体を自然界にそのまま戻し〔風葬・鳥葬・水葬〕、採骨して参り墓に納骨する（二一・四％）

d 遺体を自然界に戻し一本の木を植える（一・〇％）
e 土葬する（〇％）

5. 墓は必要か？

a 必要（二八・六％）・・・どんな墓が必要か？
＊家単位の墓（六〇・〇％）
＊個人単位の墓（〇％）
＊自治体や寺が永久に管理する共同の墓（四〇・〇％）

b 不要（五七・一％）・・・不要な理由は？
＊遺体は自然界に帰し最後は水になるのだから共同の墓所があればいい（五〇・八％）
＊仏壇や写真など参り墓を個人的に身近にもてばいい（四五・八％）
＊ほっとなつかしんでもらえるシンボルがあればいい（一・七％）
＊永遠に生き続ける意識こそが自分だから（一・七％）

c 無回答（一四・三％）

6．戒名（法名）は必要か？

a 不必要（六四・三％）・・・不必要な理由は？

＊残された者の立場では共に生きた時の名前で呼び続けたい（二名）

＊戒名は使うことがない（二名）

＊金額によって名が変わるようなものはいらない（二名）

＊戒名で位を表明する必要はない（一名）

＊成仏した者に位はいらない（一名）

＊魂は滅し無に帰する（一名）

＊仏教徒ではない（一名）

＊永遠に生き続ける意識こそが自分（一名）

＊戒名はわかりにくい（一名）

b 必要（七・一％）・・・必要な理由は？

＊残った人とのつながりのシステムがある（一名）

c 無回答（二八・六％）

7．寺の社会的な役割は何か？

a 悩みの相談や助言（57.1％）
b 地域における教育（57.1％）
c 祭りなどによる地域住民の精神的靭帯の強化（57.1％）
d 葬式や法事（50.0％）
e 苦しんでいる人々の救護（42.9％）
f 地域における芸術の振興（35.7％）
g 地域における交流や娯楽（29.6％）
h 離婚や遺産相続などの調停（28.6％）
i 地域住民の相互扶助（21.4％）
j 地域住民の管理・・・土地の変更推移や個人の履歴などの記録（21.4％）
k 仏や過去と精神的に交われる異空間（1.0％）
l 歴史的観光名所（1.0％）
m 緑地帯（1.0％）
n 生き方や死に方の伝授（1.0％）

ｏ寺の役割は終わっているので博物館か資料館程度の意味しかない（1.0％）

8. 葬式や法事は地方自治体が一括して運営した方がいいという考え方の賛否

ａ葬儀会場・火葬場・葬式・墓所のすべてを自治体の運営にした方がいい（三五・七％）

ｂ地方自治体と葬儀会社と神社仏閣がそれぞれ専門的に担当していい（三五・七％）

ｃ自治体に任せると差が出るので全国一律の方がいい（一・〇％）

ｄ個人の判断、自由でいい（二・九％）

ｅ無回答（二四・七％）

第3章　坊さんのいない葬式

一、絶えないトラブル

○葬儀社とのパッケージ契約

葬儀一式いくらという方式がある。ところが、葬儀一式とは、葬儀社に言わせると、祭壇・棺・人件費のことで、移送車・飲食費・返礼品・斎場費用などの実費やお布施は含まれていないのだそうだ。喪主はそうは思っていない。一式というからには実費もお布施も含まれていると思う。そんな行き違いから、特に、実費部分で水増し請求をしている例も結構多いようだ。

○互助会の積立

生前に葬儀費用の積立をしていて中途解約をした場合、返金されないというトラブルもあるという。

○葬儀社の見積と請求の落差

見積では二百万円だったのに、実際の請求は四百五十万円などという例もあるという。

○葬儀社の独断と押し付け

喪主の無知につけいって、葬儀社が喪主に相談もしないで独断を押しつける例も多い。例え

ば、宗派の違う僧侶を派遣したり、特別に注文した供花を勝手にすりかえたり、分骨用と間違えたなどと言って骨壺を変更したり、遺体の湯灌を勝手にしたり、希望していない死者との最後のお別れをしきたりだと言って強行したりするという。

○葬儀費用を前払いしていた葬儀社が倒産して泣き寝入りした例もある。

モニター一八一七人にもアンケート調査を行い、九四・八％の回答を得た。花屋・仕出屋などの業者の調査も並行して行われた。それらの主な結果をみてみよう。

［葬儀社調査の結果］

○会葬者は減少している（六七・八％）。
○葬儀の売上高も減少している（五五・五％）。
○新規参入がある（六五・八％）。
○葬儀顧客の紹介先ベスト3・・・地域（五二・三％）、寺院（四五・五％）、病院（四四・八％）。
○一旦決まった葬儀社の変更が三分の一ある。
○誰が変更指示者か・・・地域（四六・一％）、寺院（四三・五％）、病院（一一・四％）。

○病院の搬送指定業者が、喪主に葬儀をさせろという営業をしているが、これは抱き合わせ販売の疑いがある。

［消費者調査の結果］

○葬儀をしてもらった同じ葬儀社には二度と頼みたくない（二〇％強）。

○その理由は

サービスと料金が見合わない（三五・二％）。

葬儀社の会館が近くにない（三二・四％）。

料金明細が不明（一四・一％）。

葬儀の進行が円滑でない（一四・一％）。

説明をせずにサービスを追加する（一四・一％）。

○見積書がなかった消費者は（三五・八％）。

○見積書に対する葬儀社の対応

依頼されなくても出す（七三・三％）。

求められれば出す（二六・三％）。

求められても出さない（〇・四％）。

○契約書は

取り交わす（一〇・四％）。

見積書に押印してもらう（三七・一％）。

口頭で約束する（五二・五％）。

○打ち合わせの仕方

具体項目と料金の入った価格表でする（七一・六％）。

写真のない価格表でする（一〇・五％）。

資料はなく口頭で行う（一五・四％）。

価格表のないカタログで行う（二五・〇％）。」

○追加費用の事前説明

葬儀社は・・・している（八四・四％）。

していない（一〇％強）。

消費者は・・・受けた（五二・二％）。

覚えがない（三六・二％）？
受けていない（九・七％）。

○発生した差額の説明・・・説明があり納得した（六七・八％）。
一部納得できなかった（七・二％）。
説明がなかった（二〇・六％）。

［関連業者調査の結果］

○花屋・仕出屋などの関連業者が葬儀社から求められること
協賛金を求められる（三三社）
会員集めを求められる（三三社）
葬儀の補助要員を出すよう求められる（三一社）
イベントなどのチケットの販売を求められる
代金の支払い延期を求められる

○葬儀の代行業者が葬儀社から求められること
別の物品の購入を求められる

他の役務の利用を求められる
葬儀の補助要員を出すよう求められる

以上のような調査結果をもとに、公正取引委員会では将来葬儀の価格やサービスの表示方法に関する指針を策定する計画のようである。

○関与者への心づけ

病院、霊安室、運転手、葬儀会場、火葬場職員、飲食店、葬儀社などへの心づけを要求されることが多いという。

○中学教師の葬式

東京都東村山市で実際にあった話である。ある中学教師の葬式に、生徒の多くが香典を持参、香典持参の生徒には香典返しの引換券が渡されたそうだ。香典を持参しなかった生徒がどんな思いをしたかを考えると恐ろしい。

○寺院費用

寺院費用はトラブルというよりは泣き寝入りのことが多い。

読経と戒名のお布施は二〇〇四年の全国平均では四十八万円であった。しかし、これにはピンとキリがある。

「読経のお布施」は、通夜・告別式だけでも四十万円を越える寺がある。初七日から四十九日までの七回の法事のお布施も三十五万円、このほかにお膳料だのお車代が加算される。初盆は十三万円、年回忌になると一回五万円から十万円もかかる。

「戒名料」は、とらないという寺もあるが、百万円を越える寺も稀ではない。使う文字が違うと跳ね上がることも多い。

「位牌」は、一万円から十万円を越える場合まであるが、位牌を奉納させる寺もあって、この場合は四十万円以上になる。

「卒塔婆」でさえ一枚三万円などという寺がある。

「墓地の永代使用料」と「墓石」、これがバカ高い。

墓地は使用権だけで、所有権はないが、一年単位なら六千円から二万円くらいである。五十年分をまとめて払うのが永代使用料で四十万円くらいになる。五十年以上になってもあとの使用料はいらないというシステムである。しかし、利用者に後継ぎがおり、寺が潰れなければという前提がある。利用者に後継ぎがいなくなれば無縁墓として取上げられるし、寺が潰れたら

泣き寝入りというのが実態である。

墓石は一基四十五万円という寺もあるが、石材や大きさや付属品などによって三百万円とか五百万円になる。一千万円などという破格の寺もある。墓石はいるのだろうか？縄文人は墓標さえ立てなかったのに……。

○公正取引委員会の動き

絶えない葬送のトラブルに対して、公正取引委員会が取引実態調査に乗り出した（二〇〇五・二・八サンケイ新聞）。経済産業省の特定サービス産業実態調査（平成十四年）によると、全国の葬儀業者は四、一九四事業所、取扱件数は六二六、二九〇件、売上高は七、八〇七億円だった。葬儀業には許認可や監督官庁への届出義務がないため雑多な参入が多い。

公正取引委員会は、一月から四月にかけて、全国の葬儀業者の半数にあたる二、六二九業者を対象にアンケートを実施、回収率は四〇・七％だった。同時に消費者一、〇〇〇人にもアンケート調査を実施した。葬儀業者のアンケート結果によると、見積書について、求められれば交付するが二六・三％、求められても交付しないという業者すら〇・四％ある。天候が変わったり、会葬者数が増えたりして発生する追加料金の説明について、全く説明していないという業者が四・一％もある。また、遺体搬送業者が葬儀の契約を強引に迫る例もある。こ

のような行為は独占禁止法が禁止している抱き合わせ販売にあたる可能性がある（朝日新聞二〇〇五・七・二八）。

公正取引委員会では、調査結果をもとに将来、葬儀の価格やサービスの表示方法に関する指針を策定する計画のようである。

二、葬式仏教が勧める葬礼

葬式仏教がわれわれに勧める葬礼の儀式は、先ず、死体処理と鎮魂の葬儀。次いで、霊的存在に対する追善回向（ついぜんえこう）。追善回向は、霊が仏（死霊が祖霊）になるための法事と、毎年仏（祖霊）が生家を訪れる盆と彼岸の年中行事である。

霊が仏になるための法事には、中陰の法事と年忌の法事がある。

○中陰の法事

人は死ぬと、死の前日から数えて四十九日間、仏になるための審査を受けなければならないことになっているという。この期間を中陰といい、この期間が終わることを満中陰という。この間に七人の裁判官が霊の審査をする。裁判官にはそれぞれ守護仏が対応している。次の通りである。

〈呼び方〉	〈裁判官〉	〈守護仏〉	〈審査内容〉
初七日	泰広王	不動明王	書類審査により生前の行状が裁かれる
二七日	初江王	釈迦如来	生前の殺生の罪が裁かれる
三七日	宋帝王	文殊菩薩	生前の邪淫の罪が裁かれる
四七日	五官王	普賢菩薩	秤で生前の罪状の重さが量られる
五七日	閻魔大王	地蔵菩薩	水晶の鏡に生前の罪状が写し出される
六七日	変成王	弥勒菩薩	秤と鏡で生前の罪状が再吟味される
七七日	太山王	薬師如来	最後の審判が下される

死者は六つの鳥居の一つを選ばせられ輪廻先が決まる
これが、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六道である

○年忌の法事

年忌の法事は仏の修行とされる。ここでも裁判官に守護仏が対応している。次の通りである。

〈呼び方〉	〈裁判官〉	〈守護仏〉
百ヶ日	平等王	観音菩薩
一周忌	都市王	勢至菩薩
三回忌	五道転輪王	阿弥陀如来
七回忌	蓮華王	阿閃如来
十三回忌	抜苦王	大日如来
十七回忌	抜苦王	大日如来
二十五回忌	抜苦王	大日如来
三十三回忌	慈恩王	虚空蔵菩薩・・・仏は神となり弔い上げとなる

中陰の習俗はインドの在来習俗の影響があるとされる。年忌の法事は中陰の七仏事に、儒礼に基づく百ヶ日・一周忌・三回忌を加えた十仏事が中国で展開され、これが日本に入って七

回忌・十三回忌・三十三回忌を加えて十三仏事となり、さらに十七回忌と二十五回忌を加えて十五仏事となったとされる。経典には中陰の典拠しかなく、十三仏事以降は日本での独自の展開である（「仏教文化事典」　佼成出版社）。

「仏教民俗学大系・4（名著出版）」によると、年忌法要は寺が檀徒を集めるため民衆教化の手段として考案されたものであるとしている。

しかも、釈尊やインド仏教にとって、仏教とは正しくこの世を生きることであり、死後のことは二義的なものであった。釈尊在世中は、死後の問題は課題の対象ではなかった。死後の存在としての霊魂の問題は永遠不変の実体の存在を認めない仏教の立場からは経験も論証も不可能な無記であった。つまり、善とも悪とも記述・説明がつかないことであった。だから、釈尊は、「死後に霊魂は遊離するのか」という弟子の質問に答えなかったといわれている。また、経典などによると出家者は寺の成員や自分の父母を除いて、在家の葬儀にかかわることがなかった。釈尊自身も父の葬儀の折にその棺を担いだだけである（仏教文化事典）。

湯灌や納棺という死体を扱う現場からの報告、「納棺夫日記」（青木新門著・文芸春秋）からも引用しよう。「私が、この葬送儀礼という仕事に携わって困惑し驚いたことは、一見深い意味を持つように見える厳粛な儀式も、その実態は迷信や俗信が殆どの支離滅裂なものであるこ

とを知ったことである。迷信や俗信をよくぞここまで具体化し、儀式として形式化できたものだと思うほどである。こうした葬送儀礼様式や風習が生まれる原因も、元はといえば〝我々はどこから来て、我々は何で、我々はどこへ行くのか〟があいまいであることからきているのである。」

「親鸞の思想の大きな特徴の一つは、光如来に出会って〝死即仏〟となることである。如来によって死即仏となるから、引導もいらないし、位牌も、手甲脚絆も、六文銭も、杖もいらない。三途の川も閻魔大王も関係ないから、追善供養も必要ない。だから、真宗では、追善供養と言わないで、法要とか謝恩講と言っている。要するに親鸞は、仏教伝播の途中で中陰の思想にまとわりついた中国の十王思想を排除したのである。」

「死は医者が見つめ、死体は葬儀屋が見つめ、死者は愛する人がみつめ、僧侶は死も死体も死者もなるべく見ないようにして、お布施を数えているといった現状がある限り、今日の宗教に何かを期待する方が無理といえよう。宗教が現場の死生観を説くことができなくなったとき、その宗教は生気が失われ、滅びへ向かうのは当然である。」

してみると、四十九日や年回忌は無知の慣習といえないこともない。皆がそうしているから、

周りがそうする方がいいというからそうしているのであって、意義や根拠を問われると詰まってしまう。

○彼　岸

三月二十一日（二十二日）の春分と九月二十三日（二十四日）の秋分の前三日から七日間を彼岸という。この世は迷いの此岸、悟りを開いた者が行くところが彼岸である。彼岸には、寺は彼岸会をし、家々では墓参りをする。「仏教文化事典」によると、彼岸は日本に独特の仏教行事のようである。その起源は桓武天皇（七八一～八〇六在位）の弟・早良（さわら）（親王の怨霊の追善供養だったという。これが平安中期になって、太陽が真東から昇り真西に没する春分・秋分の日に落日を拝み西方極楽往生を願う浄土観と結びつき、死者の追善供養へと発展した。祖霊の追善供養としての彼岸が一般化するのは室町時代からである。

昼夜の時間が同じ春分と秋分の日をはさんで祖先を供養し、故人を偲ぶ行事が、宗派・教派を問わず、日本全国でほぼ同じように続いているということは、ある意味で素晴らしい民俗である。大切にしたい行事である。

○盆

盆は盂蘭盆（うらぼん）の略で、旧暦の七月十五日（新暦の八月十五日）を中心に行われる祖霊供養である。「仏教文化事典」によると、釈尊の高弟・目連が地獄に落ちて逆さ吊りの苦を受けている母を、釈尊に救いを求め、その教えの通り僧が安居を終える七月十五日に百味飯食（おんじき）を盛って衆僧を供養したところその母は極楽へ迎えられたという故事に始まる。

この盂蘭盆会は推古天皇（六〇六年）の頃日本に伝わり、聖武天皇（七三三年）の時には宮中行事になっている。平安時代には盂蘭盆会が盛んになり、江戸に入ると、「迎え火」と「送り火」が始まる。盂蘭盆会は日本の独自の祖先信仰と融合して世界に類をみないものになっている。送り火と同じ趣旨の精霊流しや灯篭流し、あるいは盆踊り、さらに七夕祭との融合もある。つまり、七夕祭の供え物である瓜やそうめんが盆供となり、盆の供え物の瓜や茄子で作った馬が七夕祭の供え物に加わっている。

この行事も宗派・教派を越えて民俗となっている。盆に里帰りする祖先を迎えて、飲み食い歌い踊って、また送り帰すという純朴でおおらかな祖霊祭祀は捨てがたい味がある。これも大切にしたい行事である。

私は葬式仏教の葬礼に積極的な意義を発見できない。祖先を大事にすることと、故人を偲ぶことは同じではない。

祖先を大事にするということは、三十代遡ると一億人になるというつながりを確認することであり、祖先の伝承を絶やさないことだと思う。一人の人間は連鎖の一環であり、みんなのために生かされている存在である。祖先の知恵を蓄積し絶え間なく進歩し続けることだと思う。

故人の冥福を祈って生きている者が善行に努めることを、仏教では追善供養といっている。四十九日も年回忌もそういう葬礼になっている。冥福とは冥土の幸福であり、それを願って遺族が善行に励むというのは何か筋違いのように思う。死者の冥福を祈ることよりも、生きている者が循環の中で生かされている役割を再確認し、死者の知恵を今に生かすことこそ意義のあることではないかと思う。

ところが、仏教を越えて民俗となっている、彼岸や盆は日本全国でほぼ共通しており、祖先を大切にする行事としては未来に残すべきものだと思う。

三、葬礼の今日的意義

仏教の葬礼には意義がないが、その分死者を出した人々は独自の葬礼を考え始めている。その実例をいくつかご案内しよう。

○死を実感する体験

通夜の席に子供を連れて行き、死者の前に正座させ、自分と死者との生前のかかわりを話して聞かせる。死に顔を見せ、遺体に触れさせ、近親者の嘆き悲しむ姿を心に焼き付けさせ、通夜の席での振舞い方を教える。子供には、死に対する現実感、死者に対する畏敬の念、死を悲しむ家族の気持ちを伝えたい（朝日新聞　二〇〇五年二月五日　鈴木一作氏の投稿文より）。

○子供の死生観

かつては九歳前後といわれていたが、最近は七歳頃から子供の死生観が確立するという。親と子が日常的に死と向き合う努力をする。飼い犬や猫の死、植物の死、近親者や子供の友達の死には日常茶飯に接する。「死ぬってどういうこと?」、「死んだらどうなるの?」、「死ぬ

のは怖い」という子供の疑問に親として正面から向き合って話す（朝日新聞　二〇〇五年六月十日）。

○死は克服の対象ではなく受け容れるもの（日経新聞　文化欄　99年2月27日）

WHOの健康の定義に、スピリチュアリティー（自然界に物質的に存在するのではなく人間の心にわきおこってきたけだかい観念）を取り入れようという動きがある。死を穏やかに受け容れることが心身の健康にとって重要である。

患者の精神状態が治癒に影響することに注目した精神腫瘍学や死を受容する医療（思想として死を考えられる療養施設づくり）が提唱されている。

〝元素レベルで見た人間は他の生物や物質と何ら変わらない。呼吸や新陳代謝によって物質としての「私」は常に入れ替わっている。体は借り物である〟（惑星物理学者・松井孝典）……魂は体を借りているという先住民の思想に共振している。

〝人間の認識の根底に魂の働きを見る。それは個人に属するのではなく自分が外部と出会う場としても考えられる〟（心理学者・河合俊雄）……個人について考えを深め内へ内へと向かっていった先が外部につながっているという感覚である。

○死にじたく

覚書や遺言書を作り、葬儀について、例えば、無宗教で、酒肴を存分にふるまうお別れ会にし、音楽はジャズとシャンソンで、供え物や香典は辞退するというようなことをしるしておく。遺骨については思い出の地に散骨してほしいなどと書いておく。費用は自分の口座から使い、残りは福祉団体に寄付してほしいなどと記しておく。それに、連絡先と連絡時期なども付記しておく。

覚書は誕生日ごとに見直す。家族や親しい人々と、自分が意思能力を失った時や死亡した時に覚書の通りにしてほしいということを話しておく。

○阪神大震災の慰霊モニュメント

神戸、芦屋、西宮など二三〇ヶ所に震災の犠牲者を慰霊するモニュメントができている。大半が地域住民の手で自発的に設置された。そして、このモニュメントをめぐるウオークが年々盛んになっている。

葬礼は、これまで「死者を弔う」ものとされてきた。人の死を悲しみ悼み、死者の霊を慰めるということは、生きている者による別れの儀式である。生と死は異界であり、生きている者の深い悲しみとともに、死者をあの世へ送り出すケジメであった。

最近は、この葬礼を自分自身の別れの演出として意義づける動きが増えている。生前葬や死にじたくの覚書はまさに「永久の別れの自己演出」である。死を受け容れ、死を計画的に考えるということは、実は重要な生き方である。〝生きている間が華、死んでしまえば元も子もない〟と思っていると生き方が無責任になるが、〝死んだらこうしてほしい〟と計画できれば生き方が明瞭になる。死に方は生き方を決めることでもあると思う。

もうひとつ、私は葬礼に〝伝承〟という意義を求めたい。どんな人間にも正と負の両面があるが、身近にいる者ほど死者の負の面だけを見ている。特に、老親を認知症などで自宅介護をした近親者は〝舅は頭の上に乗せた漬物石〟のような存在としか思えない。ところが、葬礼を通じて他人の死者への評価を知ると全くの別人の姿を見る。葬礼が死者を全く別の角度から見る機会になる。死者への認識転換である。これは死者が子々孫々、未来へ、何を伝えたかった

かという認識に通じる。葬礼に際して遺稿集や回想録などを出版する例の中に、死者の伝承を紐解く試みがある。

自分の葬礼について、ただ弔ってもらえばいいのか、自ら別れの演出をしたいのか、あるいは自分の伝承を聞いてほしいのか、三つの選択肢があっていいように思う。

四、縄文の葬礼

昭和の初期まで日本の葬礼は全国的に共通していた。多分、太古の縄文時代からの慣わしだったのであろう。そして、その典型がつい最近まで沖縄やアイヌの葬礼に色濃く残っていた。これらは仏教も含めて民俗であった。つまり、地域共同体の人々が相互扶助で行う葬礼であった。特定の宗派や教派の葬礼ではなかった。

○縄文の葬礼

縄文人は人が死ぬと祖霊になると考えていた。祖霊になって生きている人間を守ってくれると思っていた。死は祖霊になるための旅立ちであり、旅立ちを祝った。だから、葬礼は祭りであった。

縄文時代は一人ひとりに平等に同じ大きさの墓穴あるいは埋葬地があった。墓穴は屈葬する場合は円形、これがゆるんだ楕円形、伸展葬の場合は長方形であった。

遺体は樹皮製の舟形に入れられ、あるいは編んだ布にくるまれ、また薦（こも）の上に置かれて土を被せられた。

指導的な立場の人々は、死に装束をほどこされ、装身具を身につけ、ベンガラなどの顔料を塗布され、副葬品もあった。装身具にはヒスイ・コハクなどの珠、耳飾り、ボタン状石製品、鳥骨製管玉などがあった。副葬品は、製作や生活の道具類であった。祖霊になるための旅立ちの道具を死者に持たせたのである。

墓穴を掘った土葬が多かったが、谷や小川の際へ安置して土を被せたり、穴を掘らずに土を盛って土饅頭にしたり、貝塚の窪地、河原石を敷き詰めた間、食物の貯蔵穴、廃屋墓、洞窟や岩陰の利用もあった。風葬や樹上葬もなかったとはいえないが、山に葬るということはなかったようだ。

埋葬法には、体を胎児のように丸めた屈葬（内から出る悪霊を防ぐためという説と遺体の保護防衛という説がある）、体を伸ばした伸展葬、頭部に土器を被せた甕被葬（変死者や病死者が災いをもたらさないようにといわれている）、石を抱いたようした抱石葬、骨を容器に入れた二重葬などがあった。夭折した子供は甕に入れて家の戸口の下に埋葬された。子供は祖霊になるための旅に出る力がないので、再び母の胎内に宿れという願いから戸口の下に埋められた。

埋葬の方位は、西頭葬と東頭葬の二つがあった。

墓標は立てなかったが、墓穴の上に石を並べる配石墓、墓穴の壁に木枠を打つ木組墓、石を立てる石組墓などがあった。

縄文早期後半からは集落の中央に集団墓地がつくられた。墓地は複数の埋葬区に区画され、埋葬の頭位が西と東の二つに分かれている。頭位によって抜歯（上顎の側切歯一～二本を抜歯）の有無が分かれている。これは出自を身内と部外者で峻別していたのではないかといわれている。この墓地を核に祖霊祭祀が行われた。これは祖霊に守られて祖霊とともに暮らすこと、そしてその土地が先祖代々の土地であることを示している。そこでは祖霊を核とし死者と生者が一体となった生活が営まれていた。

○沖縄久高島の葬礼

沖縄の人たちは、人は死ぬがそれは肉体が消滅するだけで、死者は形を変えてどこかにいると考えている。脳裏に浮かぶ生前の姿や夢はその証拠だと思っている。これを魂と考えている。

一九九六年まで久高島では風葬が行われていた。島の西海岸に阿檀林があり、その一部に後生（グソー）と呼ばれる一画があった。死人が捨てられる場所である。死体棄送地である。青森県では葬式のことを「投げにゆく」といい、三重県伊賀地方では「ホカラカス」という。小豆島では墓地のことを「トウガラステバ」といい、ほかに「ステバカ」「ナゲショ」「ナゲコミ」などという。

人が死ぬと訃報は村中に口伝えられ、村中の人が出て準備をする。

死者は水浴させ、新しい着物を左前にし、襟に針七本を刺して着せる。手は胸元で組み、膝は曲げ、頭は西向きにする。

棺にはゴザを敷き、枕を置いて、死者を入れ、裏返しで上下逆さまにして白衣をかぶせる。棺はシュロ縄で縛る。出棺は足の方から庭に出す。アカウマーという籠に棺を載せ、これをかつぐ七人の男たちが東に向かって横一列に並び、「○○生まれの者が亡くなりました」と唱えて合掌礼拝する。近親者がススキを束ねたものでアカウマーを叩きながら、「あなたの葬儀の

ために米○○俵、酒○○升を使ったよ」と唱える。

葬列は決まった道を通り集落のはずれで止まり、アカウマーを死者の足を東に向けて置く。かついできた男たちはアカウマーの後方で東に向かって座し、「○○生まれの者が亡くなりました。ニラーハラーの神様、受け取ってください」と唱え合掌礼拝する。他の参列者もこれに合わせる。

それから「捨て墓」の後生（グゥソー）に向かう。後生には男性神職者と近親者だけが行く。他の参列者は集落のはずれで死者に、「守る神になってください」と唱えて帰る。

後生で棺を置く場所は昔から言い伝えで家によって決まっていたが、区画や標識はない。死者の頭を北にして棺を置き、「守る神になってください」と唱えてから後生を去る。近くの井泉で禊（みそぎ）をし、後ろをふりむかずに帰る。野辺送りである。

葬儀の日の昼は死者が使っていた敷物や着物を、親戚の者が井泉で洗い、夜になると親戚の者五名で、葬列の通った道を鳴り物や弓、塩水でお祓いする。

葬儀の翌日、近親の女性二人で棺を開け、死者を見る。四十九日まで毎日朝夕二回、お茶を持って後生参りをする。

住まいの中や近くに「詣り墓」を設け、7日ごとに焼香儀礼を行い、四十九日には儀礼用の

祭具をすべて片付けて死霊祓いを行う。

寅年の旧暦十月二十日には村中一斉に水で骨を洗う洗骨が行われる。しかし、骨は魂の抜け殻であり、「詣り墓」には入れず、祀ることはなかった。後生は葬所であり骨を壷に入れて埋めたりしたが、この「埋め墓」は礼拝の対象にはならなかった。

子供の埋葬は大人と違って、生後十日目の祝い（トゥカンティ）までに亡くなった赤ん坊は葬儀をせずに、人目を避けて夜の間に浜辺に埋めた（沖縄・池間島）。

○アイヌの葬礼

アイヌの人たちは、死をこの世での任務・この世で生きることの一つの終りと考えている。死ぬと魂はあの世へ行くがまたこの世へ戻ってくると思っているからである。別れは悲しいが、旅立ちだから喜ばしいことでもある。出産についても、生まれる時間帯によって不浄と考えているが、出産すると祝いになる。死も生もハレとケの両面でとらえている。循環の思想がある。

人が死ぬと先ず、村の若い者が伝令者として村々を回る。親族がみな集まるまで葬儀は始まらない。親族が揃うまでの間、通夜が営まれる。親族が揃い、村の主な人が集まると、葬儀委員長がきまり、その指示でそれぞれ役割を分担して葬儀の準備をする。男性は墓標や死体包装

の止め串を作り墓掘りをする。女性は死者に着せる着物を縫う。食事や薪とり、水汲みも女性の仕事である。

通夜では屋内の配置を逆にする。食事は死者にも同じように添える。死者から下げられた食事は遺族が食べる。

副葬品は日常的な小物、高価なものは入れない。いいものを持たせるとこの世へ戻ってくるのが遅くなるからだという。

墓標は木を伐って作るが、無言でしなければならない。話をしながらだと選ばれなかった木が墓標になりたがって続けて人が死ぬと思われている。墓標を作った日は火の神への報告を兼ねて認知を求める。そして死者に送りの神である墓標を作った報告をする。

死に装束は一家の主婦が夫と自分のものを予め用意しておくのが美徳とされている。墓標に巻く四つ編みのヒモも同じである。

墓掘りは年長者一人と若者四〜五５人でする。身内が埋葬されている近くに掘る。

副葬品がまとまり、墓標・止め串・死に装束ができ、墓堀りがすむと、葬儀が始まる。まず、着物着せだが、死者と同性の系譜に繋がるものが着せる。旅立ちなので脚絆や手甲もつける。男には左脇腹へ一振りの刀を、女なら玉飾りを胸に置き、遺体の上を飾る。

着物着せが終わると弔問客を迎える。弔問客は自分の食い扶持分の食べ物を持って訪れる。遺族に弔辞を述べ、死者にも弔辞を述べる。喪主は、夫が死んだ場合は妻が、妻の場合は長女とか長男の嫁がなるが、弔問客の弔辞を一人一人泣きながら受ける。

次は引導渡しである。男の役目である。一年に一人で三人までという慣わしがあった。三人以上に引導を渡すとその役をした者が不運になると思われていたからである。引導渡しでは先祖の国への道順を教える。

それが終わると、遺体の薦(こも)包みである。紐は結ばず引っ掛ける程度にし、止め串を打つ。出棺は家の壁を破ってする。足から出す。遺体が外へ出てからは薦包みの遺体の二ヶ所に縄をつけ、棒を通して二人で担ぐ。

墓地は川を渡らない範囲の山手にある。野辺送りの行列が墓地へ着くと、縄を鎌で切って遺体を墓穴へ下ろす。身内の者が最初に手で土をかけ、次いでスコップで土をかける。墓標を立て、年長の男が泣きながら墓標をなでる。

アイヌには墓参りの風習はなかったが、供養は欠かさなかった。先祖の霊に食べ物を供えて供養した。

子供が死んだ場合には、外庭との通路や土間に埋めた。また、妊婦が死んだ場合には、一旦

妊婦を埋葬し、その役の老婆が夜遺体を掘起して胎児を取り出し、再び妊婦と共に葬った。これは子供の魂をあの世へは戻さず、母の胎内へ再び戻ることを祈ったからだといわれる。

○昭和初期までの全国に共通していた葬礼

死者が出ると近隣の者が集まり葬式組がつくられた。そして、この葬式組が葬礼のすべてを取り仕切った。葬式組は無常講とか常楽講ともいい互助組織であるが、正確には三つの社会集団によって構成されていた。第一は死者の家族・親族で喪に服する人々、第二は近隣住民で喪に服することを要求し葬式の手伝いをする人々、第三は葬送に職業的にかかわる人々である。葬礼はこの三つの社会集団の協同作業として行われたのである。

死水、つまり、末期の水は、死者がこの世から絶縁することを意味しているのであろう。

死者の頭を北にして寝せる北枕は共通であるが、ほかに枕をはずしたり、雨垂れの小石を枕にしたり、ゴザに裸で寝せ着物を逆さまにしてのせたり、白い着物を裏返しに着せたり、上畳を裏返す例もあった。これらは成仏の条件と思われていたようだ。

顔をおおう手拭・白布はこの世からの遮断として共通していた。

逆さ屏風や幕を張って死者を囲む風習は、その中はあの世であるという意味なのであろう。

枕元や夜具の上に刀を置く風習は、猫の霊が乗り移るのを防ぐといわれている。

神棚に「閉」と書いた半紙や風呂敷を張り、笹葉のついた竹をあげたり、白扇子を開いて立てかける例もあるが、これには神があの世とは対立するという考えが背景にあるようだ。

枕飯や枕団子は死者があの世へ渡るしるしであろう。産飯に対応している。

湯灌は家移りのために身を清めるという意味があるようだ。

死に装束は全国的に白い衣装に共通点があり、あの世への旅支度である。

棺に卍や十印をつけるのは、あの世とこの世を区切るという意味であろう。

出棺の合図に三度鉦を打ち、死人愛用の茶碗を門口の石で割るのは、死人に対して音で時間と空間を区切っているといわれる。

出棺の折り、仮門を通り、草履・草鞋・下駄を家の中から履いて下り、門口で火を焚くのは、死者が再び帰らぬようにするためだといわれている。

出棺後の家で、四方に跡札を張ったり、死者のいた部屋を掃いたり、石臼や籠を転がしたり、塩や大麦をまいたりする風習は、婚姻儀礼と共通している。

願もどしという死者の生前の立願を切る儀礼も幅広く行われていた。

鉦や鐘が鳴らされる場や仮門で、棺をかついだり、据える時に、3回廻る風習も全国に共通

している。

葬列の順序や衣装は決まっていた。衣装は白という点で共通していた。死人には白しか見えないといういわれがある。

埋葬は殆どが土葬であった時代、棺に石や刃物を置き、松明を使った。石や刃物はあの世とこの世を分け、松明の煙は死者の魂を天に送ると思われていた。

往路と復路で道をかえ、草履を墓の出口で捨てるという風習は、婚礼儀礼と同じである。

会葬して帰宅する時に、塩をまきそれを踏んでから家に入る風習は今でも続いている。

服喪期間は四十九日、その間、髭を剃らない、祭りや掃除をしない、他人と飲食をしない、外出する時は笠をかぶるなどという風習があった。

これら沖縄やアイヌ、それに日本古来の葬礼は葬式仏教に凌駕されて消えてしまった。根強く残っている風習も多いが、その本来の意味や意義は薄れてしまった。今、それを問い直すことは非常に重要だと思う。第五章で考えてみたい。

五、坊さんのいない葬式

葬式や法事をめぐって新しい動きが活発である。その背景にはさまざまな事情がある。

第一に、仏教の歴史的役割が終わったということ。葬式仏教の歴史は百年といわれるが、これがそもそも仏教の歴史的役割の終焉を意味している。仏教の建前はもう通らない。葬礼における宗教の役割がなくなってしまった。寺を含めて宗教は葬式産業であり、葬式業界でしかなくなった。そして、葬式仏教への不信が蔓延している。

第二は、地域共同体の崩壊である。かつて人が死ぬと近隣の葬式組が死者の弔いの一切を仕切ってくれた。寺もその一員であったし、相互扶助の一環としての香典という寄付もあった。今、これはなくなった。死が全く個人化してしまい、死に己一人で対処しなければならなくなった。

第三の事情は社員の死を会社が面倒をみることも減ったということ。バブル旺盛の時期までは社葬が多かったし、会社が社員の葬礼を手伝うことが多かった。これももうなくなった。

第四に、これまでの葬礼の、不透明な高さ・形骸化による死者への追慕や畏敬の無視・煩わしさに対する拒否がある。無知を食い物にする費用の高さ、形骸化して生きている者の気持ち

が表れない葬礼、臨終～葬儀準備～納棺～通夜～葬儀～火葬～直後儀礼～会食～諸手続～納骨～服喪期間～追悼儀礼などの煩わしさ、人々はこういうことに辟易としている。

そして、第五は、死生観の多様化である。多様化というよりは死生観に関する定見の拡散なのかもしれない。死とは何か、死後のありようなどについて日本人としての定見がない。だから、さまざまな試行錯誤が生じている。どうもそうみた方がいい。

［葬式］

まず、従来の葬式にかわる手作りの葬式がある。

○葬儀と告別式を分ける

葬儀は近親者だけで坊さんを呼んで宗教儀礼として行い、告別式はパーティとして坊さんなしの自由なお別れ会にする。

○近親者のみの家族葬

俗に密葬ともいう。オウムが世の中を揺るがした一九九五年頃から家族葬が一般化した。通夜・告別式・採骨・精進あげに坊さんを呼ぶが、これを家族だけで行う。四十九日か百ヶ日が

終わるまでは挨拶状も出さない。

○読経なし・焼香なし・香典なしのお別れ会

生前の写真を展示したり、映像を映したり、好きだった音楽をＢＧＭに使ったり、友人・知人のお別れの言葉を聞き、二部合唱や全員合唱などでパーティ方式の葬礼である。普通の司会者が進行役を務め、坊さんはいない。会費制が多い。

○ありがとう葬

ありがとうで送る新しい葬儀が提案されている（安達文子著「葬祭革命」・筑波出版会）。香典ののし袋には〝礼〟と書くなど死者への感謝を葬儀の基本にする。その要点は次の三つだという。第一は、人の死を遺骨になるまでモノとして扱わない。第二は、遺族に対する心のケアを行う。そして第三に、故人の心を受け継ぐお見送りをする。

いわゆる手作りの葬式である。事前の企画と準備が肝心である。

まず、遺体の処理。これは手続きなのでどんな場合にも欠かせない。遺体の運搬は業者を使

うか、役所を使うか決めなければならない。棺は自前でも作れるが、サイズがあるし、材質も問題だし、内装にビニールを張らなければならないなど既製品を使う方がいい。遺体は死後二十四時間を過ぎないと火葬ができないので、ドライアイスの手配や消臭対策がいる。死亡手続きは役所へすぐに連絡すれば面倒なことはない。火葬場の手配は公営なら役所の手続きですぐにできるが、民営の場合には苦労があるかもしれない。

次は、鎮魂の儀礼。坊さんを呼ばない、葬儀屋も使わないわけで全くのオリジナルだからすべて初体験である。実行委員会をつくって何人かで進める方がいい。喪主が一人でするには大変過ぎる。会の名称に始まり、内容、演出、進行、会場の手配、役割分担、会費、飲食の手配、司会者、記念品、それに案内状など大きな催しの企画に匹敵する用意が必要である。特に、案内状には普通の葬儀ではないので細大漏らさず入れなければならない。

次に、葬式そのものをしないといういき方がある。かつての日本には僧職にありながら葬儀無用を唱え実践した人がいた。親鸞上人、一遍上人、沢庵和尚である。沢庵和尚は、「経を読むことなかれ、衆僧・着衣・喫飯平日の如くせよ、塔を建て像を安置することなかれ、碑を建つことなかれ、年譜・行状を作ることなかれ、ただ土を覆て去れ」という遺戒を弟子たちに残

している。これこそ本来の葬礼であろう。

○直葬（ちょくそう）

遺体を火葬する以外一切の儀式をしない。火葬の予約を取り、それまで病院や業者に遺体保管を依頼する。東京では霊柩車の会社などが遺体を預かるサービスを行っている。自宅で遺体を保管しなければならない場合もある。遺体の処置と搬送の手配はしなければならない。さらに、骨あげと遺骨の処理は決めておかなければならない。「墓地、埋葬等に関する法律」によると、火葬後の遺骨は持ち帰えらなければならないことになっている。

東京・新宿のある葬儀社によると、扱った葬儀の内、二〇〇四年は四割が直葬、二〇〇五年には五割が直葬になると見ている。

○献体

献体篤志家団体または医科および歯科大学へ献体登録を行う。献体すると、人体解剖学実習で、正常解剖に使われる。献体は葬式をしてからでもいいし、葬式なしでもできる。解剖は一年前後とか、二年以上かかることもある。解剖後は大学で火葬し、遺骨を家族に返す。希望が

あれば大学の納骨堂または墓地に埋葬することもできる。大学では毎年慰霊祭が行われる。

葬式をするにしても、しないにしても、新しい葬式の成否は準備で決まる。

○生前準備システム

生前契約あるいは生前予約といわれ、自分の葬儀を予め決めておく方法である。プレニードと呼ばれるアメリカ生まれのシステムである。

まず、葬儀の内容を詳細に決める。次に、費用とその支払方法を決める。それを契約書として取り交わす。本人と家族の共同契約にする。

日本にも生前契約を行っている業者がある。業者の選択基準は次の点にある。

（1）解約が簡単にできるか？
（2）内容の変更ができるか？
（3）費用の値上がりに対応できるシステムになっているか？
（4）支払いが事後になっているか？
（5）契約の実施保証があるか？

（6）転居した時などのサービスエリアに問題はないか？

［生前準備システム業者の一部］

＊Ｌｉｓｓシステム・・・一九九三年発足。合葬墓の運営をしているもやいの会が母体。本人の意思を保証する公正証書遺言を作成し、二年ごとに内容の見直しをする。東京圏。

＊ウィルバンク・・・会員制。会員が自分の葬儀について〝遺言ノート〟に詳しく書く。葬儀の時には世話役を派遣し、葬儀業者を監督・指示する。東京、神奈川、千葉、埼玉、静岡、福井、福島。

＊日本ＦＡＮ倶楽部・・・一九九五年設立。東京海上火災系の保険に加入することで葬儀費用を確保し、グループの葬儀社が生前予約の受付と執行を行う。そしてＮＴＴテレマーケティングが会員から預かった名簿で訃報の連絡代行をする。会員制。

＊ｉｆ共済会・・・一九九五年発足。全日本葬祭業協同組合連合会が本部となり、ソニー生命と提携し、終身保険とリンクした生前予約システム。入会金一万円で、年会費なし。葬儀を加盟店に申込むと葬儀基本料金の一〇％が弔慰金として受け取れる。葬儀内容の契約はしないが、見積を出して予約は受けている。

＊セレモアつくば・・・葬儀費用は終身保険に加入するか、日本信託銀行に費用を信託して確保する。喪主を決めて共同契約、二年ごとに見直しを行う。

＊冠婚葬祭互助会・・・毎月積立をして葬儀や結婚式の費用にあてるシステム。選択した葬儀サービスを将来保証する。

＊生協、農協の葬祭センター・・・生協や農協が組合員と葬儀社との間に入って内容のチェックを行い、明朗会計に努める。

［埋　葬］

これまで埋葬は墓地の墓と相場が決まっていた。今、墓地にも墓にも新しい動きがあるし、墓を持たない埋葬もある。

まず、墓地には次のような新しい動きがある。

○壁型墓地
○芝生墓地
○ロッカー式墓地

墓には、新しいものも含めて次のようなものがある。

○家墓・・・先祖の供養塔としての家族の墓。

○個人墓・・・個人の記念碑としての墓。

○両家墓・・・夫婦双方の家を一緒に祀る墓。石碑に両家の名前を刻む。実家の墓を無縁化させないひとつの新しい方法ではあるが、両家とは違う名前になる可能性がある次世代には通用しない場合がある。

○共同墓・・・友人や志を同じくする者同士を合祀する墓。既に独身女性だけの墓などがつくられている。新しい動きである。

○総墓・・・ひとつの村や一族を一緒に合祀する墓。これは昔からあったし、今でもある。

○永代供養墓（共同型合葬墓）・・・墓地経営者・地域団体・宗教団体・福祉法人・市民団体などが管理者となり、利用者を特定の家族や親族に限定せず、利用権の継承を条件としない墓。一九九〇年代、急速に普及してきた。合祀墓とか、無縁供養塔とか、萬霊供養塔という名称もあり、内容的にはいろいろあるようだ。形は、墓碑あるいは墓石があり、その中に納骨堂を設け、地下に遺骨を合葬するカロートがあるというようにほぼ共通している。ところが、遺

骨の収蔵になると、最初から合葬するもの、一定期間納骨堂に預かりその後合葬するもの、永久に合葬しないものがある。費用もまちまちである。

○**企業墓**・・・企業の従業員をともに祀る墓。

○**インターネット上の墓**・・・インターネットの墓であるが展開は多様のようだ。アメリカ生まれの“バーチャル・セメタリー”は墓ではなく、故人のデータバンクである。故人のデータを整理・保存し、いつでもどこでも呼び出して活用できるシステムである。例えば、Ｗｏｒｌｄ　ｇａｒｄｅｎｓというのがある。故人の写真・生年と没年・葬儀の様子・臨終の言葉・故人の家族が記録されている。ここへアクセスしてメッセージを追加することもできる。これは故人の情報が後世に引き継がれる有効な手段になりうる。

日本生まれのインターネット墓もある。それはコンピュータをインターネットに接続すると、故人の残したメッセージを見ながらお墓参りができるというものである。墓のイラストが画面に現れ花を供え水をかける墓参が再現される。このインターネット墓は、遺骨ではなく毛髪を〝御髪塚（おぐしづか）〟に安置するシステムとセットになっている。その理由は遺骨ではＤＮＡ鑑定はできないが、毛髪ならできるので故人の認識が永久にできるということのようである。

墓を持たない埋葬もある。

○散　骨

散骨を、大気圏や海・川・山・大地にすることは法律で許されているのか？

散骨に関連する法律は二つある。一つは、「墓地、埋葬等に関する法律」で、その四条では〝埋葬または焼骨の埋蔵は墓地以外の区域に行ってはならない〟とある。もう一つは刑法で、その一九〇条では〝死体、遺骨、遺髪または棺内に蔵置したる物を損壊、遺棄、または領得したる者は三年以下の懲役に処す〟とある。

真面目に解釈すると、散骨はこれら二つの法律に違反しているようにみえる。

一九九一年十月五日、葬送の自由をすすめる会が相模湾で散骨を行った。マスコミが大々的にこれを取上げ、当時の法務省と厚生省はマスコミの取材に対してその法解釈を次のように示した。

＊法務省・・・散骨は遺体遺棄罪を構成するかについて、その行為が相当の方法、つまり、弔慰をもって行われるのであれば犯罪は構成しない。

＊厚生省・・・「墓地、埋葬等に関する法律」では、もともと散骨が行われるということを

予定しておらず、従ってこれを明示的に禁止した規定はない。

法務省の見解は、弔慰があれば問題はないというのであるからいいとしよう。

厚生省は、「墓地、埋葬等に関する法律」の四条は埋葬あるいは焼骨の埋蔵以外の葬法を禁止しているとし、罰則規定もあるのに、墓地以外の区域における散骨を容認してしまった。この見解に立つと、水葬も風葬も鳥葬も認められることになる。散骨は今なし崩しでやり放題という状況にある。骨を灰にし、散骨葬儀をしている業者もいる。世論も散骨を支持しているが、その背景は多分次の点にあるものと思われる。まず、墓地に対する疑問がある。次に、墓の承継者がいないので墓はいらない。そして自然に帰るという自己満足ができる。さらに自分が決める死後という権利の主張である。

散骨は万葉時代から行われていた。しかし、現代の散骨にはいくつかの問題がある。

死者と遺族と散骨地住民の合意形成が不可欠である。

死者の意思確認に基準が必要になろう。

散骨地がどこでもいいというわけにはいかないだろう。散骨地の設定について社会的な基準がいると思う。墓地の中に散骨ガーデンなどと称して区画を設ける例があるが、これは問題がなかろう。しかし、川や海や山や空についてはどこでもいいというわけにはいかないだろう。

そして、散骨地住民の合意も欠かせない。散骨に賛成でも、自分の地域に撒かれるとなると反対という感情は普通のものと思った方がいい。

○宇宙葬

宇宙葬は一九九七年四月、宇宙ビジネスの一環としてアメリカで始められた。宇宙葬は遺骨を納めたカプセルをロケットで地球の周回軌道に乗せるというもの。カリフォルニア州で行われた例はヴァンデンバーグ空軍基地からのロケットの打ち上げであった。テキサス州ヒューストンのセレスティ社の場合は、北アフリカ沖の大西洋上で大型旅客機から発射された商業衛星搭載の小型ロケットへの相乗りで行われた。このカプセルは約十年間地球を周回し、その後大気圏に入って燃え尽きるという。費用は一人当たり百万円。日本人の中にも既に利用者が出ている。

○植樹葬

一本の樹を植え、その根元に遺骨または遺灰を埋める。植樹した樹には、故人の名と命日を記したプレートをつける。人が死んで樹になるというわけである。ここでも散骨と同じ問題が

ある。森林葬というような考え方で、国有林や共有林に植樹葬区域を設定するのが最も望ましい。

［法　事］

○葬式以外は何もしない。通夜と告別式をすませたら普段の生活に戻る。死の直後の遺体の処理を終えれば服喪期間も終わりにする。生と死の仕切りは早い方がいいという意味で一理ある方策だと思う。

○盆の墓参りだけする。盆は仏が生家に帰ってくる日とされている。全国一斉に盆休みがあって、里帰りするという風習は貴重である。年に一回ではあるが故人を思う、そのために親族が揃うというのは後世に残しておきたい行事である。これも一理ある。

○一周忌と三回忌だけする。つまり、一年目と二年目の命日の法事だけをするという行き方である。遺族の悲しみも満二年もすれば忘れられるであろうし、元々年回忌というのは日本の仏教の悪用ともとれるので正味実質がいいのではないかと思う。

六、私の葬儀（遺言に代えて）

私がこの本を書く気になったのは、われわれ夫婦もやがて死ぬが、どちらかは息子や孫たちの世話になるので、そのために書き残しておきたいと思ったからである。途中で坊さんを変えたのも息子や孫たちの代までつきあいきれないと思ったからである。

そういう訳で、私の希望する死に際と葬儀を遺言代わりにしるしたいと思う。

○告知のこと

病状や死期の告知は包み隠しなく受けたい。残りの生を計画して過ごしたいからである。告知について、妻・縫子は受けたくないと言っている。直観が鋭いので受けなくてもわかるからだという。

○延命措置のこと

意思を伝達できなくなった状態や意識がなくなった状態で、一切の延命措置を拒否する。天命に従いたい。この点は妻・縫子も全く異存がない。

○死体の処理は、

風葬が理想、次いで土葬であるが、法的にも住んでいる地域からしても無理がある。火葬やむなしである。

○埋葬は、

火葬後採骨して、すぐにでも納骨してほしい。

二〇〇四年に新潟県新発田市の墓から四十七霊位を茨木市へ移し、佐藤家先祖代々の墓を茨木市につくり、永代管理料も支払った。墓を持たない植樹葬が本来の希望であるが、既に墓があるのでそこへ入れてもらえばいい。

○葬儀は

火葬して、すぐ納骨だから、直葬である。従って、通夜や告別式は不要である。

火葬や採骨にも坊さんの読経は不要である。これを家族と親族だけで淡々としてほしい。ただ、拾って納めるだけでいい。

死亡の連絡は家族と親族だけにしてほしい。百ヶ日が過ぎるまで他言無用をお願いしてほしい。これを徹底しないと、「聞いた」と言って、香典や供花やお供えが届いたり、線香をあげたいという訪問者が後を絶たない。

近隣にも極秘でことを進めてほしい。もし、わかった時には、「故人の遺言で直葬にします。身内だけで火葬と納骨だけを行います。通夜も告別式も行いません。香典・供花・お供えもご辞退します。どうぞご遠慮ください。」と丁重にお断りする。この場合にも他言無用をお願いする。

私が死んだら、医師の手続きと役所の手続きだけでいい。火葬の予約を取り、それまでの死体の保管場所の確保をすればいい。必要な物品はそれぞれ手配するのが難しいので、棺桶、ドライアイス（業務用なので市販していない）、霊柩車、骨箱の手配は葬儀会社に、それだけに限定して頼むのがいいと思う。

○精進あげは、

火葬・納骨の後、立ち会った家族・親族だけで会食をするのは自由にしてほしい。多分、久しぶりに会う人もいるだろうから、会食はした方がいいだろう。

○服喪は、

最初の月忌までいい。つまり、死んだ翌月の命日が過ぎたら喪を解いていい。それで全く普段の生活に戻ればいい。年賀状も出せばいい。絶対喪失を受け容れ、早く割り切った方がい

い。

○過去帳に記帳を、

仏壇に過去帳が備えてあるので、そこへ私の本名と死んだ年月日を記帳してほしい。戒名は不要である。位牌も不要である。卒塔婆などもいらない。

○死亡連絡は、

私の死亡連絡は死後百ヶ日が過ぎてからしてほしい。連絡には、故人の遺言で〝直葬〟にしたこと、〝香典・供花・お供え〟無用、最初の月忌で〝喪〟を解いたこと、そして、〝故人からの伝言〟を添えてほしい。

連絡先は、パソコンの「名簿」（フロッピー）にマークしてある。

伝言は、パソコンの「伝言」（フロッピー）に入れておく。

○死後の諸手続き資料は、

死後に必要な諸手続きの資料は、パソコンの「忘備録」（フロッピー）に収めてある。

○法事は

百ヶ日後に要望があれば〝偲ぶ会〟でも、お世話になりましたという意味で〝謝恩会〟でも、会費制ですればいい。

年忌はしなくていい。
年に一度巡ってくる命日に、仏壇に過去帳を広げて合掌でもしてくれれば、それで満足である。それも覚えていたらで結構。
それから、盆の墓参りはすべての先祖のために墓参りをするのはいいことだと思う。

○死体の処理から法事までの希望について
妻・縫子も私と同じようにしてほしいと希望している。

○インターネットのホームページを、
私が伝承したかったことは、本になっている。インターネット上に〝佐藤眞生の伝言〟というホームページを開いて、私の死亡記事、直葬にしたこと、私の家族たち、そして私の著作を載せてほしい。掲示板に書き込みができるようにして交流をはかってほしい。

○葬儀・法事の費用は、
私名義の口座から支払ってほしい。

○遺産相続は、
私名義の動産および不動産の一切は長男・佐藤競に相続してもらう。

第4章　知己争鳴

―〝自然人〟一八〇号にお寄せいただいたコメントー

ボーズという輩は……

喜多研二

自然人一八〇号を拝読いたしまして、だんだん腹がたってきましたですよ。だいたいボーズという輩は一体全体何者ですか!!　といいたいです。佐藤さんの怒りもっともです。しかし、この変な世の中なんとかならんのでしょうか……。

仏だと思っていたものが……

竹内　洪

佐藤さんの文才は凄い！　もっともっと山ほど言いたいことがあるでしょうに全体像の中、巧妙に主張を記し、痛快な文面でした。

昨日、お話を伺い、とても憤りを感じました。話を伺っている時、新潟震災の小千谷地区であった〝振り込め詐欺〟の事件とオーバーラップしながら伺っておりました。窮地に陥っ

たとき、日頃信心のない人でも、見えざるもの……「神、仏」に心の中で手を合わせるという。「仏」だと思っていたものが「仏」でなかったらと……。

宗教のわかりやすい解説

近藤隆一

私も五年前に父を亡くし、葬式産業とかかわり、寺のお布施の不明解さに困惑しましたが、寺から言わせれば、寺の維持費はそれなりにかかるので、仕方ないのでしょうね。教会の神父や牧師もそうなんですが、どうも宗教関係者には庶民に宗教のわかりやすい解説を行う技術も意志もないようで……。

仏教界を喝破

小村幸治

仏教界を喝破された〝自然人〟一八〇号は痛快でした。

仏教のあり方

笹谷政子

私も仏教のあり方についていつも感じておりましたこと、ズバリ教えていただき、大変感銘深く読ませていただきました。この一文は読者の方々にもコピーして読んで頂こうと考えておりますがよろしいですか？

無知のコスト

鹿嶋春平太

これは無知のコストですね。冷たいようですが。「知識のないことが人を滅ぼす」と聖書にあります。

〝宗教〟となると、顔を引きつらせたり、バカにしたりして、この領域の知識習得を避けてきた。日頃はそれでいいのですが、肉親が死んでどうするかとなると、この時には避け続けておられなくなる。で、無知に乗じた泥沼に引きずりこまれる。あがいても、あがいても抜け出

せない。たっぷりとられる。法則通りですね。冷たいようですが、同情のしようもないですね。

それにしても、泥沼の中でもがきあがいて、問題提起をされるというのは、佐藤さんらしいですね（自由社会とは、泥沼であがきもがく自由もあるという社会です）。

この機会に、他の方のコメント、さらには類似のケースを集めて、薄くてもいいから本にされたらいかがでしょうか。これは売れますよ。いい加減なセラーでなく、大ベストセラーになりうるテーマです。

坊さんと経営者の会

谷口誓司

坊さんがロータリーや商工会議所などの〝経営者の会〟にいて〝牛耳っている〟のはよくありますね……。私も、北大阪商工会議所の会員から〝青年部〟のお誘いを受けるのですが、やはり坊さんがおるようです。斯業とつるんで飲むだけの？　青年部はあまり意味がないので入会はしていませんが、坊さんはやっぱり場違いですね。

私も偉そうなことは言えませんが、〝何でも先送り〟にしている国の体制がなんとかならな

いと、どうしようもない、まさに“世の末”を見ている気がします。そういえば、守口市なんかは葬儀屋の社長が府会議員で、神社の神主が市会議員。ゆりかごから墓場まで……拝金主義者の集まりです（やれやれ……）。戦後日本の縮図を見ているようです。

思わず笑いました

倉光弘己

お怒りのようですが、小生思わず笑いました。実は小生、大学の再建に取り組んでいるのですが、例えば、十八歳年齢の人口は約十年前のピーク時から急激に減りつつあり、二〇〇九年にはピーク時の四〇％も減ってしまいます。このため大学は、ここ十年の内に約三〇％が姿を消すと思われます。同時に、若者をターゲットにしている商売も同様に倒産が増える筈です。すべて少子化のなせる業です。こういう話を大学の教員にしたばかりだったのです。また、葬式に対する人々の意識の変化が急速に起こっています。坊さんにこういう説教をしてやらねばならないのではありますまいか。というわけで、思わず笑った次第。不謹慎ごめん！

お布施が料金になっている

大橋豪之

自然人一八〇号で〝ちょっと違うんじゃないですか〟と仏教界批判。一八一号ではその炙りだしのようで明快で痛快です。お寺さんによりかなり格差があることがわかります。当方では父の時、五七日だけ金額が違うということはなかったです。また、すべてお寺さんに自宅までお越しいただきました。

このようなことに〝慣れる〟というのも困ることではありますが、解らないことだらけです。お布施が料金になってしまってますね。そこが一番の問題だと思います。

お伺い

鹿嶋春平太

前回の返信、一般論として述べたつもりでしたが、読み返してみましたら、佐藤さん個人へ

の批評のようにもとれる形になっておりました。傷つけてしまったのではないか、と案じています。あれは、この種のケースに関する一般的な批評とお取りくだされば幸いです。

さて、今回はお伺いです。

一、佐藤さんの、先回と今回の通信、私の主宰しています〝聖書議論〟にコピーしてよろしいでしょうか。メンバー二〇人ほどの内輪のメールリストです。

二、次に、もし上記をお許しいただけた場合、〝聖書サロン〟に同じくコピー引用するのは、いかがでしょうか。こちらはメンバー一〇〇人ほどの自由参加の会ですので、参加者は特定されていない人も多いです。ただし、聖書に興味ある人が殆どであることは、確かそうです。

とにかく、お父様の件、よくなさいましたね。私にはとても出来ないことです。

佐藤さんは、これ以後、真に自由に動けるようになられて、本格的な活動をいよいよされるだろうと、期待しています。

気にかかっていたこと

鹿嶋春平太

気にかかっていたこと、追伸です。

〈死後四十九日までの七回の法事がインド由来という私の記述について〉

インド由来、ということばに、引っかかっておられるようですね。ホントにそうか、いつどのようにして？

確実なのは、釈尊はそういう教えは全くしてないということですね（拙著「キリスト教のことが面白いほどわかる本」も若干参照）。

だれかが、どこかで創作したのでしょう。鹿嶋は日本のお坊さんかもしれないと思っています。

〈年忌法要が中国由来という私の記述について〉

これもホントに中国由来ですかね。現在、中国のどこでこれをしてるんでしょうかね。また、中国だとしても、それがどうしたんでしょうかね。

確実なのは、釈尊は、そんな教えはいっさいしていないと言うことです。誰かがどこかで創作したのでしょう。

全般的に、インドとか中国とか言われると、簡単に平伏する心理状況がうかがわれます。

また、伝統、というか、昔からのものに真理を認めていく姿勢、それが濃いようですね。し

かし、伝統って何でしょうかね。人間が、少し昔から継続的にするようになったものに過ぎないんではないでしょうか。

まずはこれで進んで

鹿嶋春平太

〈インドや中国由来を調べようという私の返信に対して〉

～～いや、まずは、このままで進まれたらいかがでしょうか。これは結構重い問題に思います。これに関わっていると、大筋が進まなくなる恐れ大です。

お伝えしたのは、私の記憶上の都合によりました。忘れないうちに、書いて発信しておこうとしました。かえって、ご迷惑だったかもしれません。

アメリカの葬式

Ｍｒ．Ｓｔｅｖｅ　Ｈｏｆｆｍｎ

とても興味深いですね。アメリカでも、死を避けようとしますが、多分日本の方がよく避けるでしょう。

無知のコストというのは素晴らしい言葉です。いつか自分もアメリカの図書館から借りた本で、〝無知のコストを避けるための消費者がやる方法〟という本を読んだことがあります。やはりアメリカのそういう商売をする人も高い墓を売ろうとしたり、何でも高く売ろうとしたりします。

最近、マリア（スティーブの妻）のお父さんが死にました。それについてのことを以下に書きます。思い出がまだ新鮮ですから……。

私の父は、〝ただ燃やされたい〟と言ってます。葬式もほしくないです。パーティだけほしいです。父は神様を全然信じていません。アメリカのキリスト教の社会ではちょっと変わった人かもしれません。

マリアの父はどちらかというと、キリスト教の信者です。四ヶ月前に癌で亡くなりました。Luteran 教（キリスト教の一種）の教会で葬式がありました。その教会での儀式は、悲しみもあったが、祝いもしました。イエス・キリストと同じように、マリアのお父さんもまた生きるということがあるからです。素晴らしい人生を過ごしたので、天国に行ったり、そのやったこ

とはまだまだ生きる、ふたつの解釈も出来ると思います。

マリアのお父さんの死体は、高速道路の傍のお墓、近代的な壁（Wall Crypt）に入れられました。高い壁になっています。壁は、区画やレベルがたくさんあります。死体が箱に入れられて、その壁の十二階に入れられました。そのお墓、その壁の前でも、短い儀式もしました。その前の晩にも、Wake（通夜）がありました。これはキリスト教でしますが、ユダヤ教ではしません。死体をなるべくきれいにして、いい服も着せたりして、皆がその死体を見にきます（注：この仕事はエンバーミングという。洗浄・消毒・血液と防腐剤の交換・メイクアップなどをする遺体の衛生保全の仕事である）。二時間も人がきて、死体を見て、尊敬を払います。私は初めて経験しました。凄い経験でした。死を本当にそれで実感しますよ。殆ど誰でも泣くと思います。

アメリカの宗教で、それぞれちょっと違ったやり方があるでしょう。

どうぞ、もし説明が充分でなかったら何でも聞いてください。

まだ土に埋めることがずっと普通でしょう。高い壁の区画に入れられるのはまだ新しいやり方ではないでしょうか。

質問に答えます

Mr. Steve Hoffmn

一、こちらの無知のコストというのは、何も知らないで葬式の家（funeral home）－本当は葬式の会社ですが、宗教とはあまり関係がなさそうですーに行って寝棺を選ぼうとすると、高い木の棺を売ろうとします。プレッシャーもかかるでしょう。〝あなたのお父さんは安い松の木の中でずっと寝させたくないでしょう〟などと言います。そのために消費者団体が出した〝死について、葬式についての消費者ガイド〟のビデオも一度図書館から借りました。

二、順番は宗教または宗派、人にもよると思いますが、マリアのお父さんの場合は、金曜日の夜死人を見る〝wake（ウエーク）〟がありました。皮肉ですが英語のwake（おこす）と全然違います。土曜日の朝、死人をお墓で〝Vault〟に入れました。Vaultは、四〇フィート（一〇～一五m）の高さの壁の区画で、たくさんの死人を入れます。全ての死人は自分の区画を持ちます。こういう大きな壁（区画のたくさんある壁）は割と新しいと思います。長さは一〇〇～一五〇mぐらいあります。七階か十階もあったと思います。これは大都会のお墓でしたので、アメリカでもスペースの問題で、これからも多くなるでしょう。土曜日の一時頃、〝教会での

儀式〟がありました。一時間くらいでした。その儀式はパーティではなくて、人の死を悲しむと同時に祝いもするというものでした。あの人はいい人生を過ごしたし、これからいいところ、神様の親切を受けに行きますのでイエスと同じように、ある意味で蘇ることができます。儀式の後で教会の別の部屋で〝人寄せ〟がありました。マリアの両親はその教会のメンバーなので、みんな友達ですし、友達がその人寄せのための食べ物などを用意してくれたと思います。マリアの両親はその教会でよく活躍していました。人が病気になると料理をもっていってあげたり、いろいろそういうサービスをしてきたのでとてもポピュラーのようです。

三、葬式の家でのWakeと花は二、〇〇〇～三、〇〇〇ドルくらいでした。お墓での区画も三〇〇〇ドルくらいでしょう。お墓での三十分の儀式は一、〇〇〇～二、〇〇〇ドル、教会での特別の葬式だったので神父やオルガンの演奏者にもお金をあげています。全部で一〇、〇〇〇～一二、〇〇〇ドルくらいでしょうか。ここでは、死ぬ前にパッケージ・プランを買うこともできるようです。

四、高さのスペースの問題で、火葬が増えてきました。アメリカの一〇～二十％くらいになっていると思います。

五、日本ではこちらの壁の区画は見ていません。小さい岩で出来た建物はずっと前からこちら

でも、日本でもありました。岩の建物には家族全体が入りますが、場合によっては他人も一緒に入ります。
六、きれいになった死体は、こちらでも割と親しい人、親戚などが見ますが、参列者は大体見ます。

生と死は表裏一体

大西琢也

お葬式について、喪主体験をしたことはありませんが佐藤さんの送ってくださる自然人を興味深く読んでいます。
思うところは
● 全てが売り物になっていることを確信。最近は物だけでなく、精神や肉体を売りさばいたり、買いあさるようなことが目に付きます。坊主丸儲けもそこにつけこんだものだと想います。
● 生と死は表裏一体。
家族や自分の死は、いつでも傍にあるもの。いつかが、いつの間にか目の前に来て、パニッ

クにならないようにしたいです。死や葬式が日常ではないことに感謝していますが，時にはそれを身近に感じることが大切だと想います。

生きてて死んでいるような状態はごめんです。

僕の場合は時折、仮死状態の経験をするように努めています。

普段は当たり前の空気さえも、高山では貴重なものだと実感できます。

今の社会、必要なことは生と死が表裏一体であることの実感です。

●共有の大切さ

政治と宗教はタブー視されてきましたが、もっと周りの人と語ることが大切だと想います。勝手な思い込みの中でだまされたり、勘違いしたりしないように、一人ひとりの経験を共有したいですね。

地方に暮らして

本島英昭

佐藤眞生様

なつかしいお便り有難うございます。お父様を亡くされたとか、お悔やみ申しあげます。私方、女房の父を四月末に亡くしました。私共も親を葬送する年齢になって参りました。

私も、父九十三才、母八十九才で、父は毎日自宅で寝たきりの状態です。意識は、はっきりしており食事も自分で摂取しておりますが、何しろ、家族の介護は大変なエネルギーを必要と致します。

ご出版の「葬式革命」は、地方に住んでおりますとつくずくご主旨に感ずることが多々あります。当地は、六十五才以上の高齢者が三二％をしめております。わたくしもその一人ですが……。

毎日、地方紙の「山陰中央新報」には、「お悔やみ情報」が沢山掲載されています。そのため、狭い街中には「○○家葬儀会場」の看板が目につきます。

当地に居住しまして、「行恒自治会」に所属しましたが、早速その住民の葬儀がありました。一家族夫婦で三日間（通夜、葬儀、後片付け）の無料奉仕となります。勤務者は、自治会優先で会社も認める有給休暇をとっています。古い慣習は、地方ほど払拭には強い抵抗があるようです。女房の実家は、神道ですが「祝事」が中心です。仏事は、多くの行事があるようです。

例えば、

死霊（陰）

「仏教」葬儀（香典）、法要（お供え）、初七日（粗供養）
二十七日、三十七日、四十七日、五十七日、六十七日、
七十七日（満中陰忌明志）

初　盆

初盆、百ヶ日（形見分け）、祥月命日、建碑祝（開眼供養）
一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十三回忌、
三十三回忌、三十七回忌、五十回忌、百回忌

賀の祝い
還暦（六十一才）、古希（七十才）、喜寿（七十七才）、
傘寿（八十才）、米寿（八十八才）、卒寿（九十才）
白寿（九十九才）、百寿（百才）

ご主旨の内容とは異なり大変失礼致しました。
益々のご活躍をお祈り申しあげます。

お寺様の処世術

（匿名希望）

八年前に父を亡くし、昨年に母が急逝しました。お寺のことは多少は知っていたのですが、金銭に関することは総て母が握っておりましたので、母を亡くして初めて金額を知ることになりました。私の寺は、日蓮宗で葬式にかかる寺の費用は、導師十万円、伴僧五、二万円、車料

一万円、後日、祠堂料十万円、法号（戒名）料五万円を持っていきました。葬儀にかかるお寺の費用が高いことは重々知っていたのですが、この話を聞いて一番ビックリしたのは葬儀場の所長さんでした。

開口一番「安いですね、同じ町の同宗派のお寺さんなんか、無条件に百万ですよ」と言われ唖然としました。理由は、檀家が少なく運営費に苦慮しているからという辺りが想像に難くないのですが、内心複雑な思いでした。

通夜と葬儀を合わせて導師（住職）さんと伴僧（養子先の住職）の息子さんが勤められましたが、その両日とも住職は、体調と足が悪く、読経中に椅子から降りたり、地べたに座ったり、伴僧の息子さんがかなりサポートしていましたが、焼香途中での退座になりました。

当日も同様で、声のトーンも一段と低く途中でタオルを投げたくなる心境でした。後日葬儀屋さんから聞いたのですが、当日の弔電をパスして欲しいと住職さんは葬儀社の方へお願いしていたようですが、これだけはあっさり断られていたようです。

余談になりますが、その葬儀屋さんが言うにはその後の葬儀でも結構同じパターンがあったようです。

葬儀とは、セレモニーなのですから息子さんが近くにおられるのですから、お任かせになっ

ても喪主は、それに対して何も言わないと思うのですが……。

八年前の父の時には、法号料を十万円を収めていますが、私の代で、すこしずつ減額しなければ後代が続かない意親もあり四九日迄を含め十万円程減らしました。

二七日の時でしたが、時間になってもお寺さんが来られないので、電話してみたところ忘れていたような返事でした。また、百ヶ日の時には、日時は平日の夕方に設定されましたので、親族を呼ぶタイミングが取れませんでした。

初盆の時ですが、「白木の位牌はいつまでお墓に置いておくのですか」と訊いたところ、もっと早い時期に処理するもののように聞き取れました。当日に渡せなかったので、後日、お寺に伺いましたところ、期限的なものは四九日頃で終わりのようなニュアンスでした。確か葬儀後の時点では初盆くらいまでのように思えた記憶がありましたので、何となくしっくりしませんがお渡ししようとしたところ、「墓地の古塔婆置き場に置いといてもらったら、そのうち処理致します」とのことでした。

長男と顔を見合わせてデリカシーのない言葉に何とも言えない不満感を覚えました。

当寺は、他に聞くような「初盆は、法要のあるなしに関わらず一律五万円の布施」等というお寺サイドからの設定金額の依頼がありませんので、その点はありがたいのですが、お寺の本

堂に、その年の祠堂料と茶湯料が貼り出されますので、何とも極端な減額がやりにくい状況にあります。

これもお寺様の処世術かと思いました。

旅立ち

倉澤イミ子

〝人の死に様は生き様だ〟という言葉を耳にする。最近、ようやくその言葉の持つ意味の深さと重さを理解できるようになった。

私は現在、老健施設で働いている。入所者は、元政治家、教師、社長、労働者、主婦と、経歴は様々である。いつも家族や知人に囲まれている人。誰の面会もなく、洗濯物さえ業者の手に委ねている人。経歴は関係ないのである。

元気なとき、自分が自分であったとき、いかに家族や周りの人を大切にしてこられたかがうかがえる。最後の場も暖かく、愛する人たちに見守られ、穏やかな表情で眠るように旅立たれる。

反面、そうでなかった人は急変を告げても、「今は行けません」とか、「亡くなったら葬儀場

へ送ってほしい」というケースもある。それなのに亡くなったことを知らせる新聞には大きく喝采され、会場に入りきれないくらいの弔問客に送られたりする。

そんな中で、先日友人の告別式で心温まる体験をした。友人一家とは我が家と家族構成や年代も似ていた。一人っ子の娘を持ち、幼い娘を連れて二家族で旅行や食事に出かけたものである。そのご主人が闘病生活を送られていた。娘さんは既に嫁いでおり、奥さんは仕事を終えると毎日毎日ご主人を見舞われていた。ある日訃報が届いた。会場に入ると……何かが違う。弔問客は少ないが、みな故人とかかわりのある人だけで、会葬に出席した全員がお斎につき、心から故人を偲び、涙した。

喪主の奥さんの言葉には重みがあった。「最後のときを、娘と孫と私とで見守りました。嬉しかった……。葬式も心から主人との別れを悼んでくださる方だけにお集まりいただきました。」

私も最後を迎える日がやってくる。愛する家族、知人に囲まれて旅立ちたい。その日のために、家族、友人を大切に生きていきたいと思う。

葬儀に対する遺言書（試案）

錦織義宣（にしこりぎせん）（元古平田寺住職）

私自身の葬儀に対する遺言を述べておこう。多分これを発表すれば蜂の巣をつついたように同門の寺院や葬儀社、檀信徒を始め年輩の親族から喧嘩囂囂（ごうごう）非難の声が挙がることは火を見るよりも明らかである。

旧習にとらわれることなく改革するには覚悟を決めなくてはならない。私の葬儀によって葬儀仏教から脱皮し、遺族に対する心の癒しを行うのは宗教家本来の責務であり、原点に立ち返ることと、信ずるものである。

（1）冗費を省き、見栄を張らざること、旧来の葬式はしない。
（2）近隣、檀徒に迷惑をかけることなく、出来るだけ身内で取り計らうこと。
（3）葬儀社に任せ、過去近隣で行ってきた作業を省くこと。
（4）葬儀は形式にとらわれることなく、実質的に執行すること。
（5）生花、供物は辞退すること（理由：斎場狭隘であり華美を好まざるため）。
（6）祭壇は遺族において適当に設定する。

（7）一般会葬に当たるものは、午前九時より正午の間に平服でご来山いただき焼香し帰られるようにする。
（8）受付は香典拝受、ご記名を願うこと。
（9）一般に会葬御礼とするものを「御弔問御礼」とし、壱千円の商品券を封入すること。
（10）弔問客には故人の好む抹茶一服を以って謝意を表する。
（11）葬儀社、身内、檀徒の人びとの食事は業者に発注する。
（12）弔電に対しては「弔電御礼」の礼状を差出すこと。
（13）納骨は歴代廟と錦織（にしこり）家墓地に埋葬する。
（14）香典返しは「長浜和光園」に寄付すること。
（15）高齢、障害の方のため石段下に遥拝所を設け、写真・位牌・焼香台を置く。
（16）墓碑の建立は不要である。
（17）初七日、七七日忌は身内と檀徒で行う。
（18）弔問御礼に故人略歴を配布する。
（19）（9）の商品券は県外の方には「一畑」とする。県内の方には市内発売のものとする。
（20）新聞に死亡広告は出さず、市外の方には死亡通知の葉書を差出すこと。

(21) お別れの時間内には故人読経のテープを流し、本堂の一隅に墨跡（掛軸）と著書を展示する。ビデオを流してもいい。

(22) その他については遺族において処置する。

平成十六年三月二十日、八十七歳（米寿）誕生日に記す

錦織義宣著「いなかの葬式」より抜粋

「葬式革命」に寄せて

竹下　博

私は永年勤めたＪＲでの仕事を終了し、現在は第二の人生を歩むべく、浄土真宗西本願寺中央仏教学院通信教育部専修科の学生となっている者です。

かく言う私も、「葬式イコール仏教」という考え方には否定的な意見を持つ者の一人です。

私は昭和四十五年に日本国有鉄道に入社しましたが、当時、盛んだった労働問題が、私の仏教を勉強するきっかけとなりました。

最初は労働組合に所属していないことでイジメを受けました。そこで、穏和な考えを持つ

「鉄労」という組合に所属しました。その中での組合運動が、やがて政治活動へとエスカレートしましたが、活動の中で感じた様々な矛盾からノイローゼ気味となり、政治にも疑問を感じて、宗教を勉強することになったのです。

旧約聖書、新約聖書、モルモン教、成長の家、様々な宗教遍歴を経て、次の一文に出会い心に感じるところがあって、仏教を選びました。

「仏教とは、本来悩める現代人が求めてやまない『生きやすく生きるための教え』であり、個人的シュミレーションに勝る『真理へのシュミレーション』である。

戦争や殺し合いは歴史に書き残されるから目立ちますが、その陰で誰にも知られず人を愛し続けてきた慈悲の心を持った人たちが、殺したり憎悪したりする人よりもはるかにたくさんいたからこそ、人類は生き残っているのです。」（ダライ・ラマ）

この文章でした。人間の心には複雑なものがあります。憎しみ、怨み、怒り等、このような心を平穏にするのが仏の教えであり、仏教なのです。

例えば、『増阿含経』にこのように教えられています。

「美しきかな、その悪を責めず、なおよく忍ぶ。怨みをもって怨みに報いるは、草をもって火を消すが如く、慈しみをもって怨みに報いるは水をもって火を消すが如し。」

このように仏教は、人間生活の上での最上のモラルを説いているのです。

「葬式」と「仏教」、これを混同してはならないのです。

私の苦しみの中に一条の光明を放ってくれた「仏教」。私が第二の人生を託そうとしている「仏教」。その「仏教」が堕落していく現状を見るに見かねて、この一文を書きました。

私も、今の「葬式仏教」に憂いを持つ一人です。

私の現状

左藤滋光（澄禅寺住職）

私は、もともとは寺の出身ではありません。父は公務員の、ごくありふれた普通の家庭の出です。その私が、二十代初期に、坐禅道場で精神修養をしていたのですが、その道場に次のような指針が掲げられていました。

『青少年育成をモットーとし、寺院の形態をとらず、葬儀や法事には関わらぬ事』

血気盛んだったその頃の私は、この指針から〝人心救済のスーパーマン〟を意識し、非常に前向きな印象を、僧侶というものに持ったのでした。当然、このモットーを鵜呑みにしてしま

いました。そして、自分のモットーとしたのです。

もし、この指針にふれる事がなかったなら、私は、決して僧侶にはなっていなかったでしょう。ましてや、住職になる事などは。これは、今でも断言できます。それほどまでに大きな影響を与えたのです。

二十四歳の時、澄禅寺に住職に就任致しました。この寺の住職をお引き受けするにあたって「法事、葬儀はしなくてよい」という事でしたから承諾したのです。もうあれから、四半世紀が過ぎようとしています。

住職になりたての頃、こんな事がありました。村でお年寄りが亡くなったのです。

「お念仏をお願いします」

「えっ、私がやるんですかッ！」

こんなやりとりを、今でもハッキリと覚えています。そういう葬儀や法事の依頼は、何度もくり返され、村の方々の素朴な信仰心にふれるうち、私の原理主義的態度も、いつしか、やわらかくなっていったのです。

そして現在は、御縁のある方や、真心でとむらいたいという方々へは、法事や葬儀も、とり行なわさせていただいています。これが今の私の現状であります。

合掌

宗教の役割について

山本現雄（やまもとげんのう）

まず宗教とは何かということから始まるわけであるが、人により学者によって各人各様に定義されていて、これというものはない。

同じ宗教という枠で括られていても仏教とキリスト教では、神というものを立てる立てないで変わってくるのである。

人体から昆虫に至るまで巧妙な構造を思うと、神が創造したかと思える一方、この地上に邪悪な病害虫から天災地変が充満し、大地震が国の内外で頻発している。

正規の天才児ゲーテは、幼時、リスボン市の大地震で万余の死者が出て、愛の神が何とむごいことをと大疑問を抱き、以後、はっきりと愛の神・創造の神を否定する。

彼（ゲーテ）は友人ランガー宛の手紙（一七八六年）のなかで『私はキリスト教とではありません』と、はっきり言明している……

人間は誰でも結局は自分自身の宗教を持つものだと、これまで何度も聞かされていたので、私もまた自分自身の宗教をつくりあげるのが当然だと思うようになった。（『形態と象徴――

ゲーテと緑の自然科学』岩波書房）

「神」即「自然」とするスピノザの考え方にゲーテは決定的な影響を受け、強い共感を示す。宗教は迷信だと一切信じない人もいるが、その人は既成の宗教を否定しているのであって、新たに彼自身「宗教否定」という人生観ないし信念が、その人独自の宗教ということになると思う。

私は超宗派の仏教徒（個人的には親鸞や禅が好き）として天地創造の神なんか全く信じられない。地上に、この世に、あまりにも矛盾と悲惨があり過ぎるから……。

宗教はいろんな形態で世界に偏在していて往々熱心な信徒の多い所で、宗教対立の紛争が絶えないのは皮肉なことである。

火や水は、生きていくためにはなくてはならぬものであるが、その在り様や分量によっては有益便利必須のものであり、一方、火傷から火災、溺死から洪水まで危険厄介極まるものでもある。火や水自体は善悪を超えて中立無記である。宗教も火や水と似ている。

地球上くまなく経線・緯線が縦横に走っているが、大陸に、海洋に、実際線があるわけでなく、一つの決まりとして定まっている。もし経線・緯線を架空のものだと無視すれば、地上の時刻を決めるにも、学校・会社の始業時刻、陸海空の交通機関の発着は一切できなくなる。

実在しないが、なくてはならぬ経線・緯線のように、いわゆる神仏の存在もそのようにも考えられなくはない。

親鸞は〝弥陀仏は自然（じねん）のやう（様なら有様、用なら働き）を知らせん料なり〟（岩波文庫『親鸞和讃集』二一四頁）という。

一個人が「神仏は存在する・しない」と言っても、それはひとりの意見であって、否定してもしなくても、有るものはあり、無いものはない。判断保留というか中止というか、小生は孔子と同様〝怪力乱神を語らず〟

宗教教義の細かい差異を、どうのこうのとあげつらう人がいるが、教義のことをドグマといい独断という訳もあることは皮肉である。

人はそれぞれ、好み・すきずきというものがある。いかなる宗教であろうと主義主張であろうと、要は人を殺さぬ殺させぬことが最も重要であり、人に対し世間に対して善きことをし悪いことはしないこと、これに尽きる。

白楽天がある高僧に仏教とは何を教えるのかと訊ねたところ〝諸悪莫作、衆善奉行〟と。それは三歳児でも判っているが、八十の老翁でも実践はむつかしいと教えられる。

ひとりよがりの文字通り独善では、はた迷惑である。

三角形の内角の和がいつも一八〇度、円の大小に拘らず常に一定の円周率のように、信じようが信じまいが、いつでもどこでも誰にでも当てはまる不変の真理、ものの道理こそが宗教ではなかろうか。いや宗教といわなくても、その人々各個人の世界観・人生観として誰もが持つべきものと思う。

筏の喩という経典がある。仏教（教え）は用が済めば捨てよと教える。しかり、いつまでも捉えられて身動きならぬなど笑うべきことである。

〝ブッダの言ったように教えとは筏のようなものだ。ひとたび川を渡ってしまえば、筏を背負って運ぶ必要があるだろうか、渡った人にはもはや筏は必要ない。川を渡りきっても肩の荷をずっと運び続けるなら、筏をましなものにしてなんの役にたつだろう〟（スポンヴィル『愛の哲学　孤独の哲学』紀伊國屋書店）　筏の譬は『和英対照仏教聖典』（仏教伝道協会）にも出ている。

宗教は筏のようなもの、うまく利用し彼岸（あるべき理想の人生）に渡り終えたなら未練なく捨てよと教えている。全てにとらわれるな、独断を捨てよということである。

寺―発展的継承

竹内 洪（ガラス工芸作家）

「寺」は多面的な大きな価値があった。

一つは人間的な思考をしていく場として、敬虔に自己を見つめる場としての存在である。

二つには御先祖の御霊をお祀りしてくれているところとしての存在である。

三つ目は地域に密着した日常的な問題から大きな調停役までをこなしてきた。

遡り、戦国時代には精神的な観点から武術や戦術にその力を発揮し、政にも絡んできた。心、学、武に長けた総合的な権威があった。しかし、一般人から見た「寺」の存在は大きく変り、村や地域の風景、観光の景色にしかなっていない。僧侶の品格も含め、権威の欠如によるものなのか、それとも市民の学知との格差がなくなり、説得力がなくなったのか。

いずれにしても、かつての寺は地域のコミュニティーとしての核であった。地域挙げて檀家が寺を支えてきたが、子供世代は檀家の意識が何処まであるのか、帰属意識が低くなってきていることは否めない。檀家からのお布施、葬式や法事による収入に頼ってばかりいては成り立たない。

本来、仏教は葬儀をするためにつくられたものではない。釈迦の弟子であった目連が、友達の葬儀に「自分はどのようにすればいいのか？」と釈迦に訊ねた。「仏教は葬儀のためのものではない。葬儀は世俗のこと。」と言われたという。

しかし、今、多くの人が「寺＝葬儀」の感が強い。お寺は経済基盤がなければ成り立たない。なぜ寺が必要なのかという存在理由をもう一度再確認していく必要があるのではないだろうか。存在理由が見あたらなければ、寺にしがみついている必要はない。寺にしがみついていないと、先祖の供養をしてもらえないとか、葬式をしてもらえないなどということは、すでに制度疲労を起こしているのではないか。

現在の墓制度は、徳川期の檀家制度によって寺に墓が集まり、明治三十一年施行の民法で「系譜、祭具および墳墓の所有権は家督相続の特権に属す」と規定したことで、墳墓は「家の墓」として先祖代々継承するものという考えの上に成立してきた歴史がある。ここに〈家制度―墓―檀家制度―寺〉という図式が成立したといわれる。

その後、新憲法による男女平等や新民法による家制度否定といった意識が定着し、加えて経済的には豊かさの実現といった社会状況が、古い体質を引きずったままであった墓制度も、

高度経済成長期以降の人口移動の拡大が過疎過密を生み、先祖伝来の地で家の墓を守ることを困難にさせた。これまで墓を人質ならぬ墓質のごとくにして、檀家制度に依存してきた寺が、その存続すら危ぶまれるところとなった。

檀家の核家族化と居住地の拡散、高齢化が寺の収入減を招き、この結果、高額な布施の要求となり、その姿勢が人々の寺離れを生むなど、葬式仏教としての寺が問われるところとなっている。

一方過疎地で進む寺の崩壊は、寺の危機の顕著な例証で、文字どおり倒壊して柱だけが傾いて残る無残な本堂の姿や、放置された墓が草むらの中に散乱している無残な姿を各地で見ることができる。寺の後継者の問題もある。坊主は一般市民との交流が少ないため、坊主専用の「出会い系サイト」まで発信し、一般との格差の大きさを物語っている。

因みに「刹那（せつな）」と言う言葉があるが、「刹」とは「寺」の意味である。きわめて短い時間のことであるが、どのくらい短いかというと、指を一度はじくあいだに六十刹那ある（角川書店『新字源』）、あるいは六五刹那ある（岩波書店『広辞苑』）とか、一昼夜の六百四十八万分の一、一秒の約七十四分の一（ともに、講談社学術文庫『国語辞典』）とか、いろいろな説が

ある。

刹那は「ひらめき」であり瞬時の「感性、決断」である。対極に有るのが「億劫（おっくう）」である。これはオクコウがなまってオックウとなった。これはもともと「永劫」と同じように、きわめて長い時間、という意味であった。それが、暇が長くかかる→たやすくない→めんどうくさい、悠久なる時間を意味した語が、ひどく俗っぽいことばに変身したのであるが、「寺」であればこそ「刹那」と「億劫」を絡み合わせ、将来どのような「寺」にしていくのか、の図が描けないものであろうか。

私は、「伝統は守るのではなく発展である」と常々思っている。

二十年ほど前、「日本の伝統―発展的継承」というテーマで講演をしたことがある。その時に寺についても話したことを思い出す ― 「お寺も時代と共に発展し、形骸化した寺の布教活動や宗教的実践を、実質的なものに生まれ変わる挑戦をしなければならない。

薪能や鼓笛演奏、管弦楽やコンサート、精進料理やオーガニック喫茶、保育所やエコロジー、旅行者用民宿、会員制檀家……諸々。

減少していく檀家収入で法要費の高騰に頼るのではなく、人を集め、若者が寺に行きたがる

ような、時代に即した魅力ある発展的継承をしない限り、存続は難しくなる」――と。

（参考資料　読売新聞・講談社学術文庫・妙光寺・角川書店・岩波書店）

仏教という常識

桐生敏明

はじめに

人の一生には様々な儀式がついて回る。

誕生に当たっては、まずは安産祈願。妊娠五ヶ月目に安産を祈って神社に詣で、腹帯とか岩田帯と呼ばれているものを授けられ、これを捲く。生まれたら生まれたで、七日目をお七夜と称し、この日に赤ちゃんの名前を付けるのが古来からの習わし。そして、この名前を命名書に書いて神棚にお供えする。

生まれて一月が過ぎると、初宮参りといって、男子は生後三十一日目、女子は生後三十三日目に神社にお参りする。

この後も、お礼参り、七五三参りと生まれてからしばらくは神社との縁が切れないようだ。

特に「氏神」だ、「氏子」だと意識しなくても、多くの人が、このように神社と関わり、当たり前のように正月には神社に初詣をする。結婚式も圧倒的に神式が多い。最近はクリスチャンでなくても教会で式を挙げる人も増えているが、葬儀となると、俄然、日本人は「自分は仏教徒」だという意識を強くするようだ。生まれるときは「神様」で、死ぬときは「仏様」となるのが日本人の普通の姿になってしまった。

ところが最近、葬儀についてのトラブルが後を絶たない。その多くがお寺、あるいは僧侶との関係にあるようだ。こんな中、「葬儀不要」「墓不要」「戒名不要」の声もにわかに勢いづいてきた。つい先だっても朝日新聞の朝刊に、シニアの三割が「葬儀を望まず」という記事が掲載された。

しかし、一方で「葬儀は仏教でし、僧侶にお経を上げてもらい、戒名を授かり、死んだら墓に入るのが常識」という感覚が根強くある。だがこの常識、一体どこまでがホンモノなのだろうか。

なぜ、こんなことを言うかというと、そもそも仏教に「墓をたてる」という思想がない。「死んで戒名をつける」という考え方も存在しない。仏陀自身は、「僧侶が葬式に関わるべきではない」とまで言っている。

こんなことを言うと、みんなから「ウソーッ」という声が返ってきそうだが、多くの仏教国で常識となっていることが、なぜ日本では「ウソーッ」と叫ばれるような状況になってしまったのか。

先日も、ある女性からこんな体験を聞いた。彼女も「葬儀不要」「墓不要」という考え方なのだが、ある時、知り合いの町会議員の方と話す機会があったという。話題は、息子さんの結婚式の話。ところが話すうちに、「うちの息子が、結婚式は外国で自分たちだけで挙げる。たくさんの人を招いて披露宴など挙げたくないと、バカなことを言い出しよった」と怒りだしたのだ。彼の立場上、そんなわけにもいかないらしく、それがもとで口喧嘩となり、あげくは、息子さん、「そんな体面ばっかりの儀式に縛られたくない。一番いい例が葬式じゃないか、あんな金ばっかりかかる葬式、ホンモノじゃないよ。必要ないんだ」と自分の思いをぶちまけたらしい。

これには議員さん、よっぽど腹が立ったらしく「近頃の若い者はけしからん、あんた、どう思う」と、彼女に同意を求めてきた。

それをよせばいいのに、「私だって、今の形の結婚式や葬式は必要ないと思っています。お墓だって必要ないですヨ。先祖や親を敬うっていう気持ちが、どれだけ大きな葬儀を挙げるか、

どれだけ立派なお墓をたてるかにかかっているなんて、ナンセンスだと思います。せまい日本、そのうち墓だらけになってしまいますしネ。息子さんの言ってること、案外、筋が通っていると思いますけど……」と口が滑ってしまったからたまらない。

「葬儀がいらない！　仏教徒が墓をたてない！　そんなバカな話があるか！」と、怒りの矛先は遂に彼女に向かい「わしは仏教徒だ。お釈迦様を敬い、先祖を敬っとる。仏教徒が墓をたてないなど聞いたことがない。家を建てなくても墓はたてるべきだ。墓を持たない家は、いずれ衰退していく。わしが死んだら、墓がいらんというあんたの人生、これからどうなっていくか、草葉の陰からじっくり見届けてやる」ときたのです。

このことをどうこう言うつもりはないのですが、私たちは、仏教徒だからこうしなければならないとか、お坊さんが言うからとか、常識だからとか言いますが、もし、この常識の根本が間違っていたらどうなるのでしょう。

ここでは「葬式が必要だ」とか「必要でない」とか、「墓がいる」とか「いらない」とか、そんな話をするつもりは全くありません。私たちが仏教で当たり前だと思っているもの、世間で常識だと思っているものに焦点を当て、本当にそれが仏教での常識なのかを考えてみたいと思うのです。

1．西本願寺に伝わる宝物「世尊布施論」って、どんなお経？

まずは右の写真をご覧下さい。これは西本願寺に伝わる『世尊布施論』という経典です。写真撮影の許可を求めたのですが、「そんな経典は当寺には存在しません」と、あっさり断られました。それでもあきらめず問いつめると、「資料室に確認したのですが、確かに以前はあったようですが、現在は見つかりません」という答えが返ってきた。

しかたがないので、ケン・ジョセフ氏の著作から転載させていただくことにした。印刷物からのコピーのうえ、今では使われていないような漢字も交じっており、ずいぶん読みにくいのですが、でもよく見ると、どこかで聞いたようなフレーズが並んでいる。例えばこの三行目に注目してみましょう。

「始布施若左手布施勿令右手……」

どこかで聞いたことはないでしょうか。

そう、新約聖書マタイ伝「山上の垂訓」に「あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい」、あの一説です。

また一八行目の中程には「看飛鳥亦不種不刈亦無倉坑」とあります。まさに『山上の垂訓』

にある「空の鳥を見なさい。種まきもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません」、そのままです。

このほかにも、「祈るときには、偽善者たちのようであってはいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです」のフレーズや、「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。自分の宝は、天にたくわえなさい」などのフレーズが見つかるはずです。

こうしてみていけば、親鸞が学んだという『世尊布施論』という経典、何のことはない『マタイ伝・山上の垂訓』そのままの漢文訳だったのです。漢文で書かれているため、今まで仏典として、また親鸞が学んだため、西本願寺の宝物として保存されてきたといいます。

日本在住のアッシリア人で景教（原始キリスト教）の研究

家として知られるケン・ジョセフ氏は、この『世尊布施論』との出会いを次のように記しています。

私は実際、西本願寺に行って、この『世尊布施論』について聞いたことがあります。寺の人に、「景教の書物がこの寺に保管されていると、本で読んだのですけれども、それはありますか。見せてもらえないでしょうか」と聞きました。しかし、何人かに聞きましたけれども、「いいえ、そういうものはありません」と言う。

「でも、こうやって写真まで出ているじゃないですか」と、私が持っていた本を見せました。それでも「知らない」と言います。そのうち、私がねばっていると、奥の方から責任者らしいおじいさんが出てきました。

「はい、たしかにあります」

と言ってくれました。「でも、大切にしまわれているものですし、古くて傷みやすい状態なので、普通はお見せしていません」とのことでした。「でも、どうしてもと言われれば、お見せすることもしていますが、それを撮影した写真がありますから、普通はその写真を見ていただいています」と。

それで、写真を見せていただきました。それは私の持っていった本のものと同じでした。こうして、西本願寺に景教の書物があるのは本当だと知ったのです。あの浄土真宗の開祖、親鸞が、これを何時間も読んで学んだということは、私にとっても感慨深いものでした。

（ケン・ジョセフ「〔隠された〕十字架の国・日本」徳間書店）

このことは一体何を意味するのでしょうか。

私たちは、日本に初めてキリスト教が入ってきたのは、一五四九年、フランシスコ・ザビエルによってであると教えられてきました。それが親鸞の時代には、すでにキリスト教の教典が入ってきているというのです。

驚いて調べてみると、高野山にも『景教伝達碑』なるものがあるといいます。

早速行ってみると、高野山一の橋から奥の院参道に入り、二手に分かれている道を右手にしばらく歩いたところに、それはありました。まず英文で書かれた『安住家』の供養塔が目に入り、その隣に『大秦景教流行中國碑』と頭に大きく三行に彫られた石碑があります。これがお目当ての『景教伝達碑』です。

しかし『中國碑』とあるように、これはもともと中国は西安にあるもののレプリカ（複製）

だといいます。では、なぜそのレプリカが日本の高野山にあるというのでしょうか。

そのことに触れる前に、まずはその本体である中国・西安にある『大秦景教流行中國碑』について、久保有政、ケン・ジョセフ、ラビ・マーヴィン・トケイヤーの三氏の共著になる『日本・ユダヤ封印の古代史―仏教・景教編―』から、その概要を見ておくことにしましょう。

中国における景教の様子については、西安（旧・長安）で発見された有名な、「大秦景教流行中国碑」が物語っています。これは七八一年に建立されたものです。しかし、のちの迫害の時代に隠され、一六二五年になってイエズス会士が発見しました。

この景教碑や、中国における景教文書、遺物等の研究者として、佐伯好郎教授は世界的に有名です。景教碑の複製は、弘法大師・空海の開いた高野山と、京都大学文学部陳列館にもあります。

景教碑は、次のような神への賛辞から始まっています。

「大秦景教流行中国碑。中国における景教の普及を記念して。大秦寺僧侶・景浄（シリア名アダム）叙述。……見よ。真実にして堅固なる御方がおられる。彼は造られず造る御方、万物の起源、私たちの理解を超える見えない御方、奇しくも永遠に至るまで存在し、

聖なるものを司る宇宙の主、三位一体の神、神秘にして真実な主なる神である。……」

この「神」は、原文では「阿羅訶」（アロハ）という漢字です。これはシリア語またはヘブル語の「神」を意味するエロハに漢字を当てはめたものでしょう。

景教碑に記されたところによると、唐の皇帝は景教を重んじ、中国の一〇の省すべてに景教の教えを広めました。こうして国は、大いなる平和と、繁栄を楽しんだといいます。また景教の教会は多くの町々につくられ、すべての家庭に福音の喜びがあったと、景教碑は記しています。

王室の儀式、音楽、祭、宗教的慣例なども、ガブリエルという名の景教徒が担当していたと記録にあります。

当時の長安の都は、このように多分に、景教文明によるものでした。たとえば景教徒の自由と人権の思想は、中国社会に強い影響を与えました。唐の文学者・柳宗元（七七三〜八一九年）の文学の中に、奴隷解放思想などが現われるのも、この頃です。

唐の時代の中国は、中国史上、文化・文明の上でも最も栄えた時代となりました。佐伯教授は、唐の時代の中国は、景教の強い影響下にあったと述べました。その文化の中枢に、景教徒が入り込んでいたのです。この時代、日本は遣唐使を派遣して、使節を長安の都で

学ばせました。つまり、遣唐使が長安で学んできたものの多くは、純粋に中国生まれのものというよりは、多分に景教の影響を受けて発展した中国文化だったと、佐伯教授は述べています。

このように遣唐使や留学生（るがくしょう）が中国からもたらした文化というのは、多分に景教（原始キリスト教）の影響を強く受けたモノらしいのです。

九世紀に留学生として唐にわたった空海。そのもたらした密教も、どうも景教の影響を強く受けたモノの一つらしいのです。高野山の僧侶たちは、このことを否定しようとはしません。むしろ「うちは単なるグレた景教にすぎないのです」と冗談めかした話をします。また、密教で結ぶ「引」の中にも、キリスト教徒と同じ「十字」を切るという「引」が存在するというのです。ケン・ジョセフ氏は更にこうも言っています。

空海はどうして、景教にふれるようになったのでしょうか。……。

空海は、唐の時代の中国にわたりました。けれども渡る前に、すでに日本で、古代基督教徒であった秦氏、あるいは景教の人たちと接触していたようです。

空海の出身地、讃岐（香川県）は、じつは秦氏の人々が多く住んでいるところでした。その地には景教徒も多かったでしょう。また、空海の先生であった仏教僧「勤操（ごんぞう）」（七五八～八二七年）も、もとの姓を秦といいました。

空海は彼らのパワーに驚き、基督教、景教のことをもっと勉強しようとして、彼らの紹介で当時アジアの基督教の中心地であった中国の長安に行ったのだ、と述べる人々もいます。

そのとき、のちの天台宗の開祖・最澄も一緒に、唐にわたりました。最澄は日本に帰るとき旧約聖書を持ち帰り、一方、空海は新約聖書を持ち帰ったということです。ところがのちに、空海は最澄とケンカをしてしまいます。つまり二人は、景教徒たちが中国で漢文に訳した聖書を、分けて持ち帰った。じつは天台宗と真言宗の違いはそこにあるのです、と。――これは高野山のお坊さんから聞いた話です。また、岡山県の大学で教授をなさっていた岡本明郎先生も、これについて長年研究して、そうおっしゃっていました。

高野山では、空海の持ち帰った新約聖書が読まれていた、と聞きます。今も某所には、空海の持ち帰った『マタイの福音書』が保管されていると。こういったことを、当時ゴードン女史が熱心に調べて、その結果、今の高野山に景教の碑が立つに至ったわけです。

（ケン・ジョセフ「隠された十字架の国・日本―逆説の古代史―」）

これを読む限り、空海以前、景況は既に日本に定着していたようです。

聖徳太子が、イエスと同じく厩で生まれたという「厩戸の皇子」伝説も、既にキリスト教が日本に入っていたとなると、「なるほど」と納得できます。

ところで、ゴードン女子というのは、日本を愛したイギリス人女性エリザベス・A・ゴードンのことです。彼女は、キリスト教と仏教の根本同一を確信し、その研究のため中国・朝鮮を調査し、明治末期にはこの日本を訪れました。そしてまず目を付けたのが真言密教。調べるにつれ、そこに原始キリスト教の影響が深く影を落としていることに確信を持つようになり、その研究の一環として、『大秦景教流行中国碑』のレプリカをこの高野山に建てたのだというのです。

ちなみにゴードン女子は、残された人生のすべてを、この研究に捧げ、一九二五年、七十四才でこの世を去りました。最期の地は京都であったといいます。

2．お盆という行事も景教から

このように、日本人が仏教だと思っているモノの中には、原始キリスト教の影響が色濃く

残っていることが浮かび上がってきました。

それは単に思想的な面にとどまるのでなく、行事や風習の中にこそハッキリと刻み込まれています。次に、我々が今まで仏教的だと思ってきた様々な行事や風習について見ていきたいと思います。

①お盆と先祖供養

仏教にはもともとお盆という風習はありません。お盆は盂蘭盆（ウラボン）の略ですが、これは「死者の霊魂」を意味するペルシャ系のソグド語「ウルバン（URVAN）」からきたというのです（仏教学者・岩本裕博士の説）。

ソグド人には家に祖霊を迎え、供え物を共に楽しむという風習がありました。中国のお盆はこれを取り入れたモノだというのです。

また景教徒にも、「じつは先祖の霊魂の慰安を祈る風習」があったと言います。

ユダヤ人は昔から、死者の慰安のために祈る風習を持っていました。ラビ・トケイヤーにお聞きしたところ、今日でもユダヤ教においては、ユダヤ暦七月一五日の「仮庵の祭」

のときをはじめ、年に数回、先祖の霊のために祈る特別なときがあるそうです（イズコル）。

じつは中国には、ソグド人や景教徒がやって来るまで、死者のために祈る盛大な行事としてのお盆の風習は、ありませんでした。意外に思われるかもしれませんが、インド仏教にも中国仏教にも当初、お盆や、死者のための供養の行事はなかったのです。

しかし、中国は祖先というものを大切にする所です。その中国において、景教徒たちは勢心に、神の憐れみに満ちた取り扱いが先祖の霊魂にあるように祈りました。そうやって先祖を大切にする景教徒たちの態度は、中国社会でたいへん歓迎されたのです。そのために景教は、非常な勢いで人々の間に広まりつつありました。

一方、仏教は「先祖や親を大切にしない教え」として、儒教徒などから攻撃を受けていました。仏教は出家主義ですし、もともと、親を捨てないと救われないとする教えです。また先祖に執着心を持っていては修行できないとする考えですから、先祖や親への孝行を説く儒教の人たちから、さんざんに非難を受けていたのです。

それで、仏教でも先祖や親を大切にする態度を見せる必要がありました。中国の仏教僧たちは、景教徒たちに対抗し、「彼らに負けないだけの死者を弔う行事を仏教でも持とう」、と計画しました。そうやって、景教徒が中国へやって来た七世紀頃から、中国や、また日

本でも、お盆の風習が始まるようになったのです。

ソグド人とインド人の混血として生まれ、長安の都で景教教会のすぐ近くに住んでいた密教僧・不空金剛（アモガ・ヴァジラ）はまた、西暦七六六年に、仏教徒らを集めて盛大な「死者のための供養祭」を行ないました。七月一五日のことです。これは道教の「中元」の日でもあったからです。

彼らはこうして、様々な宗教概念を仏教的な概念に編成し直し、景教徒への対抗意識から、歴代の中国皇帝の慰霊のために祈りました。このようにして、中国における「お盆」の風習が、仏教行事として定着したのです。この風習は、さらに唐の時代の中国にわたった空海や最澄らを通して、日本にも輸入されました。日本でもこうして、今日見られるような「お盆」の風習が定着したのです。

（『日本・ユダヤ封印の古代史２－仏教・景教編』）

②戒名と洗礼名

次に戒名について見てみましょう。佐伯好郎教授によれば、この風習についても、もとは景教のモノだというのです。確かに仏教には、もともと死者に戒名を付けるなどという習慣も教

えもありません。本来の意味から言えば、戒名とは、教えに帰依したときに付けられる名前です。キリスト教の洗礼名と非常に似通っています。

現に空海は、中国で密教に帰依したとき、灌頂（かんじょう）の儀式を受けています。この灌頂の儀式というのは、梅の木でつくった棒で人の頭に水滴を三度注ぐ儀式です。

そして、この儀式の後、「遍照金剛（へんじょうこんごう）」という灌頂名を授かっているのです。キリスト教の「洗礼式」と「洗礼名」、それに密教の「灌頂式」と「灌頂名」、非常によく似通っています。これに反し、これに少しでも似たような慣習は仏教にはありません。しかも、灌頂ということ自体、密教以前にはなかったといいます。水滴を三度注ぐというのも、特に理由はなく、父・子・精霊の三位一体の名によって三度水をかける、キリスト教の「滴礼式の洗礼」をまねたモノだろうと佐伯教授は言うのです。

そして戒名を書いた位牌。これについても佐伯教授は、本来景教のモノであると言います。景教徒は、死者を弔う際に、亡くなった日付と洗礼名を書いた二つ折りの位牌を用いたのです。同様にお墓をつくるという慣習も仏教にはなかったモノです。

アジアにある多くの仏教国にはお墓をつくるという習慣がありません。なぜなら人は死ねば、また次の人生を生きるために生まれてくるのです。悟るまでこれを繰り返し続けると言います。

死後の世界、死後の生活があって、そこに止まるわけではないのですから、墓も供養も必要ないというわけです。

故人の思い出のために墓をつくるというのは、実は非常にキリスト教的な発想であり習慣であると言えるでしょう。

③数珠と焼香

僧侶の必需品であり、私たち一般の者でも葬式には必ず持参する数珠、これもキリスト教のコンタツ（数珠）が元になっているようです。ケン・ジョセフ氏は「一般に、仏教における数珠の発案者は、中国、随・唐時代の僧、道綽（どうしゃく）（五六二～六四五）だったと言われています。しかし、これはちょうど中国に初めて景教が入った時代で、景教徒の風習であった数珠が、仏教にも取り入れられた」のだろうと述べておられます。

この時代、『大秦景教流行中国碑』にあるように、中国において景教が全盛であったことと考えあわせると、なるほどと頷けるモノがあります。

また、焼香という風習についても、仏教には元々なかったモノです。これについても、ケン・ジョセフ氏は、「じつは線香とか焼香の風習は、もともと仏教の風習と思うかもしれませ

んが、そうではありません。仏教にははじめ、そうした風習はありませんでした。一方、インドや中国、日本にやって来た東方キリスト教徒たちはみな、香炉などによって香をたく風習をはじめから持っていました。ユダヤ人も、礼拝のために香をたく風習を、モーセの「幕屋」（神殿の原型）の時代から持っていました。（中略）また、景教の教会では、ろうそくを立て、あかりを灯しています。祈りたい人はろうそくを買い、それをろうそく立てに立てて祈るのです。これも、仏教の寺院に同じ風習があります」と述べておられます。

このように、葬儀と供養という面から、日本の文化というモノをみてきましたが、仏教とは違う日本の顔が表面に浮かび上がってきました。

生活の面、言葉の面、また神道の世界からアプローチしていけば、我々が思いもつかなかった日本が浮かび上がってくるはずです。

まとめ

今、仏教でいう常識について、ちょっと偏（かたよ）った見方かもしれませんが、一つの観点を紹介してきました。こういった作業を敢えておこなったのは、それは仏教がどうとかキリスト教がどうとかいう問題でなく、葬儀が必要なものかどうかという切り口から、自分にとって「死」と

は何か、「生」とは何かということを自由に考えてみて欲しかったからです。今まで纏(まと)っていた「宗教」とか「常識」とか「世間」とかいう鎧を脱ぎ捨てて、自由になって、この問題を考えてみて欲しかったからです。

「仏教では」とか、「キリスト教では」とか、「世間では」という発想ではなく、自分はどう思っているか、裸になって考えてみることから本当の答えが出てくるような気がしてならないからです。

第5章 死に方は生き方

―死を受け容れない生は充実しない―

どんな葬礼がいいかを決めるのは、「生き死に」をどう考えるかによると思う。生きるとはどういうことか、死ぬとはどういうことか、死生観の持ち方で葬礼は変わると思う。趣味や好き嫌いや費用の多寡だけで葬礼を決めるとしたら、人間として少し寂しい気がする。

一、人はなぜ死ぬのか？

「生命のあるものはすべて死ぬ」といわれるが、これは間違っている。死なない生き物もある。

例えば、〝単細胞生物〟は分裂を続けたとしても中味は同じだから死んだとはいえない。無性生殖と有性生殖の両方を使い分ける植物がある。〝竹〟がそうであるが、百二十年に一度だけ花を開く。これも死なない生き物である。

アメリカの砂漠で一万一千年も無性増殖を続けている〝クレオソート・ブッシュ〟やロッキー山脈で一万年以上も無性生殖で生きている〝ポプラ〟なども死がない生き物である。

それでは何故人は死ぬのだろうか？

自分が増え続けるだけの無性生殖の生き物には死がない。メスの卵子とオスの精子が結合して子供が産まれる有性生殖のほかに無性生殖もできる生き物にも死がない。

有性生殖をする生き物だけに死があることになる。

有性生殖には何故死があるのか？

それは遺伝子に死が組み込まれているからである。

両親の遺伝子は生きている間にさまざまな化学物質や紫外線などによって変質する。この変質した遺伝子が細胞などに悪い影響を与える。

子供は両親の遺伝子を引き継ぐが両親の遺伝子とは違う新しい遺伝子である。

親の変質した遺伝子と子供の新しい遺伝子が混じり合うことがあると、変質が世代を重ねるごとに蓄積されることになる。その結果、遺伝子の存続そのものが不可能になる。このような危険性を確実に回避するために体細胞にアポトーシスとアポフォーシスという二つの細胞死を組み込み、どちらからでも古い遺伝子を個体ごと消去できるようになっている。つまり、有性生殖による生命は、死による世代交代をしないと、遺伝子が変質して種として存続できなくな

るのである。さらに、人間は新しい個体と古い個体が入れ替わることによって、新しい文化・芸術・思想が創造される素地が生まれる（以上は東京理科大学・田沼靖一教授・「ＦＲＯＮＴ」二〇〇一年一月号より要約）。

二、死ぬということはどういうことか？

○役割を終えたとき死ぬ

野生動物は生殖能力を失うと死ぬという。生殖が唯一絶対の役割だからであろう。ところが、人は生殖能力を失っても死なない。確かに精子が役に立たなくなっても、閉経しても、人は生きている。これはどうしてなのだろう？

人は生殖が唯一絶対の役割ではないからだ。生殖以外にどんな役割があるのだろうか？

先ず、人は物質的な存在であり、物質世界における〝自然〟と〝社会〟に対する役割がある。〝自然〟に対応しているのは人の〝植物身〟である。人は寝ている状態でも自然界とつな

がっている。空気や水や食べ物を通じて外界とつながっているし、細胞は血液を媒介として新陳代謝を続けている。意識を失った人を植物人間というが、意識がなくても自然界と人はつながっている。生き物として生きていくことのできる最低限の機能は自然界とのつながりの中で保たれている。人には自然とのつながりにおける役割がある。

〝社会〟に対応しているのは人の〝動物身〟である。動物身は社会活動をする機能である。人は一人では生きられない生き物であり、夫婦・家族・地域共同体・職場・行政機関などとのつながりを必要としている。人には社会とのつながりにおける役割がある。

次に、人は精神的な存在でもあり、精神世界において〝宇宙〟と〝文化〟に対する役割がある。

〝宇宙〟という超自然界に対応しているのが〝無意識〟である。人は空間的に離れていても宇宙を通じてつながっている。宇宙飛行士が地球に帰還して共通して言うことがスピリチュアル・ワンネスという言葉であることを思うと、人は宇宙的に一体なのであろう。人には宇宙という見えない世界との関係における役割がある。

〝文化〟に対応しているのが〝意識〟である。文化は人の意識的な活動の最たるものである。人が生殖能力を失っても生きている最大の理由はこの文化的伝承という役割があるからではな

いかと思う（以上は石川光男著「自然に学ぶ共創思考」を参照）。

人は自然・社会・宇宙・文化によって生かされている存在である。人には、自然や社会とのつながりにおける役割があり、宇宙との関係における役割があり、文化を伝承するという役割がある。ただ個々人の役割は一人一人が直観して自覚するものであって、普遍的なものではない。太古の時代から日本には大人になるための試練があった。奈良県大峰山では十五歳の少年を断崖から逆さ吊りにして人としての誓をたてさせる風習があった。静岡県川奈村には三角のマキの上に座らせて太いマキで打つ風習があった。首を締めて一時気絶させ再び生れ変わったという気持ちで宮参りをする風習が行われていた地方もあった。これらは役割自覚を持ったものを大人として扱うという風習である。自分が自覚した役割を果たせなくなった時、人は死ぬ。

アイヌの人々は、いみじくも、死はこの世での任務のひとつの終りであると考えていた。縄文人にもこの思想があったに違いない。

○死ぬことは生命の連鎖に入ること

有性生殖をする人は、三十代遡ると一億人になるという。一億人の親類である。今、ここにいる自分には一億人の遺伝子が受け継がれているということである。そして、やがて自分も

一億人の一人になる。死ぬということはこの1億人の連鎖に入ることである。もし、たった一人の自分がいなかったら一億人目の一人につながらないということなのだ。これは凄いことである。個体の死はつまらないことのようだが、種の存続にとっては実に荘厳な死である。大いなる死なのである。

同じことを次のようにいう人もいる。「私は、人間がいなくなっても、それは人間の消滅ではない。生命の消滅ではない。それはまたひとつの流れのなかにはいって流れゆくのだ、と考えます。生命のエネルギーのもとに、分子のひとつとして生まれた人間が、出発点に戻る。生命の坩堝（るつぼ）に向けて、回帰していく。出発点に戻るのです。つまり死ぬということを「還る」、「帰る」というふうにとらえます。そう考えれば死ぬということは恐いことでも困ったことでもない気がします。」（「天命」・五木寛之著・東京書籍）。

○死ぬことは普通のこと

縄文人は、夜死に、朝生まれると思っていた。毎日が死と生の循環であった。生の中に死があり、死の中に生を見た。生と死は無関係なものではなく、また、対立し矛盾するものでもなく、一体のものと思っていた。そして、平均寿命が三十歳前後という若い肉体の死を日常茶飯

のことと感じていた。主な死因は感染症であり、自然災害であった。だから、生きていることは予想外で不思議なことであった。死ぬことの方が当たり前で普通のことだった。だから、死を日常的に受け容れていた。ここが現代人とまったく違う。

現代人は死を遠ざける。切羽詰まるまで考えない。縁起が悪いと言って忌避する。しかし、死は自分の体の中で毎日起きている。六十兆あるといわれる人の細胞は毎日一兆が死んで生れ変わっている。新陳代謝といわれるが、これは生き死にそのものである。

生と一体としての死を受け容れるかどうかで生き方が変わる。死を日常的に直視し、おおらかに受け容れると生が鮮明になる。充実した生があれば死は取るに足らないものとなる。

世界の八〇〇〇メートルを超える十四の高峰を無酸素で登頂したラインホルト・メスナーは「死の恐怖を感じたことはない。それは死が自分にとっては取るに足りない問題であるからだ。」と言っている。

兵庫・生と死を考える会の調査（平成三年）によると、子供が死を自覚する年齢は男女とも7歳くらいのようである。死を自覚するといっても、「人はいつか死ぬ」という確信である。

ところが子供の死に対する受けとめ方は特別のものではない。ごく普通の出来事として受けとめている。子供は精一杯生きているからなのだろう。生きている今が活き活きしているからなのだろう。生命が活き活きした生活に熱中している。

大人になるにつれて死は重くて怖くて特別のものになる。普段は出来るだけ考えたくないことになる。子供との対比で考えると、大人は子供のように生きることに熱中していない。生きている今が充実していない。だから、死んでしまえば元も子もないと思ってしまうのだろう。

縄文時代、祭りは葬礼から始まった。祭りの起源は葬礼だった。古事記や日本書記には縄文時代から続く民俗や生活のならわしを記述していることが多いが、日本書記に葬礼が祭りだったという次のような記述がみえる。

「イザナミノミコトを熊野の有馬村に葬る。土俗（くにひと）、此の神の魂（みたま）を祭るには、花の時には亦（また）花を以て祭る。」

そして、「イザナミノミコトの死によって穀物が生まれた」とある。葬礼は祭りとして行われたし、死は生の祭りでもあった。死の別れは悲しいが、それは再生の祝いでもある。アイヌの人々が、死にも生にもハレとケをみる、その受けとめ方と実によく符号している。

○臓器移植は殺人罪

死ぬということを科学的に言うと、それは昔から呼吸と心拍の停止ということであった。心臓死が死であった。この死の概念を人為的に捻じ曲げたのは臓器移植を認めるためであった。

生命現象とは外界から消化吸収した栄養と酸素を反応させて、エネルギーの渦をめぐらせながら旧くなった細胞を新しくつくりかえ、これによるエイジング（老化）を克服するシステムである。生命の本質のリモデリング（新陳代謝）は、腸からの酸素と栄養の吸収がなければ始まらない。生命は腸から発生するのであり、腸が生きている限り、その人は生きている。生命の本質の心や魂は腸管内臓系の五臓六腑にある。心臓が生きていても脳の機能が止まっていれば脳死、つまり、人としての死であるとする臓器移植は殺人罪ということになる（以上は西原克成著「内臓が生み出す心」から要約）。

三、死ぬのが怖い？

多くの人々は死に恐怖を抱く。誰も死んだ経験がないからだ。“臨死体験”というのがあるではないかと言われそうだが、臨死体験は死そのものではない。誤解を恐れずに言えば単なる仮死状態である。仮死状態からの蘇生はあっても、本当に死んだ人が生き返ったことはない。

わからないことは怖い。誰も経験したことのないことは怖い。当たり前である。

人々が死を怖いと思うのは、「死ぬのは苦しいか？」、「死んだらどうなるのか？」という懐疑があるからだろうと思う。

しかし、死の恐怖の実体それ自体が問題だという指摘もある。それは未体験で未確定のイメージについて怖さを感じることは本当は難しい筈だ。それ故、「死に対する恐怖は死について人間が思考しはじめるときに生じる」のではないか。ところが、他方では人間の意識には死の恐怖を回避する力も備わっているので、結局は「死に際して思い残すことがあまりにも多いことに恐怖する」のではないか（「死生論」・西部萬著・日本文芸社）というわけである。

死んだらどうなるかについては、もっぱら考え方の問題なので次に譲ろう。ここでは先ず、死は苦しいことなのかどうかを考えてみよう。

○死ぬときは痛くないようにできている（高柳和江著「死に方のコツ」―飛鳥新社―より引用）

医学的には断末魔の苦しみなどというものはありえない。最後の段階では意識が低下するため、痛み、苦しみは感じない。心臓が止まりかけるほどの状態では、血液が脳に充分行かず、酸素不足で頭はぼうっとしている。人間の身体は誰でも死ぬ瞬間には痛くないようにできている。

○自然な死に苦しみはない（高柳和江著「死に方のコツ」―飛鳥新社―より引用）

自然な死、たとえば老衰で亡くなる人の死は本当に穏やかで、ちっとも怖くない。年をとると、眠っている時間が長くなる理由はいろいろあるが、たとえば身体が弱ってくると、生きるのに必要な栄養や水分がうまくとれなくなるため、脱水症状を起こし、意識がふわふわしてくることなどによる。脱水症状は決して苦しいものではなく、軽い陶酔感を伴う。

○脳内物質エンドルフィン（高柳和江著「死に方のコツ」―飛鳥新社―より引用）

医学的には、死の瞬間にはエンドルフィン、エンケファリンという脳の快楽物質がどっと分

泌されることがわかっている。経験をつんだ多くの医師は、このことを知っているので、死を恐れる気持ちがまるでない。

○臨死体験者は死を怖がらない（羽仁進著「大いなる死」―光文社―参照）

〝空中から自分を見下ろしている〟、〝不思議な快感につながる意識を持つ〟という臨死体験とは何かについて二つの説があるようだ。ひとつは「死にゆく脳の見たイメージ」という説、もうひとつは「死のあとに来る世界が提示されている」という説。どちらにしても仮死状態もしくは極限状態における幻覚に違いない。同じようなことは、薬物による幻覚体験、完全に外界と遮断された場所に閉じ込められた人間、酸素欠乏症、極度の疲労、オカルトのアストラル体（幽体）離脱などの場合にも確認されている。ただ、これらの体験者に共通していることは〝死が怖くなくなる〟ということである。こういう体験をすると、自然なこととして死を受け容れるからであろうか。

○今を生きている充実感

今を精一杯生きていれば死は取るに足らない。生命が活き活きするような生活をしておれば

死は怖くない。自分が自覚した役割を果たす生き方ができれば死はひとつの区切りでしかない。自分に与えられた生が終わるということは、人の種としての大いなる生への恩返しである、そう思えれば悠然と死に従うことができる。

○死をタブー視しない

日本人は死をタブー視する。駐車場の番号やマンションの室番から四番や四二番をはずす。日常的な会話を避ける。なぜ、そんなことをするのだろう？　今を活き活き生活していないからではないのだろうか？　今の生活に自信を持ち、満足していないからではないのだろうか？

生まれて、成長して、生活をし、最後に老いて死ぬ、これは当たり前の流れである。死は予想外のことではなく、普通のことなのである。夫婦や親子で死について気軽に話す方がいい。飼い犬や猫、金魚が死ねば、〝可哀想ね〟、〝お墓に埋めよう〟と気軽に話すのに、どうして人の死になると口を閉ざすのだろうか？普通のことなんだから、普通に話せばいい。死が日常化すれば死は怖くなくなる。

○死期を知る

像は死期がわかるという。そして死期を知ると絶食を始め、そっと群れを離れて死に場所へ赴く。仲間に死に姿を見せないという。他の野生動物にも死期を知り、像と同じような行動をとるものが多い。

昔、瞑想と禁欲の世界に生きる行者たちの多くは、死期を悟ると断食の行に入っていったそうである。最初は五穀を断って木の実・木の根のみを食べる木食の行から入り、やがて葉先の露のみの完全な断食へと入ってゆく。その行に入って一週間か二週間後に、体は枯れ木のようになり、枯死（仮死）状態となる（「納棺夫日記」・青木新門著・文芸春秋）。

人間にも死期はわかる。わかるというよりもかつて殆どの人間は自分の死期を知ることができたようだ。妻・縫子の祖母は死に際に家族を呼び、一人一人に言葉をかけて、「守ってあげるからね」と言い残して逝ったという。ところが、最近は死期を知ることができる人間が極端に減っているという。そのわけはいろいろ考えられるが、私は人間の直観力が失われたからだと思っている。死期がわかれば死は怖くないと思う。計画して死を迎えられるからである。

大命解という占いで死期を計算できるようである。その概略はこうである。

生年月日を基準にして、まず、その人の「表輪廻と裏輪廻」を求める。輪廻とはここでは考え方の傾向や性格もしくは運命の方向という意味である。これが九つある。種・芽・葉・根・

花・実・流・幹・土である。表は社会性、裏は個性に対応している。次に、死期に関する運命の始まり（運に乗る時期）である「基準年齢」を求める。そして、その基準年齢から「十年毎の年輪運・月輪運・日輪運」を計算する。これによって、「特に注意が必要な運命の変化期」を予測できる。根と実と流の時期とその組み合わせが変化期になる。大命解の過去の実証では、年輪運で六三％の人々があてはまっており、月輪運との組み合わせでは年輪運にあてはまる人の七一％が大命解に対応しているという（「自分の死ぬ日がわかる本―大命解の不思議」・小林多助著・現代書林）。

この方法でおおまかにでも自分の死期を予想することはできる。死期を知ることは生そのものの計画であり、生の充実に有効である。

四、死んだらどうなる？

死んだらどうなるか？　誰も死んだことがないのでわからない。

聖書では、人間は「肉体」と「霊」からなっているという二元論が展開されている。簡単に言うと、霊は生命の本体で、肉体はその衣装のようなものとされる。肉体はせいぜい百年しかもたないが、霊は永遠に存続する。そして、人の意識の本体は、実は霊のほうにあるという思想だ。だから、聖書の論理に立つ人には、肉体が死んだあとの霊がどうなるかということが最大の関心事となるのである。（中略）この思想に立つと、人間は霊の幸福を第一にするようになる。肉体の存続にしがみつくことが少なくなる。つまり、際限なく肉体の死をおそれることがない（以上は「聖書がわかればアメリカが読める」・鹿嶋春平太著・ＰＨＰ研究所より抜粋）。

仏教ではどうかというと、イエスより六百年も先に釈迦は、〝死ぬという事実を悟りきってしまう〟という方法を見出している（以上は「キリスト教のことが面白いほどわかる本」・鹿嶋春平太著・中経出版より要約）。つまり、釈迦は霊界のような見えない世界を認めていないのである。

日本の仏教も親鸞までは釈迦の流れをくんでいた。以下、「納棺夫日記」（青木新門著・文芸春秋）から、そのあたりの事情を抜粋しよう。

わが国のほとんどの宗教では、人が死んでも霊魂がさまようことが前提となっている。そのことが一本線香や位牌や追善供養といった霊魂に関わる葬送儀礼様式や風習を生んできた。しかし、親鸞は何日間も、何ヶ月間も、さ迷う霊魂に関しては完全に否定していたのである。親鸞の中有（中陰）の理解は、宮沢賢治の臨死体験の詩「眼にて云う」にあるような、体外離脱した私が、宙に留まる時間を指しているようである。死体や霊魂や死後の世界などは、さんたんたる世界にいる人々の関心事であっても、死者にとっては、さわやかな風の世界からすきとおった世界へ往くだけである。そこには死もないから「往生」という。釈迦や親鸞には、霊魂や死後の世界など介在する余地もなかった。死さえなかった。あったのは大涅槃だけであった。確かに死骸はあったにちがいない。しかし、それは光の世界（真仏土）へ往ってしまった後に残った蝉の抜け殻みたいなものである。

死後の世界については宗教の役割が大きいが、その宗教が今社会に貢献できなくなってしまった。その理由はいろいろあろうが、とりわけ仏教については次のような指摘がある（梅原猛「反時代的密語」朝日新聞二〇〇五．七．一九号）。

「最近、仏教書がよく売れ、仏教復活の空気が出てきたという。（中略）果たして仏教の復

活は可能であろうか？この問いに対して、私は残念ながら否と答えたい。現代の仏教は道徳を忘れているからである。（中略）道徳を失った宗教は滅びざるを得ない。」

ここで指摘されている道徳とは、「悪をするな、善をせよ」ということである。悪とは、十善戒に言う殺生・盗み・邪淫・うそ・真実を離れて巧みに飾り立てた言葉・悪口・二枚舌・欲深さ・怒り・間違った考えである。そして、善とは六波羅密の徳をいい、布施（施し）を行うこと・規律を守ること・我慢すること・精進（心身を清く保つこと）・精神を統一して真理を考えること・知恵（道理を知り正しい判断をすること）を指す。

死後の世界はあるのか？　あるとすればそれはどんな世界なのか？　こういうことについて最早宗教に期待することはないようである。われわれ普通の市民が定見を持たなければならない時ではないかと思う。

私が実施した葬送アンケートによると、「意識体としての魂が永遠に存在し、魂は再生する」と思っている人々が四四％、「精神は消滅するけれども肉体は遺伝子を通じて引き継がれる」と考える人々は二九％だった。

どんな調査をみても、〝宗教団体に属する人〟は一〇％前後、〝信仰を持っている人〟は三〇％前後である。宗教人でなくとも、魂の存在と再生を認める人が多いことがわかる。

ところが、小学校高学年に対するこんなデータもある（日本女子大・中村博志教授の調査）。「一度死んだ人間が生き返るということがあると思うか」という質問に、次のような回答が出ている。

〝ある〟　三三・九％
〝ない〟　三三・九％
〝わかなない〟　三一・五％

小学校高学年といえば、九〇％以上が死を自覚している。それが、死というものの重要な内容のひとつである死者の再生ということになると〝ある〟と〝ない〟と〝わからない〟がほぼ三分する。これは一体誰の責任なのだろうか？子供の疑問に対して親が死を避けて真理を伝えず、自身も死に対する定見を持っていないからではないかと思う。こんなことでいい生き方ができる筈がない。

不滅の魂、再生する魂などある筈がない。これは宗教の創作である。多くの人々が不滅の魂

を認めるのは、死後の不安を軽くできるからであろう。また、この世の生き方に自信が持てず、不満が強ければ強いほど不死の魂に対する期待は膨らむ。さらに、人だけがお互いに殺し合いをし、不本意な死、無念の死が生まれた結果、そこで氾濫した不満が魂を求める気持ちを高めたという主張もある（羽仁進著「大いなる死」―光文社）。

私も魂という言葉を使うが、それは清く美しい心とか、とてつもなく大きく包み込むような心、あるいは人類に普遍の心というような意味で使う。魂というのは所詮そういうものではないのか？

死んでも不滅の魂がいつか再びこの世に再生する、そう信じることができれば今回はうまくいかなかったけれどもこの世の人生はまたやり直せる。宗教はこれを輪廻転生という。たわいもない絵空事である。そんなことを信じるくらいなら、この世の生き方を後悔のない、活き活きしたものにする努力をした方がいい。この世の生き方が充実していれば死後の世界などいらない。どうして、あの世が必要なのだろうか？

真理はこうだ。

死んだら肉体はバクテリアや微生物の糧となり新たな生命を育み、やがて骨になり、最後に骨は水になる。沖縄・久高島の風葬はこの真理に最も忠実な葬礼である。火葬や墓はこの真理に反する。人は死んで自然と同化するのである。

精神（心）は、肉体の働きである。肉体と同じような物質ではない。精神（心）とは、腸の消化吸収能力と好き嫌いそのものである。精神（心）は腸の機能なのである。だから、脳を移植しても何の変化も起こらないのに、腸を移植するとドナーの欲望が移植され、患者の人格が変わってしまうのである。この事実からみて、人は死ぬと精神（心）も消滅する（西原克成著「内臓が生み出す心」―日本放送出版教会―より要約）。

死ねば肉体も精神（心）も滅ぶ。しかし、肉体は遺伝子を通じて子々孫々に引き継がれる。その意味で肉体は死なないといえる。しかも、人という種の存続にとって個人の死は不可欠であり、大いなる役割を果たすことになる。

子や孫が祖父母や曽祖父母に似ているのは、魂の再生ではない。引き継がれた遺伝子によるものである。何の不思議もない。至極当たり前のことなのである。

祖先を大事にすることはとても意味のあることである。戒名をつけたり、仏教の法事を坊さんの言うがままにすることとは違う。むしろ、家系図を正確にしるし、祖先の一人ひとりがどんな役割を果たし、なにを伝承していったかを丁寧にたどる過去帳をそなえた方がいいと思う。

葬式革命　－坊さんのいない葬式－

紙版　初版発行　2006 年 1 月 10 日
デジタル版発行　2011 年 4 月 20 日

著　　者　　佐藤眞生
装　　幀　　仁井谷伴子／安芸早穂子
紙版発行　　株式会社かんぽう
デジタル版発行　　ＤＥＰ（株式会社シルクふぁみりぃ）
TEL 0745-60-2696　FAX 0745-60-3098

© Mao Sato, Printed in Japan 2006 / digitalization 2011